

姿川第一小南遺跡

(第1・2次調査)

令和5年3月

宇都宮市教育委員会

序

姿川第一小南遺跡は、宇都宮市の西側を流れる姿川沿いの台地上に所在する遺跡で、人の住みやすい立地であることから、周辺には辻の内遺跡や花の木町遺跡など多くの遺跡の存在が確認されています。

本遺跡の調査において、古墳時代前期～平安時代にかけての竪穴住居跡が123軒確認され、周辺の遺跡とあわせて考えると、古代河内郡における拠点的なムラの存在が確認できたことになり、現在の西川田町や幕田町の源流とも言える場所であったと推測されます。

このような貴重な資料をまとめた本報告書が、本県の古代の歴史を解明するとともに、地域史を紐解く上での参考となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査及び報告書の作成にあたり、ご尽力を賜りました、栃木県教育委員会及び埋蔵文化財センター並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

令和5年3月31日

宇都宮市教育委員会

教育長 小堀 茂雄

例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市西川田・葛田町に所在する「安川第一小南遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書で、第1・2次調査分を収録する。
2. 発掘調査は、トヨタウッドニューホーム（旧社名USK）株式会社が施行する「みやの森ニュータウン」建設に伴うものである。事業主の依頼により宇都宮市教育委員会を調査主体とし、事業主より委託を受けた株式会社日本産業史研究所が調査実施にあたった。
3. 野外調査は、第1次（A区）が平成4年5月～12月、第2次（B・C区）が平成5年2月～7月に本調査を実施した。整理・報告書作成作業は、平成6年に過半を終了したが、諸般の事情で一時的に中断し、令和3年8月より再開して断片的ながら令和4年12月まで実施した。
4. 野外調査は、水野順敏、中島雄一が担当し、整理・報告書作成作業には新井 潔、菅間智子の協力を得た。
5. 調査体制（令和4年度：報告書作成時）

宇都宮市教育委員会（調査主体者）

株式会社日本産業史研究所（調査実施者）

教育長	小堀 茂雄	水野 順敏 調査担当者
文化課長	山口 達雄	新井 潔 整理・報告書作成
文化課主幹	今平 利幸	菅間 智子 整理・報告書作成
文化課長補佐	井上 俊邦	
文化財保護グループ係長	近藤 真	
文化財保護グループ	星野 治彦	
	田中 宏通	

6. 本調査の記録及び出土土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。
7. 野外調査・整理・報告書作成作業において、下記の諸機関及び各位よりご指導とご助力を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。
トヨタウッドニューホーム株式会社、栃木県教育委員会事務局文化財課、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター、興和産業株式会社、荒川竜一、上野修一、内山敏行、大塚雅之、神野安伸、野澤 宏、橋本澄朗、堀 静夫、梁木 誠

（敬称略、順不同）

凡 例

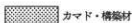
1. 本遺跡の略号は、「スガー1」で遺物の注記はこれによる。各遺構の略号は以下の通りである。SI＝竪穴住居跡、SB＝掘立柱建物跡、SA＝溝跡、SZ＝古墳、SK＝土坑、SE＝井戸跡、SIX＝方形竪穴、SIX＝円形・方形周溝遺構、SD＝溝跡を示す。
調査時に使用の遺構の略号を次のように変更した。HT⇒SI、HD⇒SB、A⇒SKもしくはSE、M⇒SA、また、SI（竪穴住居跡）とSD（溝跡）は略号のみの変更で、遺構番号の変更はない。SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、SE（井戸跡）は遺構番号の変更も伴う。遺物注記は調査時の略号・遺構番号を使用しているが、本報告書で使用する略号・遺構番号が最終的な遺構の番号とする。
2. 第1図は、国土院発行の1/25,000地形図「宇都宮西部」を部分複製し加筆した。
3. 遺構実測図は縮尺1/80を基本とし、一部1/40、1/100、1/160で掲載したものもあり、各図に縮尺スケールを明示した。遺物実測図は縮尺1/4を基本とし、一部1/2、1/3、1/6で掲載したものもあり、各図に縮尺スケールを明示した。
4. 遺構断面図等の北の方位は座標北を示す。土層・断面図の水準線上の数値は、海抜標高を示す（単位：m）。
5. 採図の遺物番号は、本文・写真図版と共通で、前が遺構番号、後が遺物番号である（○-○）。なお、調査区内出土土遺物は縄文時代と中・近世それぞれ通し番号で、本文中で出土位置を示している。遺物実測図中の拓本は、中軸線のある場合は右に内面、左に外面の拓本を配置した。断面のみの場合、拓本が1点の時は断面の左側に外面（例第209図上段）、拓本が内外面で2点の場合は断面の右側に外面、左側に内面（例第209図下段）を配置している。
6. 遺構断面図で使ったアミ掛けは以下の通りである。



焼面



焼土



カマド・構築材



炭化物・材

遺物実測図のアミ掛けは各図に示してある。土器断面のスピベタは須恵器を示す。

7. 土層説明における略号は、R＝粒、B＝塊、L＝ローム、S＝焼土、N＝粘土、C＝炭化物、KP＝黒沼バミスを示す。遺構断面のD＝間仕切溝、P＝ピット、R＝掘削、Tr＝トレンチ、St＝石材、●＝土器、○＝石製品・礎、★＝金製品を示す。遺構配置図の塗りかまはカマド・炉跡等を示す。また、遺構配置図（1～3）の溝跡に記した小文字アルファベットは溝跡断面の記録位置を示す。溝跡と竪穴住居跡の重複で溝跡が切れている場合、竪穴住居跡の上場を点線とし、竪穴内に溝跡の範囲を示さなかった。古墳もこれに準ずる。
8. 本文中の遺物説明の中で、土器類の杯で「模倣型」との記載は「須恵器模倣型」の略である。

引用・参考文献

- 赤石澤 亮 1988 『開道遺跡』 宇都宮市文化財調査報告第25集
- 植田隆司 1999 『内溝槽形形鏡板付帯の馬具』『龍谷史談』第111号 龍谷大学史学会
- 内山敏行 2016 『古墳時代中期の下毛地域と東谷・中島地区遺跡群』『とちぎを掘る―栃木の考古学の到達点―』 栃木県考古学会編 (有) 随想舎
- 内山敏行 2021 『地域間関係と交通を考える馬具』『馬と古代社会』 佐々木史一・川尻秋生・黒澤和彦編 八木書店
- 宇都宮市教育委員会 2017 『宇都宮市遺跡分布地図』
- 宇都宮大学考古学研究会 2003 『塚山西古墳 塚山南古墳』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第48集
- 木村 等 1981 『辻の内遺跡』 栃木県教育委員会
- 久保哲三 1990 『茂原古墳群』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第28集 宇都宮市教育委員会
- 後藤信祐他 1987 『花の水町遺跡―栃木県子ども総合科学館(仮称)建設に伴う発掘調査報告書―』 栃木県埋蔵文化財調査報告書第83集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- 今平利幸 1991 『栃木県における古墳時代前期の壙穴』『栃木県考古学会誌』第13集 栃木県考古学会
- 今平利幸 1994 『雷電山遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第34集
- 今平利幸 2006 『西下谷田遺跡―弥生・古墳時代前期編―』 宇都宮市埋蔵文化財報告書第56集 宇都宮市教育委員会
- 今平利幸 2012 『塚原古墳』 宇都宮市埋蔵文化財報告書第78集 宇都宮市教育委員会
- 今平利幸 2016 『栃木県における古墳時代の幕開け』『とちぎを掘る―栃木の考古学の到達点―』 栃木県考古学会編 (有) 随想舎
- 佐々木雄雄・小野麻人・小久原治編 2007 『辻ノ内遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第61集 宇都宮市教育委員会
- 芹澤清八・阿部 茂 1992 『辻の内遺跡・柿の内遺跡』 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- (財) 栃木県文化振興事業団編 1999 『東谷・中島地区遺跡群』1 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
- (財) とちぎ生涯学習文化財団編 2002～2011 『東谷・中島地区遺跡群』2～11 栃木県教育委員会・(財) とちぎ生涯学習文化財団
- (公財) とちぎ未来づくり財団編 2012～2013 『東谷・中島地区遺跡群』12～16 栃木県教育委員会・(公財) とちぎ未来づくり財団
- 中村信博 2016 『縄文時代のはじまりと試行錯誤の時代』『とちぎを掘る―栃木の考古学の到達点―』 栃木県考古学会編 (有) 随想舎
- 前原義之・柏崎広伸・水野順敏・篠原祐一 『おしめ尽遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第94集 宇都宮市教育委員会
- 水野順敏・新井 潔 2008 『奥州第一小南遺跡(第3次調査)』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第71集 宇都宮市教育委員会
- 桃崎祐輔 2005 『(5) 稲倉21号墳・8号墳出土馬具の検討』『稲倉古墳群―福岡県行橋市大字稲倉所在の稲倉古墳群調査報告―』 行橋市文化財調査報告書第32集 行橋市教育委員会
- 梁木 誠・大塚雅之他 1991 『前田遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第29集 宇都宮市教育委員会
- 梁木 誠・澁谷麻友子・近藤 真 2019 『北若松原遺跡・若松原南遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第105集 宇都宮市教育委員会

目次

序

例言 凡例 引用・参考文献 目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と調査の概要	1
第3節 調査の方法	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 遺構と遺物	5
第1節 竪穴住居跡	5
第2節 掘立柱建物跡・櫓跡	116
第3節 古墳	131

第4節 土坑	136
第5節 井戸跡	142
第6節 方形竪穴	144
第7節 円形・方形周溝遺構	144
第8節 溝跡	147
第9節 その他の遺物（縄文、中・近世）	153
第4章 総括	155
第1節 土地利用の変遷の概略	155
第2節 遺構・遺物について	157

写真図版

報告書抄録・奥付

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表

第2表 編物跡石計測表

第3表 土坑一覧表

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡
第2図 調査区位置図
第3図 第1号竪穴住居跡・掘方
第4図 第2A・2B号竪穴住居跡
第5図 第3号竪穴住居跡・カマド、第25号溝跡
第6図 第4A・4B号竪穴住居跡
第7図 第4A・4B号竪穴住居跡カマド
第8図 第5号竪穴住居跡・カマド
第9図 第6号竪穴住居跡・カマド
第10図 第7号竪穴住居跡・掘方・カマド、第23号溝跡
第11図 第8号竪穴住居跡・掘方
第12図 第9号竪穴住居跡
第13図 第10・35号竪穴住居跡
第14図 第11号竪穴住居跡・カマド
第15図 第12号竪穴住居跡・カマド
第16図 第13号竪穴住居跡、第7号土坑
第17図 第14号竪穴住居跡・カマド
第18図 第17号竪穴住居跡・カマド
第19図 第18号竪穴住居跡・カマド

第20図 第19号竪穴住居跡・カマド
第21図 第20号竪穴住居跡・カマド
第22図 第21号竪穴住居跡・カマド
第23図 第22号竪穴住居跡
第24図 第23号竪穴住居跡・カマド
第25図 第24号竪穴住居跡・カマド
第26図 第25号竪穴住居跡・カマド・カマド掘方
第27図 第26号竪穴住居跡・カマド
第28図 第27号竪穴住居跡・カマド
第29図 第30号竪穴住居跡
第30図 第29号竪穴住居跡・カマド・カマド掘方
第31図 第31号竪穴住居跡・カマド
第32図 第32号竪穴住居跡・カマド
第33図 第34号竪穴住居跡・カマド
第34図 第36号竪穴住居跡・カマド
第35図 第33号竪穴住居跡・掘方・カマド
第36図 第37号竪穴住居跡・カマド、第10号土坑
第37図 第38号竪穴住居跡・カマド
第38図 第39号竪穴住居跡・カマド

第39図 第40号竪穴住居跡・カマド
 第40図 第41号竪穴住居跡・カマド
 第41図 第42号竪穴住居跡・カマド
 第42図 第43号竪穴住居跡・カマド
 第43図 第44号竪穴住居跡
 第44図 第45号竪穴住居跡
 第45図 第46号竪穴住居跡・カマド
 第46図 第47号竪穴住居跡
 第47図 第48号竪穴住居跡
 第48図 第49号竪穴住居跡・掘方・カマド
 第49図 第50号竪穴住居跡
 第50図 第51号竪穴住居跡・カマド（北・東）
 第51図 第52号竪穴住居跡・掘方
 第52図 第54号竪穴住居跡・カマド
 第53図 第53A・53B 53号竪穴住居跡・掘方・カマド
 第54図 第55号竪穴住居跡・カマド
 第55図 第56号竪穴住居跡・カマド
 第56図 第57号竪穴住居跡・カマド
 第57図 第58号竪穴住居跡
 第58図 第60号竪穴住居跡
 第59図 第61号竪穴住居跡
 第60図 第63号竪穴住居跡
 第61図 第59号竪穴住居跡・カマド
 第62図 第62号竪穴住居跡
 第63図 第64A 号竪穴住居跡
 第64図 第64B 号竪穴住居跡
 第65図 第65号竪穴住居跡
 第66図 第68号竪穴住居跡
 第67図 第66号竪穴住居跡・カマド
 第68図 第67号竪穴住居跡・カマド
 第69図 第69号竪穴住居跡・カマド
 第70図 第70号竪穴住居跡
 第71図 第71号竪穴住居跡、第12号土坑
 第72図 第73号竪穴住居跡
 第73図 第72号竪穴住居跡・掘方・カマド
 第74図 第74号竪穴住居跡・カマド
 第75図 第75号竪穴住居跡・カマド
 第76図 第76号竪穴住居跡・カマド
 第77図 第77号竪穴住居跡・カマド
 第78図 第79号竪穴住居跡
 第79図 第80号竪穴住居跡・カマド
 第80図 第78号竪穴住居跡・カマド
 第81図 第81号竪穴住居跡・カマド
 第82図 第82号竪穴住居跡
 第83図 第84・106号竪穴住居跡
 第84図 第83号竪穴住居跡・カマド
 第85図 第85号竪穴住居跡・掘方・カマド
 第86図 第86号竪穴住居跡
 第87図 第87号竪穴住居跡・カマド
 第88図 第88号竪穴住居跡・カマド

第89図 第89号竪穴住居跡・カマド
 第90図 第90号竪穴住居跡
 第91図 第91号竪穴住居跡
 第92図 第92号竪穴住居跡・カマド
 第93図 第94号竪穴住居跡
 第94図 第95号竪穴住居跡・カマド
 第95図 第96号竪穴住居跡・カマド
 第96図 第100号竪穴住居跡
 第97図 第97号竪穴住居跡・カマド
 第98図 第98号竪穴住居跡・カマド
 第99図 第102号竪穴住居跡・カマド
 第100図 第99号竪穴住居跡・新・旧カマド
 第101図 第101号竪穴住居跡・カマド
 第102図 第103号竪穴住居跡・上面・カマド
 第103図 第105号竪穴住居跡・カマド
 第104図 第110号竪穴住居跡
 第105図 第107号竪穴住居跡・カマド
 第106図 第108号竪穴住居跡・カマド
 第107図 第109号竪穴住居跡・カマド
 第108図 第111号竪穴住居跡・カマド
 第109図 第114号竪穴住居跡
 第110図 第116号竪穴住居跡
 第111図 第112号竪穴住居跡・カマド
 第112図 第115号竪穴住居跡・カマド
 第113図 第117号竪穴住居跡
 第114図 第118号竪穴住居跡
 第115図 第119号竪穴住居跡
 第116図 第120号竪穴住居跡
 第117図 第121号竪穴住居跡
 第118図 第122号竪穴住居跡
 第119図 第125号竪穴住居跡・掘方
 第120図 第123号竪穴住居跡
 第121図 第124号竪穴住居跡
 第122図 第1～4B 号竪穴住居跡出土遺物
 第123図 第5～7・10号竪穴住居跡出土遺物
 第124図 第8・9・11号竪穴住居跡出土遺物
 第125図 第12～14号竪穴住居跡出土遺物
 第126図 第17・19～21号竪穴住居跡出土遺物
 第127図 第22・24・25号竪穴住居跡出土遺物
 第128図 第26・27・29号竪穴住居跡出土遺物
 第129図 第30～32・34～36号竪穴住居跡出土遺物
 第130図 第33号竪穴住居跡出土遺物（1）
 第131図 第33（2）・37～39号竪穴住居跡出土遺物
 第132図 第40・42・43・45・47号竪穴住居跡出土遺物
 第133図 第44・46・48・49号竪穴住居跡出土遺物
 第134図 第50・51号竪穴住居跡出土遺物
 第135図 第52号竪穴住居跡出土遺物
 第136図 第53A～55号竪穴住居跡出土遺物
 第137図 第56・57号竪穴住居跡出土遺物
 第138図 第58～60号竪穴住居跡出土遺物

第139図 第61～63号竪穴住居跡出土遺物
 第140図 第64A～67号竪穴住居跡出土遺物
 第141図 第68～72(1)号竪穴住居跡出土遺物
 第142図 第72(2)～77(1)号竪穴住居跡出土遺物
 第143図 第77(2)～80(1)号竪穴住居跡出土遺物
 第144図 第80(2)～82・84・85号竪穴住居跡出土遺物
 第145図 第83号竪穴住居跡出土遺物
 第146図 第86～88号竪穴住居跡出土遺物
 第147図 第89～92・94号竪穴住居跡出土遺物
 第148図 第95・98号竪穴住居跡出土遺物
 第149図 第96・97・99・100号竪穴住居跡出土遺物
 第150図 第101～103・105・106号竪穴住居跡出土遺物
 第151図 第107・108・110・111号竪穴住居跡出土遺物
 第152図 第109号竪穴住居跡出土遺物
 第153図 第112・114・115号竪穴住居跡出土遺物
 第154図 第116～119・121号竪穴住居跡出土遺物
 第155図 第120号竪穴住居跡出土遺物
 第156図 第123・124号竪穴住居跡出土遺物
 第157図 第125号竪穴住居跡出土遺物
 第158図 第1号竪立柱建物跡
 第159図 第2号竪立柱建物跡
 第160図 第3A・38号竪立柱建物跡
 第161図 第4号竪立柱建物跡
 第162図 第5号竪立柱建物跡、第16・17号土坑
 第163図 第6号竪立柱建物跡
 第164図 第7号竪立柱建物跡
 第165図 第8A・88号竪立柱建物跡
 第166図 第9・10号竪立柱建物跡、第24号土坑
 第167図 第13号竪立柱建物跡
 第168図 第1号竪立柱建物跡、第29号土坑
 第169図 第12号竪立柱建物跡
 第170図 第14号竪立柱建物跡
 第171図 第17号竪立柱建物跡
 第172図 第18号竪立柱建物跡
 第173図 第19号竪立柱建物跡
 第174図 第20号竪立柱建物跡、第37～39号土坑
 第175図 第21・22号竪立柱建物跡、第44・45号土坑
 第176図 第23号竪立柱建物跡
 第177図 第24号竪立柱建物跡

第178図 第25号竪立柱建物跡
 第179図 第26号竪立柱建物跡、第55号土坑
 第180図 第27号竪立柱建物跡、第58号土坑
 第181図 第30号竪立柱建物跡、第65・66・75号土坑
 第182図 第28号竪立柱建物跡、第56・57・69号土坑
 第183図 第29号竪立柱建物跡、第78号土坑
 第184図 第32号竪立柱建物跡、第70・71号土坑
 第185図 第36号竪立柱建物跡
 第186図 第31号竪立柱建物跡、第79号土坑
 第187図 第34号竪立柱建物跡
 第188図 第35号竪立柱建物跡
 第189図 第37号竪立柱建物跡
 第190図 第4号竪立柱建物跡出土遺物
 第191図 第1号溝跡
 第192図 第1号墳主体部出土遺物
 第193図 第1号墳墳丘、第5号土坑、A区南西溝跡群
 第194図 第1号墳墳丘・周溝
 第195図 第1号墳主体部・細方
 第196図 第5号土坑、A区南西溝跡群
 第197図 第2号墳・主体部、第4号土坑、第18・24号溝跡
 第198図 土坑類(1)
 第199図 土坑類(2)
 第200図 土坑類(3)
 第201図 第1・14・32号土坑出土遺物
 第202図 井戸跡(SE1～8)
 第203図 第1・3号方形竪穴
 第204図 第2号方形竪穴・ビット8・石材
 第205図 第1号円形周溝遺構
 第206図 第2号土坑、第2号円形周溝遺構
 第207図 第1号方形周溝遺構
 第208図 第18～23・25・31・33・35・36A・36B・39A・39B・40・42～44号溝跡
 第209図 その他の遺物(縄文、中・近世)
 第210図 遺構配置図(1)
 第211図 遺構配置図(2)
 第212図 遺構配置図(3)

図 版 目 次

- 図版 1 A. A区全景 (南東から) B. A区全景 (南東から) C. A区中央全景 (南東から) D. A区南端全景 (東から) E. A区南東部近景 (南から) F. A・B区全景 (北東から) G. A・B区全景 (東から) H. A・B区全景 (東から)
- 図版 2 A. C区全景 (東から) B. C区全景 (南東から) C. C区全景 (北西から) D. C区全景 (南東から) E. C区全景 (南から) F. C区全景 (南西から) G. C区全景 (南から) H. C区全景 (西から)
- 図版 3 A. 第1号竪穴住居跡、第1号墳完掘 (南から) B. 第1号竪穴住居跡完掘 (南から) C. 第1号竪穴住居跡炉跡・遺物 (南から) D. 第1号竪穴住居跡遺物 (西から) E. 第1号竪穴住居跡掘方 (南から) F. 第2A・2B号竪穴住居跡完掘 (南西から) G. 第2B号竪穴住居跡カマド遺物 (南西から) H. 第3号竪穴住居跡、第25号清跡完掘 (南から) I. 第4A・4B号竪穴住居跡完掘 (南東から) J. 第4B号竪穴住居跡カマド (南東から) K. 第4A号竪穴住居跡カマド (南西から) L. 第5号竪穴住居跡完掘 (南西から) M. 第5号竪穴住居跡北東隅遺物 (北西から) N. 第6号竪穴住居跡完掘 (南東から) O. 第6号竪穴住居跡カマド (南から) P. 第6号竪穴住居跡北東隅遺物 (南西から) Q. 第7号竪穴住居跡、第23号清跡完掘 (南東から) R. 第7号竪穴住居跡、第23号清跡掘方 (南東から)
- 図版 4 A. 第8号竪穴住居跡完掘 (南から) B. 第8号竪穴住居跡炉跡 (北東から) C. 第8号竪穴住居跡貯蔵穴 (P5) (南から) D. 第8号竪穴住居跡遺物出土状況 (南から) E. 第8号竪穴住居跡南西隅遺物 (南から) F. 第8号竪穴住居跡掘方 (南から) G. 第8号竪穴住居跡掘方土層 (東から) H. 第9号竪穴住居跡完掘 (南から) I. 第9号竪穴住居跡遺物 (南東から) J. 第10・35号竪穴住居跡完掘 (北から) K. 第11号竪穴住居跡完掘 (南から) L. 第11号竪穴住居跡カマド (南から) M. 第11号竪穴住居跡カマド右脇遺物 (東から) N. 第12号竪穴住居跡完掘 (南から) O. 第12号竪穴住居跡カマド (南から) P. 第13号竪穴住居跡完掘 (南から) Q. 第14号竪穴住居跡、第8号土坑完掘 (南から) R. 第17号竪穴住居跡完掘 (南から)
- 図版 5 A. 第18号竪穴住居跡完掘 (南東から) B. 第19号竪穴住居跡完掘 (南から) C. 第20号竪穴住居跡完掘 (南から) D. 第21号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第21号竪穴住居跡カマド (南東から) F. 第23号竪穴住居跡完掘 (南東から) G. 第24号竪穴住居跡完掘 (南から) H. 第25号竪穴住居跡完掘 (西から) I. 第25号竪穴住居跡カマド (西から) J. 第25号竪穴住居跡カマド掘方 (西から) K. 第25号竪穴住居跡遺物出土状況 (北西から) L. 第25号竪穴住居跡遺物-1 (北から) M. 第25号竪穴住居跡遺物-2 (北から) N. 第25号竪穴住居跡掘方 (南西から) O. 第26号竪穴住居跡完掘 (南から) P. 第26号竪穴住居跡カマド (南東から) Q. 第26号竪穴住居跡遺物出土状況 (南西から) R. 第26号竪穴住居跡掘方 (南東から)
- 図版 6 A. 第27号竪穴住居跡完掘 (南から) B. 第29号竪穴住居跡完掘 (南から) C. 第30号竪穴住居跡完掘 (東から) D. 第31号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第31号竪穴住居跡カマド (南から) F. 第32号竪穴住居跡完掘 (南から) G. 第33号竪穴住居跡完掘 (南から) H. 第33号竪穴住居跡カマド焚口 (南から) I. 第33号竪穴住居跡カマド焚口 (北上から) J. 第33号竪穴住居跡カマド柱礎 (南から) K. 第33号竪穴住居跡炭化物 (カヤ類) (南から) L. 第33号竪穴住居跡掘方 (南から) M. 第34号竪穴住居跡完掘 (南から) N. 第37号竪穴住居跡、第10号土坑完掘 (南西から) O. 第37号竪穴住居跡竈灰岩 (東から) P. 第38号竪穴住居跡完掘 (南から) Q. 第39号竪穴住居跡完掘 (南東から) R. 第39号竪穴住居跡カマド (南東から)
- 図版 7 A. 第40号竪穴住居跡完掘 (南から) B. 第40号竪穴住居跡カマド (南から) C. 第41号竪穴住居跡完掘 (南東から) D. 第41号竪穴住居跡カマド (南東から) E. 第42号竪穴住居跡完掘 (南から) F. 第42号竪穴住居跡カマド (南から) G. 第43号竪穴住居跡完掘 (南から) H. 第43号竪穴住居跡鉄製品№13 (南から) I. 第44号竪穴住居跡完掘 (南から) J. 第44号竪穴住居跡カマド (南から) K. 第45号竪穴住居跡完掘 (南東から) L. 第46号竪穴住居跡完掘 (南東から) M. 第48号竪穴住居跡完掘 (東から) N. 第48号竪穴住居跡炉跡 (東から) O. 第48号竪穴住居跡炭化物-1 (南から) P. 第48号竪穴住居跡炭化物-2 (北西から) Q. 第49号竪穴住居跡完掘 (南から) R. 第50号竪穴住居跡完掘 (南東から)
- 図版 8 A. 第50号竪穴住居跡炉跡 (南東から) B. 第50号竪穴住居跡勾配№9 (南から) C. 第50号竪穴住居跡掘方 (南から) D. 第51号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第51号竪穴住居跡北カマド (南から) F. 第51号竪穴住居跡鉢鉢跡№11 (南から) G. 第51号竪穴住居跡掘方 (南から) H. 第52号竪穴住居跡完掘-1 (南から) I. 第52号竪穴住居跡完掘-2 (南から) J. 第52号竪穴住居跡炉跡 (南から) K. 第52号竪穴住居跡貯蔵穴 (P5) (南から) L. 第52号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (南から) M. 第52号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (東から) N. 第52号竪穴住居跡遺物出土状況-3 (北西から) O. 第52号竪穴住居跡掘方 (南から) P. 第53A・53B号竪穴住居跡完掘 (南から) Q. 第53A・53B号竪穴住居跡掘方 (南から) R. 第54号竪穴住居跡完掘 (南から)
- 図版 9 A. 第54号竪穴住居跡カマド (南から) B. 第55号竪穴住居跡完掘 (南から) C. 第55号竪穴住居跡カマド (南から) D. 第56号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第56号竪穴住居跡カマド (南から) F. 第57号竪穴住居跡完掘 (南から) G. 第57号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (北東から) H. 第57号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (西から) I. 第57号銅製品№13 (東から) J. 第57号竪穴住居跡掘方 (南から) K. 第58号竪穴住居跡完掘 (南から) L. 第58号竪穴住居跡炉跡 (南から) M. 第59号竪穴住居跡完掘 (南から) N. 第59号竪穴住居跡カマド (南から) O. 第60号竪穴住居跡完掘 (南から) P. 第60号竪穴住居跡炉跡 (南から) Q. 第61号竪穴住

居跡完掘 (南東から) R. 第61号竪穴住居跡遺物出土状況 (南西から)

図版10 A. 第61号竪穴住居跡跡跡 (南から) B. 第62号竪穴住居跡完掘 (南から) C. 第62号竪穴住居跡跡跡 (南から) D. 第63号竪穴住居跡完掘 (南東から) E. 第64号竪穴住居跡完掘 (南から) F. 第64号竪穴住居跡完掘 (西から) G. 第65号竪穴住居跡完掘 (南から) H. 第66号竪穴住居跡完掘 (南から) I. 第67号竪穴住居跡完掘 (南から) J. 第67号竪穴住居跡カマド (南から) K. 第68号竪穴住居跡完掘 (南から) L. 第68号竪穴住居跡掘方 (南から) M. 第69号竪穴住居跡完掘 (南から) N. 第69号竪穴住居跡カマド (南から) O. 第70号竪穴住居跡完掘 (南から) P. 第71号竪穴住居跡完掘 (南から) Q. 第72号竪穴住居跡完掘 (南から) R. 第72号竪穴住居跡カマド (南から)

図版11 A. 第72号竪穴住居跡掘方 (南から) B. 第73号竪穴住居跡完掘 (南から) C. 第74号竪穴住居跡完掘 (西から) D. 第74号竪穴住居跡カマド (西から) E. 第75号竪穴住居跡完掘 (南から) F. 第75号竪穴住居跡カマド (南から) G. 第77号竪穴住居跡完掘 (南東から) H. 第77号竪穴住居跡カマド (南から) I. 第78号竪穴住居跡完掘 (南から) J. 第78号竪穴住居跡掘方 (南から) K. 第79号竪穴住居跡完掘 (南から) L. 第79号竪穴住居跡貯蔵穴 (P6) (南西から) M. 第80号竪穴住居跡完掘 (南から) N. 第80号竪穴住居跡カマド (南から) O. 第81号竪穴住居跡完掘 (南から) P. 第81号竪穴住居跡カマド (南から) Q. 第82号竪穴住居跡完掘 (南から) R. 第83号竪穴住居跡完掘 (南から)

図版12 A. 第83号竪穴住居跡カマド (南から) B. 第84号竪穴住居跡完掘 (東から) C. 第84号竪穴住居跡掘方 (東から) D. 第85号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第85号竪穴住居跡カマド (南から) F. 第85号竪穴住居跡掘方 (南西から) G. 第86号竪穴住居跡完掘・遺物出土状況 (東から) H. 第86号竪穴住居跡遺物出土状況 (南西から) I. 第87号竪穴住居跡完掘 (南から) J. 第87号竪穴住居跡カマド (南から) K. 第88号竪穴住居跡完掘 (南から) L. 第88号竪穴住居跡カマド (南から) M. 第89号竪穴住居跡完掘 (南から) N. 第89号竪穴住居跡カマド (南から) O. 第90号竪穴住居跡完掘 (東から) P. 第90号竪穴住居跡跡跡 (東から) Q. 第90号竪穴住居跡掘方 (東から) R. 第91号竪穴住居跡完掘 (南から)

図版13 A. 第92号竪穴住居跡完掘 (南から) B. 第92号竪穴住居跡カマド (南から) C. 第92号竪穴住居跡掘方 (南から) D. 第94号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第95号竪穴住居跡完掘 (南から) F. 第95号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (北西から) G. 第95号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (北東から) H. 第95号竪穴住居跡遺物出土状況-3 (南東から) I. 第96号竪穴住居跡完掘 (南から) J. 第96号竪穴住居跡カマド (南から) K. 第97号竪穴住居跡完掘 (南から) L. 第97号竪穴住居跡カマド (南から) M. 第98号竪穴住居跡完掘 (南から) N. 第99号竪穴住居跡完掘 (南から) O. 第99号竪穴住居跡新・旧カマド (南から) P. 第99号竪穴住居跡旧 (東側) カマド (南から) Q. 第99号竪穴住居跡新 (西側) カマド (南から) R. 第100号竪穴住居跡完掘 (南から)

図版14 A. 第100号竪穴住居跡カマド (南から) B. 第101号竪穴住居跡完掘 (南から) C. 第101号竪穴住居跡カマド (南から) D. 第102号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第102号竪穴住居跡カマド (南から) F. 第103号竪穴住居跡完掘 (南から) G. 第103号竪穴住居跡カマド (南から) H. 第103号竪穴住居跡炭化物出土状況-1 (南から) I. 第103号竪穴住居跡炭化物出土状況-2 (南西から) J. 第103号竪穴住居跡炭化物出土状況-3 (南西から) K. 第105号竪穴住居跡完掘 (南東から) L. 第106号竪穴住居跡完掘 (南東から) M. 第107号竪穴住居跡完掘 (南から) N. 第107号竪穴住居跡掘方 (南から) O. 第108号竪穴住居跡完掘 (南から) P. 第109号竪穴住居跡完掘 (西から) Q. 第109号竪穴住居跡カマド (西から) R. 第109号竪穴住居跡西壁跡群 (南から)

図版15 A. 第109号竪穴住居跡西壁跡群群 (南から) B. 第109号竪穴住居跡遺物出土状況-1 (西から) C. 第109号竪穴住居跡遺物出土状況-2 (西から) D. 第110号竪穴住居跡完掘 (南から) E. 第111号竪穴住居跡完掘 (南東から) F. 第111号竪穴住居跡カマド (南から) G. 第112号竪穴住居跡完掘 (南から) H. 第112号竪穴住居跡カマド (南から) I. 第114号竪穴住居跡完掘 (南から) J. 第114号竪穴住居跡カマド (南から) K. 第115号竪穴住居跡完掘 (西から) L. 第115号竪穴住居跡カマド (西から) M. 第115号竪穴住居跡遺物出土状況 (西から) N. 第117号竪穴住居跡完掘 (南から) O. 第118号竪穴住居跡完掘 (南から) P. 第119号竪穴住居跡完掘 (東から) Q. 第119号竪穴住居跡カマド (南から) R. 第119号竪穴住居跡掘方 (東から)

図版16 A. 第120号竪穴住居跡完掘 (西から) B. 第120号竪穴住居跡遺物出土状況 (北から) C. 第120号竪穴住居跡掘方 (西から) D. 第121号竪穴住居跡、第30号溝跡完掘 (南から) E. 第121号竪穴住居跡カマド (南から) F. 第122号竪穴住居跡、第31・39A・39B号溝跡完掘 (南から) G. 第122号竪穴住居跡カマド (南西から) H. 第123号竪穴住居跡完掘 (南東から) I. 第123号竪穴住居跡カマド (南から) J. 第123号竪穴住居跡カマド脇遺物 (南東から) K. 第123号竪穴住居跡掘方 (南東から) L. 第124号竪穴住居跡完掘 (南から) M. 第124号竪穴住居跡カマド (南東から) N. 第124号竪穴住居跡掘方 (南から) O. 第125号竪穴住居跡完掘 (南から) P. 第125号竪穴住居跡カマド (南から) Q. 第125号竪穴住居跡掘方 (南から) R. 第1号掘立柱建物跡完掘 (南西から)

図版17 A. 第2号掘立柱建物跡完掘 (南から) B. 第3A・3B号掘立柱建物跡完掘 (南から) C. 第4号掘立柱建物跡完掘 (東から) D. 第5号掘立柱建物跡、第17号土坑完掘 (北から) E. 第6号掘立柱建物跡完掘 (南から) F. 第7号掘立柱建物跡完掘 (東から) G. 第8A・8B号掘立柱建物跡完掘 (西から) H. 第9・10号掘立柱建物跡、第24号土坑完掘 (西から) I. 第12号掘立柱建物跡完掘 (北から) J. 第13号掘立柱建物跡完掘 (北東から) K. 第20号掘立柱建物跡、第37～39号土坑、第33号溝跡完掘 (北から) L. 第21号掘立柱建物跡、第44・45号土坑完掘 (南東から) M. 第22号掘立柱建物跡完掘 (南東から) N. 第23号掘立柱建物跡、第42号土坑、第33号溝跡完掘 (北から) O. 第24号掘立柱建物跡、第33・35号溝跡完掘 (北から) P. 第25号掘立柱建物跡、第35号溝跡

完掘 (南から) Q. 第26号掘立柱建物跡、第55号土坑完掘 (南から) R. 第27号掘立柱建物跡、第58号土坑完掘 (東から)

図版18 A. 第29号掘立柱建物跡、第78号土坑完掘 (南から) B. 第30号掘立柱建物跡、第64・65号土坑完掘 (南東から) C. 第31号掘立柱建物跡、第79号土坑完掘 (北から) D. 第32号掘立柱建物跡、第67・70・71号土坑完掘 (南から) E. 第34号掘立柱建物跡完掘 (南東から) F. 第35号掘立柱建物跡完掘 (南東から) G. 第36号掘立柱建物跡完掘 (南東から) H. 第37号掘立柱建物跡完掘 (南から) I. 第1号墳完掘遺景 (南から) J. 第1号墳完掘 (南から) K. 第1号墳主体部確認時 (北から) L. 第1号墳主体部確認時南半近接 (北から) M. 第1号墳主体部完掘南半近接 (北から) N. 第1号墳主体部完掘 (北から) O. 第1号墳主体部完掘近接 (北から) P. 第1号墳主体部遺物 (北から) Q. 第1号墳主体部遺物 (南から) R. 第1号墳主体部東西土層 (北から)

図版19 A. 第1号墳主体部掘方全景 (北から) B. 第1号墳主体部掘方底面工具痕 (北から) C. 第2号墳、第18・24号溝跡完掘 (南から) D. 第2号墳主体部完掘 (東から) E. 第4号土坑完掘 (南西から) F. 第11号土坑完掘 (西から) G. 第11号土坑土層 (東から) H. 第12号土坑完掘近接 (南西から) I. 第13号土坑完掘 (南から) J. 第14号土坑完掘 (東から) K. 第14号土坑遺物出土状況一 (東から) L. 第14号土坑遺物出土状況二 (東から) M. 第18号土坑完掘 (北西から) N. 第19号土坑完掘 (北西から) O. 第20号土坑完掘 (東から) P. 第31号土坑完掘 (北東から) Q. 第35号土坑完掘 (東から) R. 第40号土坑完掘 (北東から)

図版20 A. 第41号土坑完掘 (南西から) B. 第47号土坑完掘 (南西から) C. 第48号土坑完掘 (南から) D. 第50号土坑完掘 (南から) E. 第51・52・80号土坑完掘 (南から) F. 第53号土坑完掘 (南から) G. 第54号土坑完掘 (南から) H. 第55号土坑完掘 (南から) I. 第59・60号土坑完掘 (南から) J. 第61号土坑完掘 (南から) K. 第74号土坑完掘 (北から) L. 第76号土坑完掘 (北から) M. 第25号土坑完掘 (南から) N. 第26号土坑完掘 (南から) O. 第49A・49B号土坑完掘 (南から) P. 第77号土坑完掘 (南から)

図版21 A. 第1号井戸跡完掘 (西から) B. 第3号井戸跡完掘 (東から) C. 第5号井戸跡完掘 (東から) D. 第6号井戸跡完掘 (南から) E. 第7号井戸跡完掘 (南から) F. 第8号井戸跡完掘 (南から) G. 41P・41Q・42P・42Qグリッド土坑群近景 (東から) H. 第1号方形竪穴完掘 (西から) I. 第2・3号方形竪穴完掘 (北から) J. 第2号方形竪穴ビット8・石材 (北から) K. 第3号方形竪穴南東隅炭化物 (北から) L. 第1号円形周溝遺構完掘 (南から) M. 第1号方形周溝遺構完掘 (北東から) N. A区南西溝跡群完掘 (南から) O. 第1号溝跡土層 (南から) P. 第2号溝跡土層 (北から) Q. 第33号溝跡土層 (南から) R. 第44号溝跡土層 (北東から)

図版22 第1・3・4A・4B・6・9・11・14・17・19・20号竪穴住居跡出土遺物

図版23 第21・25・26・31・33・36~40号竪穴住居跡出土遺物

図版24 第43・44・50~52・53B・55号竪穴住居跡出土遺物

図版25 第57・58・60~62・64A・65・67・68・70・72~75・77号竪穴住居跡出土遺物

図版26 第79・80・83~86・90・94・95号竪穴住居跡出土遺物

図版27 第96・97・99・100・102・103・106・107・109・110・112・114・115号竪穴住居跡出土遺物

図版28 第118~120・124・125号竪穴住居跡出土遺物

図版29 第1号墳主体部、第14号土坑、中・近世出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

宇都宮市西川田・幕田町地内において株式会社ユーエスケー（現トヨタウッドユーホーム株式会社、以下事業主という）により7万3千㎡に及ぶ宅地開発が計画された。当該地区には周知の遺跡「安川第一小南遺跡：県通番3215」が所在した。関係者協議の上、平成3年度に確認調査を実施した結果、古墳時代～奈良・平安時代にわたる大規模な集落遺跡であることが確認された。この為、事業主の依頼により宇都宮市教育委員会（以下市教委という）を調査主体者とし、事業主より委託を受けた株式会社日本家業史研究所（以下当社という）が市教委の指導の下に調査実施にあたった。整理・報告書作成作業も市教委の指導の下、当社が行った。

第2節 調査の経過と調査の概要

第1次発掘調査（A区）は、平成4年5月から同年12月まで約1万5千㎡を調査し、古墳～奈良・平安時代の竪穴住居跡約100軒、掘立柱建物跡10棟、円墳2基などを調査した。

第2次発掘調査（B・C区）は、平成5年1月に確認調査を行い、その成果を基に、翌2月より同年7月まで約1万6千㎡の調査を行った。その結果、古墳時代前期より奈良・平安時代にわたる竪穴住居跡19軒、掘立柱建物跡23棟の他、土坑、井戸跡、方形竪穴、円形・方形周溝遺構、溝跡などが多数確認された。C区北寄りでは掘立柱建物跡や土坑などが多数認められるが、竪穴住居跡は少なくなり集落の外縁部にあたると思われる。

その後、諸般の事情により開発計画は中断し、発掘調査も中断となった。平成11年に至り開発計画が本格的に再開され、未調査部分における発掘が急務となった。

第3次調査（D～F区）は、平成11年9月に確認調査、同年10月から翌5年4月に約1万㎡を調査し、縄文時代、古墳時代～平安時代にわたる竪穴住居跡57軒、掘立柱建物跡21棟などを調査した。第3次調査の成果は、平成20年に宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第71集として公開されている。

第1・2次調査の整理・報告書作成作業は調査終了直後に実施したが諸般の事情で一時的に中断していた。令和3年に再開し令和4年にかけて断続的に実施した。

第3節 調査の方法

調査は、重機により遺構確認面であるローム層移層まで除去した後、人力により遺構確認作業を行った。確認した遺構は、遺構配置図を作成の後、セクションベルトを掛けて掘削、土層観察の後完掘して写真撮影、実測・遺物の取り上げを行った。平面図の作成は、公共座標＝日本測地系（第IX座標系）によるもので、南西隅を原点（1A）としその座標値は、X＝55980.000m、Y＝780.000mである。10m方眼を設定し、X軸をアラビア数字、Y軸をアルファベットで示す。標高は、海拔標高を使用した。遺構実測は、造方実測及び平板実測によるもので、縮尺は1/20を基本とし、遺構の性格により縮尺1/10・1/40で作成した。写真撮影は、35mm判のモノクロ、カラーリバーサル、ネガカラーなどのフィルムを使用し、撮影には大型脚立及びローリングタワーを利用した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、栃木県宇都宮市西川田・幕田町に跨って所在する。栃木県は関東平野の北端に位置し、西・北・東側の三方を山地に囲まれ、南側が平野部に向けて開けている。県都宇都宮市は、県域のほぼ中央部に位置し、市域の東側を鬼怒川、中央部を田川、西側を姿川が南流している。本遺跡は市域の西側を流れる姿川の左岸に所在し、姿川の右岸は崖沿台地で、遺跡の立地する左岸は宝木台地である。この台地は、同水系の小支谷によって樹状に開析されている。本遺跡を乗せる台地も東・西両側に小支谷があって遺跡の南側で合流し、舌状台地状を呈している。調査区付近の標高は92～94m程で、姿川との比高は約3mである。今次調査区は、この舌状台地の東半部を占める。

交通的には、JR東北本線宇都宮駅の南西約7km、東武宇都宮線西川田駅の南西約1kmに位置する。東約100mを旧栃木街道、西約200mにはそのバイパスが南北に延びる。また、北約600mを宇都宮環状線が東西に通るなど、自動車交通の要衝でもある。

第2節 歴史的環境

近隣の遺跡の状況については、第1図・第1表に示した通りである。第1図の北半部に遺跡の空白となっている部分があるが、これは分布調査を行い難い状況にあるため、実態とは異なると考えられる。

旧石器時代の遺跡は近隣では確認されていないが、本遺跡の第3次調査において、後世の遺構の層土中よりナイフ形石器や石刃状片が出土しており、近隣の遺跡においても今後確認される可能性が高い。

縄文時代の遺跡は図中では12か所知られる。台地の中央部に点在している。本遺跡においても、今次調査では早・前期頃の土坑、第3次調査では中期前葉と後期末葉～晩期の住居跡が若干確認されている。

弥生時代の遺跡は第1図の中では2か所知られるのみである。第3次調査では遺構の確認はなかったものの、中期（野沢式）、後期（二軒屋式）の土器片が極少量出土しており、集落の形成はないものの、何らかの土地利用があったことになる。なお、南東方約2kmに、後期二軒屋式の標式遺跡となる二軒屋遺跡（3223）が所在する。

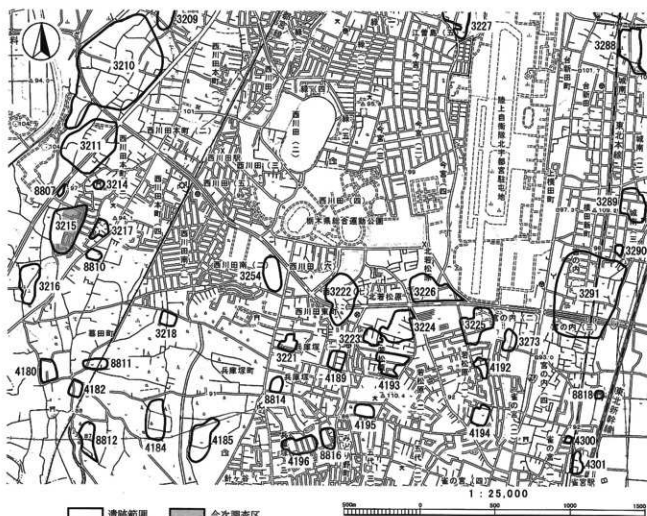
古墳時代の集落遺跡は第1図中に17か所所在する。前期の遺跡は近隣では、北西方約350mの花の木町遺跡（8807）や、南東方約2.9kmの宿西南遺跡（4194）が知られるものの、確認された住居跡の軒数はあまり多くはない。本遺跡では、第1～3次調査において計40軒の住居跡が確認され、管見では市内最大級の集落跡と思われる。該期の当地の首長墓は南東方約5.5kmの茂原古墳群がある。いずれも前方後方墳の大日大古墳（墳丘長約35m）、愛宕塚古墳（墳丘長約50m）、権現山古墳（墳丘長約60m）が築かれている。また、この周辺には前期の集落跡の存在が知られるものの、やはり確認軒数はそれぞれ多くはない。

中期の集落跡は本遺跡では確認されていない。近隣では、北西方約700mの西の内遺跡（3210）で2軒確認されている他は、田川右岸の宝木台東縁部に所在し、雷電山遺跡、おしめ尽遺跡（3227）、間道遺跡、北若松原遺跡（3226）、若松原遺跡（3224）などが所在する。これらの遺跡からは所謂古式須恵器が出土し、雷電山遺跡や若松原遺跡では多量の石製祭具（模造品）の出土が伝えられる。中期中葉以降の当地の首長墓と目される塚山古墳群（3222）がこれらに近接して所在する。いずれも前方後円墳で、塚山古墳（墳丘長約98m）、塚山西古墳（墳丘長約63m）、塚山南古墳（墳丘長約58m）などが築かれている。近隣では、北西方約400mの辻の内遺跡（3211）の南部において該期の円墳が1基確認されている。主体部は失われていたが、周溝内より出土の土器類から、5世紀後半もしくはこれを若干遅る時期と考えられている。古墳の存在から周辺にこれを支えた集落の存在が想定されるが、これについては判然としない。

後期になると集落が増加すると思われる。本遺跡でも再び集落が営まれるようになる。第1図の中では計17か所の遺跡の所在が知られる。やはり、台地中央部から東側に多く確認されているようである。本遺跡では第1～3次調査で計60軒近い住居跡が確認された。また、調査区南西部～後期前半の円墳が2基確認されている。この時期には各所に群集墳が見られるようになり、南東方約1.7kmに針ヶ谷新田古墳群が所在し、北約150mに西川田屋神社古墳（3214）が所在する。針ヶ谷新田古墳群では横穴式石室をもつ7世紀前半の古墳が確認されている。西川田屋神社古墳は未調査で詳細は不明である。

律令制下においては、当地は下野国河内郡に属する。下野国は東山道に属し、9郡を管する上国である。『和名類聚抄』によれば、河内郡は11郷を管する中郡で、当地の郷名は不明である。河内郡の郡家は宇都宮市と上三川町に跨って所在する、国指定史跡上神主・茂原官衙遺跡に比定されている。また、これに隣接する西下谷田遺跡は評家の可能性が指摘されている。さらに、上三川町の多功遺跡も官衙跡と考えられている。第1図に示した40か所の遺跡のうち奈良・平安時代の遺跡は25か所で全体の半数以上を占めるようになる。また、本遺跡のように古墳時代より継続する遺跡は12か所で、残り13か所はこの時期になって新たに営まれたものである。自然発生的なものではなく、外的要因によって整備した集落と推測される。本遺跡は古墳時代後期より継続するもので、第1～3次の調査で計17軒の堅穴住居跡が確認されている。また、西の内遺跡ではかつて100軒以上の該期の堅穴住居跡の他に四面庇の三方に孫庇をもつ仏堂的掘立柱建物跡が確認されて注目された。近隣では東方約80mの幕田境遺跡（3217）、南東方約100mの上ノ畑北遺跡（8810）、南西方約130mの合ノ畑遺跡（3216）などが所在する。

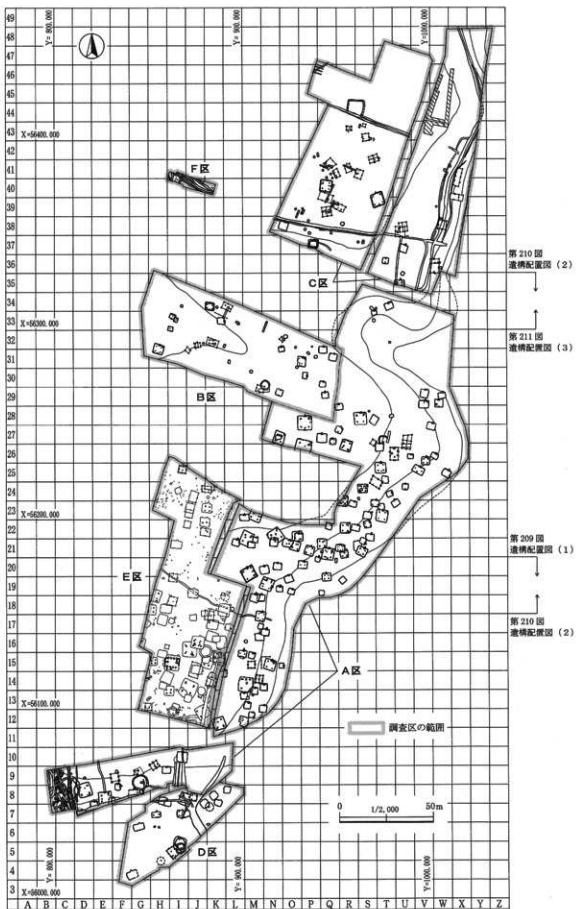
中世遺跡は南方約700mに樋口城跡（4180）が所在し、北東方約500mの田辻の内遺跡において掘立柱建物跡や竈など該期の遺構が確認された。本遺跡でも掘立柱建物跡や井戸跡、方形堅穴などが確認されており、関連するものと推察される。



第1図 遺跡の位置と周辺道路

第1表 周辺遺跡一覧表

県番号	遺跡名	種別	時代	県番号	遺跡名	種別	時代
3209	北之内遺跡	集落跡	奈良平安	3291	宮の内遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
3210	西の内遺跡	集落跡	縄文・奈良平安	4180	樋口城跡	城跡跡	中世
3211	辻の内遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良平安	4182	堂前西遺跡	集落跡	奈良平安
3214	西川田屋宮神社古墳	古墳	古墳	4184	堂前東遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
3215	竈川第一小南遺跡	集落跡	古墳・奈良平安	4185	兵庫塚西原遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
3216	合ノ畑遺跡	集落跡	縄文・奈良平安	4189	堀ヶ丘田遺跡	集落跡	縄文
3217	轟田原遺跡	集落跡	奈良平安	4192	瀬西遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
3218	東原遺跡	集落跡	縄文	4193	西原北遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳
3221	堀ヶ丘田北遺跡	集落跡	縄文	4194	瀬西南遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
3222	堀山古墳群	古墳	古墳	4196	若松原南遺跡	集落跡	古墳
3223	二軒屋遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳	4196	下原遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
3224	若松原遺跡	集落跡	縄文・古墳	4300	綾女塚古墳	古墳	古墳
3225	一向寺跡付近遺跡	集落跡	古墳・奈良平安	4301	雀宮東南遺跡	散布地	奈良平安
3226	北若松原遺跡	集落跡	古墳・奈良平安	8807	花の木町遺跡	集落跡	古墳
3227	おしめ尽遺跡	集落跡	古墳・奈良平安	8810	上ノ塚北遺跡	集落跡	奈良平安
3254	小野原北遺跡	集落跡	縄文	8811	中畑遺跡	集落跡	奈良平安
3273	本田技研西遺跡	集落跡	縄文	8812	轟田南原遺跡	集落跡	奈良平安
3288	大男林遺跡	集落跡	古墳・奈良平安	8814	兵庫塚二丁目遺跡	集落跡	古墳・奈良平安
3289	城南三丁目遺跡	集落跡	奈良平安	8816	兵庫塚三丁目東遺跡	集落跡	縄文・奈良平安
3290	城南三丁目南遺跡	集落跡	奈良平安	8818	御田神社古墳	古墳	古墳



第2図 調査区位置図

第3章 遺構と遺物

今次調査では、古墳時代前期から平安時代に至る竪穴住居跡、古代から中世の掘立柱建物跡、古墳・縄文時代から近・現代までの土坑、古代から中・近世の井戸跡、中世の方形竪穴、時期不明の円形・方形周溝遺構、中・近世から近・現代の溝跡などが確認された。遺物は古墳時代から平安時代の土器類を中心に、縄文時代後期から中・近世に至る各種の遺物が出土した。遺構は個別毎に掲載し、遺物は遺構に伴うものを中心とし、一部遺跡の土地利用の変遷を示す資料を掲載した。

第1節 竪穴住居跡

今次調査では古墳時代前期から平安時代に至る竪穴住居跡が総数123軒確認された。確認された順に住居跡番号を付与しており、番号順に報告する。第15・16・28・93・104・113号竪穴住居跡は欠番。

第1号竪穴住居跡 (第3・122・210図、図版3・22)

遺構 8D・9Dグリッドに位置する。北西部が第1号墳と重複し、これに切られていた(第3節参照)。規模・形状は東西約6.8m、南北約7.0mの隅丸方形。壁は現存高7～14cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。柱穴はP1～P4が主柱穴で、それぞれ2回の重複が見られた。また、南東隅に確認されたP5の貯蔵穴も重複が認められた。さらに、南辺中央やや東寄りの出入口施設と思われるP6も2回の重複が認められた。炉跡は、主柱穴P1・P2の中間よりやや南寄りに位置し、径約70cmの円形の床土炉で、火床面は床面よりやや凹み、赤変炭化していた。覆土は、ローム粒・塊と少量の炭化物・焼土粒を含む暗褐色土で、人為的埋没と考えられる。床面下の調査で北・東壁下に幅15～20cm、深さ10～15cmの壁溝が確認された。本跡は前記の状況から2回の建て替えが行われたと考えられる。

遺物 すべて土師器で、大形高坏(1)、小形高坏(2)、小形甕(3)、小形台付甕(4)、壺(5)、S字状口縁台付甕(6)、甕(7)を図示した。1の大形高坏は脚部に透かし孔を穿つ。2の小形高坏は精巧な造りで輸入品の可能性をもつ。5の壺は有段口縁である。6はS字状口縁台付甕で胴部外面にハケ目痕が明瞭である。

第2A・2B号竪穴住居跡 (第4・122・210図、図版3)

遺構 7D・7E・8D・8Eグリッドに位置し、南側は水田化に際して削平されていた。この為、本来の規模・形状は明確にし難いが、第2A号竪穴住居跡は、遺存する北辺から一辺4.3m程の方形もしくはこれを長辺とする長方形と推定される。壁は北で現存高20cm、ほぼ直立する。床面は貼床で、ほぼ平坦で固く締まっていた。柱穴、壁溝は確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を切り込み、白色粘土と凝灰岩で築かれていたが遺存状態が不良で詳細は不明。第2A号跡の覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、少量の炭化物・焼土粒を含み、自然埋没と考えられる。また、本跡の床面下の調査で第2B号竪穴住居跡が確認された。規模・形状は第2A号跡同様明確にし難いが、遺存する北辺から一辺3.5mの方形と推定される。カマドは北東隅に設けられていたが、第2A号跡へ移行する際に北辺に移設されており、新・旧カマドとも遺存状態が悪い。重複で第2B号跡の覆土は不明である。

遺物 土師器の坏(2B-1)、小形甕(2A-1)、須恵器の甕(2A-2)を図示した。第2B号跡のカマドより出土の土師器の坏(2B-1)は内面黒色処理が施され、底部糸切り。

第3号竪穴住居跡 (第5・122・210図、図版3・22)

遺構 7E・8Eグリッドに位置し、南側は水田化に際して削平されていた。また、南東部は第23号竪穴住居跡、中央部を南北に第25号溝跡と重複し、これらに切られていた(第8節参照)。前記の状況から、本来の規模・形状は明確にし難いが、完存する北辺及び主柱穴の位置関係から一辺6.7m程の方形と推定される。壁は北で現存高55cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P6の6基確認され、P1～P4が主柱穴、北東隅のP5は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を僅かに切り込み、白色粘土で築かれていた。両袖部の下部が遺存し、火床面は赤化していたが、遺存状態は不良である。北東隅の床面に、径70×90cmの範囲に10cmの厚さで白色粘土が遺存していた。カマド材の一部と考えられ、竪穴の焼結時に除去されたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土が主体で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、坏(1～3)、高坏(4)、甕(5)を図示した。1・2の坏は模倣型で、1は坏形、2は甕形。3の坏は半球形。4の高坏の坏部は1の坏に類する形状と思われる。5の甕は長胴形。

第4A・4B号竪穴住居跡 (第6・7・122・210図、図版3・22)

遺構 8F・9Fグリッドに位置する。第4A号竪穴住居跡は第4B号竪穴住居跡と重複し、この直上に構築されていた。規模・形状は、南北3.5m、東西3.1mの隅丸長方形。壁は現存高20～24cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面は北端を除き貼床で、平坦で固く締まっていた。柱穴は認められず、北西隅に確認されたP1は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。先行する第4B号跡と同位置に築かれていたが、後に北辺の北寄りに移設したと考えられる。袖部の下部が僅かに遺存し、火床面は明確な赤化は見られなかった。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土で、自然埋没と考えられる。第4B号跡の規模・形状は、南北3.0m、

東西2.8mの隅丸方形。壁は重複により判然としない。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。上部に第4A号跡の旧カマドが構築されたため、遺存状態は不良であったが、カマド内より土師器の小形甕(1)の破片が出土している。床面直上に第4A号跡の床面が貼られており、覆土は不明である。

遺物 第4A号跡はすべて土師器で、東カマドから出土の坏(1)、高台付坏(2)、甕(3)を図示した。1の坏は体部外面と底部へラ削り。2の高台付坏は長脚タイプと思われる。3の甕は肩部を最大径とし、底部に向かってすぼまる。第4B号跡はカマド内に遺存した土師器の小形甕(1)と須恵器の甕(2)の破片を図示した。1の小形甕は丸底風で、口縁の外面を平らにする。2の甕は胴部外面が平行文叩き目、内面が同心円文当具風。

第5号竪穴住居跡(第8・123・210図、図版3)

遺構 8F・8Gグリッドに位置する。南側は水田化に際して削平されており、西壁は鉄鍬トレンチに切られていた。前記の状況から、規模・形状は明確にし難いが、一辺4.8m以上の方形で推察される。壁は北で現存高30cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは、北辺の中央東寄りに構築されていたと推測される。壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。遺存状態は不良で右袖部の下部と火床面が確認され、火床面は赤化していた。右袖部より土師器の坏(2)、カマドの南東脇の床面より同高台付坏(3)、甕(5)などが出土した。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土が主体で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1・2)、高台付坏(3)、甕(5)、須恵器の高台付坏(4)、壺(6)を図示した。1・2の坏及び3の高台付坏は内面黒色処理を施し、2の坏は底部未切り、3の高台付坏は体部外面に稜をもつ。5の甕は長胴形。6の壺は胴部外面に叩き目目が不明瞭。

第6号竪穴住居跡(第9・123・210図、図版3・22)

遺構 9H・9Iグリッドに位置する。規模・形状は南北3.5m、東西4.4mの長方形。壁は北西で現存高30cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、ほぼ平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。遺存状態は悪いが、袖部の下部と火床面が遺存し、火床面は赤化しており、土師器の坏(1)が出土した。覆土は、ローム・炭化物・焼土粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1)、甕(皿・2)、甕(5)、須恵器の灰須戸(3)、高台付坏(4)、石製品の砥石(6)を図示した。1の坏、2の甕(皿)はウルク処理を施し、外面に僅かに稜を残す。5の甕は長胴形で、底部外面に木葉文。4の高台付坏は、底部外面が高台より僅かに突出する。

第7号竪穴住居跡(第10・123・210図、図版3・22)

遺構 10Iグリッドに位置する。西側に第22号溝跡、中央部に第23号溝跡が南北に重複し、これらに切られていた(第8号参照)。南西部に先行する遺構状の掘り込みを確認したが精密の結果、風倒木痕と判明した。規模・形状は南北5.4m、東西5.6mのほぼ方形。壁は現存高20～25cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかったが、床面下の調査で重複する2組(8本)のピット(P1～P8)と、その外側を囲繞する掘り込みを確認した。P1～P4、P5～P8が主柱穴で、P5～P8が当初の主柱穴。P1～P4は改築後の主柱穴と考えられ、建て替え・拡張の存在が知られる。カマドは、北辺の中央部に僅かに壁を切り込み、白色粘土で構築されていたが、後世の第23号跡に切られており遺存状態が悪い。また、これより50cm内側に旧カマドの火床面と思われる焼面の痕跡が確認された。覆土は、ローム粒・塊を多く含む暗褐色土で、人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1)、甕(3)、須恵器の壺(2)、甕(4)、鉄製品の鍔先(5)を図示した。1の坏は外面に稜をもつ。3の甕は長胴形。4の甕は外面がクシ状工具による条線文、内面が同心円文当具風。5の鍔先は一部欠損するが、幅7.5cm、長さ8.5cmで小形である。

第8号竪穴住居跡(第11・124・210図、図版4・22)

遺構 11K・12K・12Lグリッドに位置する。北西隅は調査区外に延びる。規模・形状は南北6.4m、東西6.3mの隅丸方形。壁は現存高5～10cm、やや外傾する。壁下に壁溝は認められなかった。床面は大部分がローム主体の貼床でほぼ平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P8の計8基を確認し、P1～P4が主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。炉跡はP1とP2の中間よりやや内側に確認された。南北60cm、東西50cmの楕円形で、床面を掘り固めて灰白色粘土を敷き詰めており、火床面は床面と同レベルにあり、赤変硬化していた。また、南半部の床面上には炭化材と少量の焼土が認められ、火災住居跡と推察される。しかし、炭化物及び焼土の遺存状態から居住中の火災ではなく、残材処理的なものと推察される。覆土は、ローム粒・塊混じりの暗褐色土で、少量の炭化物・焼土粒を含み、人為的埋没と考えられる。床面下の調査の結果、最終時の竪穴の60～110cm内側に深さ12～20cm程凹んでいた。新たに確認されたピットの位置から、建て替え拡張の痕跡と考えられる。なお、内側の凹みに床面や市溝の痕跡が認められないことから、この凹み部分が旧「堅穴」の範囲とは断定し難い。

遺物 すべて土師器で、手づくね土器(1～7)、壺(8)、台付甕(9)、S字状口縁壺(10)、甕(11)を図示した。手づくね土器は床面及びP5の覆土、床面下などから計10点以上出土している。9の台付甕の台脚部は内外面、10のS字状口縁壺は胴部外面、11の甕は胴部外面と口縁部内面にハゲ目目が明瞭。

第9号竪穴住居跡 (第12・124・210図、図版4・22)

遺構 14K・14L・15K・15Lグリッドに位置する。西半部は調査区外に延びる。前記の状況から、規模・形状は明確に難しいが、南北3.6m、現存の東西2.0m、本来は一辺3.6mの方形と推察される。壁は北で現存高30cm、ほぼ直立する。北辺から東辺北半と南辺の壁下に幅16～22cm、深さ8cm程の壁溝が確認された。床面はローム主体の貼床で、平埤で固く締まっていた。柱穴は確認されなかった。カマドは、北壁のほぼ中央に壁を切り込み白色粘土で構築されていた。カマドの手前や東端より土師器の坏(1・3)、小形甕(4)、瓶(5)、甕(6)などが出土した。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、坏(1・3)、小形甕(4)、瓶(5)、甕(6)を図示した。1・3の坏は、いずれも底部内面に放射状のミガキを施す。1・3は模倣型で、坏形、2は半球形。4の小形甕は平底で、胴部が僅かに膨らむ。5の瓶は内面に丁寧なミガキ。6の甕は胴部にやや膨らみを残し、胴部外面にハケ目痕が明瞭である。

第10号竪穴住居跡 (第13・123・210図、図版4)

遺構 12L・12Mグリッドに位置する。南東部が第35号竪穴住居跡と重複しこれを切っていた。規模・形状は南北3.4m、東西4.0mの長方形。壁は現存高10～25cm、ほぼ直立する。床面は平埤で固く締まっていた。柱穴、壁溝、炉跡は確認されなかった。南壁部に径30cm、厚さ5cm程の灰色粘土塊が確認されたが、被熱を受けた形跡は認められなかった。第8号竪穴住居跡の例から、炉の用材の可能性が高いものの使用されていなかった。位置的に見て本跡に伴うものではなく、第35号跡に伴うと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。なお、本跡の床面下の調査で先行する第11号土坑を確認した(第4節参照)。

遺物 すべて土師器で、覆土中より出土した。高坏(1)、甕(2・3)、台付甕(4)、甕(5)を図示した。1の高坏は胴部の外面に丁寧なヘラミガキ。2・3の甕は折り返し口縁で、2は大振りである。

第11号竪穴住居跡 (第14・124・210図、図版4・22)

遺構 13L・13Mグリッドに位置する。規模・形状は南北3.5m、東西3.7mの方形。壁は現存高55～65cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平埤で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄り壁に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。カマドを挟んで両側の壁がやや段違いになる。また、壁際の袖部にはロームを掘り残してあった。火床面から奥壁部分は赤化している。左袖部付近より土師器の坏(1)が出土した。また、カマド東端の壁際(床面上約50cm)より入子状の同坏(2・4)が3点重なって出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1・4)、石製紡錘車の破片(5)を図示した。1の坏は模倣型で甕形。2の坏はやや小形で、仕上げが粗雑であり底部が突出する。3の坏は底部外面に木炭痕を残す。4の坏は外面に僅かに稜を残し、平底風。また、覆土中より甕が9点出土し、編物織石の可能性がある。

第12号竪穴住居跡 (第15・125・210図、図版4・22)

遺構 13L・13Mグリッドに位置する。南東部が第1号井戸跡と重複し、これに切られていた(第5節参照)。規模・形状は南北3.3m、東西3.5mの方形。壁は現存高33～40cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平埤で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央に僅かに壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と両袖部の下部が遺存し、火床面は赤化していた。床面より土師器の坏(1・3)、瓶(4)、石製品の砥石(5)などが出土した。覆土は、多量のローム粒・塊を含む褐色土で、人為的埋没と考えられ、第1号井戸跡との重複に関連するものと推察される。

遺物 土師器の坏(1・3)と瓶(4)、自然石利用の石製品の砥石(5)を図示した。1の坏は半球形。2・3の坏は模倣型の坏形。4の瓶は内面に丁寧なミガキを施す。

第13号竪穴住居跡 (第16・125・210図、図版4・22)

遺構 13L・13M・14L・14Mグリッドに位置する。北壁部に第7号土坑が重複し、これに切られていた(第4節参照)。竪穴の掘り込みが浅く北辺の壁が失われ、南東部は第32号竪穴住居跡に切られていた。前記の状況から、本来の規模・形状は明確に難しいが、遺存部分から南北8.2m、東西7.6mのほぼ方形と推察される。壁は西で現存高15cm、直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム漸移層中にあり、ほぼ平埤だが締まりはさほど強くない。ピットはP1～P7の7基確認され、P1～P4が主柱穴、南東隅のP5は貯蔵穴と考えられる。炉跡は、P1とP2の中間よりやや内側に確認され、径1.0m程の円形の地床炉である。P5内より土師器の器台(4)、その周辺から同器台(3)、埴(5)、石製品の砥石(6)などが出土した。また、北壁寄りからは土師器の高坏(2)、甕(7)などが出土している。また、本跡の南半部に少量の炭化材と焼土が遺存し、火災住居跡の可能性もある。しかし、出土量から居住中の火災とは考え難く、残材処理などに伴う行為の可能性が高い。覆土は、ローム粒・塊混じりの暗褐色土で、少量の炭化物・焼土粒が含まれ、人為的埋没と推察される。

遺物 土師器の高坏(1)、大形高坏(2)、器台(3・4)、埴(5)、S字状口縁甕(6)、甕(7)、甕(8)、石製品の砥石(9)を図示した。1の高坏は胴部に透かし孔を穿つ。2は大形高坏の坏部である。3・4の器台は脚部に透かし孔を穿ち、3は受部から脚部への穿孔は貫通せず、

4は貫通している。5は口径が18cmと大振りな埴である。6のS字状口縁部は胴部外面にハケ目直が明瞭である。8の蓋は有段口縁で、大振りである。9の底石は一面に刃揃え痕が顕著。

第14号竪穴住居跡 (第17・125・210図、図版4・22)

遺構 15L・15M・16L・16Mグリッドに位置する。南辺の中程には第8号土坑が重複し、これに切られていた(第4節参照)。規模・形状は南北3.1～3.6m、東西4.3mの不整の長方形。壁は平均の現存高35cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認され、2本柱の主柱穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に、壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が遺存し、火床面は広範囲に赤化しており、カマド内より支脚(礎)と須恵器の坏(1)、礎2点などが出土した。この2点の礎は袖部の構造物の可能性がある。竪穴の廃絶時に除去されたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏(1)、甕(4)、土師器の甕(2・3)を図示した。1の坏は体部外面の下部にヘラ削りを施し、底部外面も一方のヘラ削りである。4の甕は胴部外面に平行文叩き目、内面が無文当具痕。2の甕は常盤型、3の甕は武庫型である。

第17号竪穴住居跡 (第18・126・210図、図版4・22)

遺構 18M・19Mグリッドに位置する。東側に第24号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北3.8～4.8m、東西5.0mの不整形。壁は西で現存高50cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、ほぼ平坦で固く締まっていた。ピット、壁溝は確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに、壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が遺存し、火床面は赤化していた。カマドの南東の床面より須恵器の坏(1)が出土し、覆土中より鉄製品の鏝(5)、刀子(6)などが出土している。また、床面上に30×70cm、30×40cmの範囲で焼土が遺存したが性格は不明である。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏(1)、甕(4)、土師器の坏(2)、甕(3)、鉄製品の鏝(5)、刀子(6)を図示した。1の坏はほぼ完形で底部糸切り。4の甕は内面に輪模が度明瞭。2の坏は内面黒色処理を施す。3の甕は武庫型である。5の鏝は刃部先端を欠損し、現存長約14cm。6の刀子は刃部の破片。

第18号竪穴住居跡 (第19・210図、図版5)

遺構 15M・16Mグリッドに位置する。規模・形状は南北3.3m、東西3.2～3.6mの不整形。壁は現存高40～50cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。カマドの東側に確認されたP1は貯蔵穴と推察される。カマドは北辺のほぼ中央に、壁を僅かに切り込み、白色粘土で構築されていた。このカマドは袖部にロームを掘り残して袖芯としており、白色粘土は右袖部のみ遺存していた。火床面から奥壁にかけ赤化していた。左袖部の粘土などは竪穴の廃絶時に失われたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 覆土中より土師器の坏・甕などの小片が出土したが、図示し得るものはなかった。

第19号竪穴住居跡 (第20・126・210図、図版5・22)

遺構 16M・16N・17Mグリッドに位置する。北東部に第38号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北3.8m、東西4.6mの長方形。壁は現存高60～70cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに、壁を大きく切り込み、黄色粘質土で構築されていた。袖部は確認されなかったが、火床面から奥壁にかけて赤化していた。袖部は竪穴の廃絶時に失われたと考えられる。カマド内より土師器の甕(6)が出土した。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土が主体で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏(1)、高台付坏(2)、高台付甕(3)、坏底部加工品の円板(4)、土師器の小形甕(5)、甕(6)を図示した。1の坏は底部外面へヘラ削りでヘラ記号が施される。4の円板は中央に穿孔はないが、紡錘車に加工の未成品と思われる。5の小形甕、6の甕は常盤型。

第20号竪穴住居跡 (第21・126・210図、図版5・22)

遺構 17M・17N・18M・18Nグリッドに位置する。上部を東西に第20号溝溝が重複し、これに切られていた(第8節参照)。規模・形状は南北5.1m、東西4.6～5.0mの不整形。壁は現存高18～80cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P5の5基確認し、P1～P4が主柱穴、P5は出入口の施設と考えられる。カマドは北辺の中央に壁を僅かに切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面は赤化し、袖部の下部が遺存していた。このカマドは、両袖部にロームを8～12cm程の高さで掘り残して袖芯としていた。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1～4)、甕(5)、須恵器の甕(6)の他、覆土中より出土した後世の土師器の坏(7)を図示した。1・2の坏は外面に僅かに稜を残す。3・4の坏は半球形。5の甕は長胴形。7の坏は内面に黒色処理を施し、体部外面に横線で「義」の墨書が銘記されている。6の甕は胴部外面に平行文叩き目、内面に同心円文当具痕。

第21号竪穴住居跡 (第22・126・210図、図版5・23)

遺構 7Dグリッドに位置し、南半部は水田化に際して削平されていた。前記の状況から本来の規模・形状は明確に難しいが、遺存する北辺から一辺4.0mの方形もしくはこれを長辺とする長方形と推定される。壁は北で現存高30cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、黄褐色粘質土で構築されていた。袖部の下部が僅かに確認され、ロームを10cm程の高さで掘り残して袖芯としていた。この袖芯の状況から、本跡のカマドは大部分が壁より外に構築され、竪穴内には15～20cm程しか出ていなかったと推察される。火床面から奥壁にかけて赤化していた。カマド内より土師器の台付甕(2・3)が出土した。2の台付甕は倒伏で出土しており、支脚に転用されたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査で、北東・北西両側に径1.2～1.3m、深さ20cm程の掘り込みが確認された。北東側の掘り込みはカマド用材であったと見られる被熱を受けた粘土、北西側のものは多量のローム粒・塊混じりの暗褐色土で埋め戻されていた。

遺物 すべて土師器で、甕(1)、台付甕(2・3)、甕(4)を図示した。1の甕は内面黒色処理を施す。2・3の台付甕、4の甕は武蔵型である。

第22号竪穴住居跡 (第23・127・210図)

遺構 17M・17Nグリッドに位置する。南東隅は第38号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。また、竪穴の掘り込みが浅く、北・東辺は床面の陥没で想定した。前記の状況から、本来の規模・形状は明確に難しいが遺存部分から、南北3.0m、東西2.6～2.8mの不整形と推察される。壁は西で現存高15cm、ほぼ直立する。床面はローム漸移層中にあり、平坦ではあるが締まりは強くない。壁溝、ピット、灰溝は確認されなかった。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、器台(1)、壺(2)、甕(3)を図示した。1の器台は脚部に透かし孔を穿つ。2の壺は有段口縁。

第23号竪穴住居跡 (第24・210図、図版5)

遺構 8E・8Fグリッドに位置し、南側は水田化に際して削平されていた。西半部は第3号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。前記の状況から、本来の規模・形状は明確に難しいが、遺存部分から一辺3.2mの方形もしくはこれを長辺とする長方形と推察される。壁は北で現存高40cm、やや外傾していた。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに、壁を大きく切り込み、灰白色粘土で構築されていた。左袖部の下部と火床面が遺存し、火床面は赤化していた。カマド内より支脚と思われる被熱を受けた甕が出土した。右袖部などは、竪穴の廃絶時に除去されたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 覆土中より土師器の破片が出土したが、図示し得るものはなかった。

第24号竪穴住居跡 (第25・127・210図、図版5)

遺構 18M・18N・19M・19Nグリッドに位置する。西側が第17号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。前記の状況から、本来の規模・形状は明確に難しいが、遺存部分から南北3.3～3.8m、東西推定4.1mの不整形と推察される。壁は東で現存高65cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に、壁を大きく切り込み、黄色粘質土で構築されていた。袖部の下部と火床面が確認され、火床面は赤化していた。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の高台付杯(1)、土師器の壺(2)、甕(3～5)を図示した。1の高台付杯は底径10cmとやや大振りである。2の壺は短頸の広口壺もしくは鉢の可能性もある。甕は4の胴形と、3・5の長胴形が見られ、3は常盤型の甕である。

第25号竪穴住居跡 (第26・127・210図、図版5・23)

遺構 19M・19Nグリッドに位置する。規模・形状は一辺6.3mの方形。壁は平均の現存高40cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P4の4基確認し、いずれも主柱穴と考えられる。また、P1から北壁に向けて延びるD1、P3から東～50cm程延びた後直角に折れて北壁に向けて延びるD2、同じくP3から西壁に向けて延びるD3、西壁の中央やや南寄りから東に向けて1.5m程延びるD4などの間仕切溝と考えられる施設が確認された。それぞれ幅15～20cm、深さ5～8cmである。カマドは東辺の中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、両袖部はロームを10～25cm程の高さで掘り残して袖芯としていた。火床面から奥壁にかけて広範囲に赤化していた。左袖部からは土師器の甕片が出土し、その南端から構築材の一部と考えられる被熱を受けた凝灰岩の破片が出土している。また、右袖部の東端からも土師器の甕片が出土した。なお、床面上もしくはやや浮いた状態で焼土や炭化材が遺存しており、火災住居跡と考えられる。焼土、炭化材の遺存状況及び遺物の出土状態から、居住中に火災に遭ったと推察される。覆土は、下位がローム粒混じりの黒褐色土で、少量の焼土・炭化物粒を含む。上位は多量のローム粒・塊を含む暗褐色土で、自然埋没の後人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の杯(1～8)、甕(9)、甕(10)、須恵器の罐(11)、石製品の紡錘車(12)を図示した。本跡の杯類は、須恵器模倣型と呼ぶ土師器杯類の中でもモデル的の形状で、須恵器の杯蓋を模倣した蓋形(1～3・8)と杯身を模倣した杯形(4・5)の他に、半球形(6・7)が見

られた。これらのうち、5と8の環は図版5-1に示した如く、坏身と坏蓋を意図して使用されていたものと判断される。今回図示しなかったものも含めると、坏身タイプ5、坏蓋タイプ5、半球形7点の割合であった。坏蓋と坏身のタイプが同数であり、他もセットで使用されていた可能性が高い。9の甕はやや脚が張る長胴形。10の甕は口径約28cmと大振りであり、内面は丁寧なミガキを施す。11は甕の口縁部。12は甕面逆台形の紡錘車で、被熱を受けて破損、滑石製。

第26号竪穴住居跡 (第27・128・210図、図版5・23)

遺構 19L・19M・20L・20Mグリッドに位置する。規模・形状は南北5.8m、東西7.0mの方形。壁は現存高30～50cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝が確認され、幅20～26cm、深さ6～10cmで、カマド部分を除き圍繞していた。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P8の8基確認した。P1～P4が主柱穴。P5は出入口の施設。P6は間仕切に伴う補助柱穴。P7は貯蔵穴である。また、P1から西壁に向かって延びるD1、P6から東壁に向かって延びるD2、P4から東壁に向かって延びるD3の3条の間仕切溝を確認した。それぞれ幅15～20cm、深さ5～8cmである。また、カマドに対面する南壁際の床面下で確認したP8は、P5の内側20cmに所在し、出入口施設の可能性が推察されるが、建て替え拡張の痕跡は確認されておらず疑問を残す。なお、北西隅と西壁際に床面下の掘り込みが認められた。東壁際で焼土の遺存が見られたが性格は判然としない。カマドは北辺の中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と両袖部の下部が遺存し、火床面は赤化していた。左袖部から土師器の甕片が出土した。P7の南側付近で土師器の坏(1)、鉢(3・4)、小形甕(5)、甕(6・7)などが出土した。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、少量の焼土粒を含み、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、坏(1・2)、鉢(3・4)、小形甕(5)、甕(6・7)を図示した。1の坏は模倣型の坏形。2の坏は半球形。3の鉢は口縁部が長く体部が膨らむ。4の鉢は半球形。5の小形甕は鉢の底部に細かく穿孔を施したような小振りの甕である。6・7の甕は長胴形。

第27号竪穴住居跡 (第28・128・210図、図版6)

遺構 20M・20Nグリッドに位置する。規模・形状は南北4.1～4.4m、東西4.8mの不整形方形。壁は現存高40～53cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に、壁をやや切り込み、白色粘土で構築されていた。右袖部の下部と火床面が遺存し、火床面は赤化していた。また、袖部は10～15cmの高さでロームを掘り残して袖芯としていた。左袖部などは竪穴の陥没時に失われたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1～3)、甕(4・5)、石製品の砥石(6)を図示した。1の坏は外面に稜をもち、口縁部に段が見られる。2・3の坏は半球形である。5の甕の底部外面に木炭痕が認められる。6の砥石は凝灰岩製。

第29号竪穴住居跡 (第30・128・211図、図版6)

遺構 21Lグリッドに位置する。北東隅が第30号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北3.4m、東西4.0mの長方形。壁は現存高45～50cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の東寄り壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。カマドは大部分が壁の外に設けられ、袖部が僅かに竪穴内に設けられていた。火床面は赤化し、礎利用の支脚、左袖部の補強材の礎が遺存していた。カマドの南西端から土師器の坏(1)、南端から須恵器の甕(5)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1)、甕(3)、須恵器の坏(2)、甕(4・5)を図示した。1の坏は内面黒色処理を施し、底部糸切り。5の甕は胴部外面が平行文目、内面が無文当具度。

第30号竪穴住居跡 (第29・129・211図、図版6)

遺構 21L・21M・22L・22Mグリッドに位置する。南東隅が第31号竪穴住居跡、東辺北寄りが第47号竪穴住居跡、南西隅が第29号竪穴住居跡と重複し、これらに切られていた。規模・形状は南北7.3m、東西6.2mの長方形。壁は現存高5～10cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、貼床で平坦で固く締まっていた。壁溝は確認されなかった。ピットはP1～P5の5基確認し、P1～P4が主柱穴。P5は貯蔵穴と考えられる。いずれのピットも平面方形であった。が溝はP1とP3の中間よりややP1寄りに位置し、径50×60cm程の楕円形の床床脚であった。火床面は床面と同レベルで赤化していた。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、坏(1・2)、鉢(3)、甕(4)を図示した。2の坏は底部内面に放射状のミガキが顯著である。3の鉢は体部が浅く、口縁部が外傾する。4の甕は胴部外面のハケ目紋が明瞭。

第31号竪穴住居跡 (第31・129・211図、図版6・23)

遺構 21Mグリッドに位置する。北西部が第30号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。北東隅が第47号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北3.0～3.2m、東西4.0mの長方形。壁は現存高25～40cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面が確認され、赤化していた。袖部は6～10cmの高さにロームを掘り残して袖芯としていたが、粘土による袖部は遺存しなかった。袖部などは竪穴の陥

絶時に失われたと考えられる。覆土中より須恵器の坏(1)、高台付坏(3・4)、甕(5)などが出土した。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべての須恵器で、坏(1・2)、高台付坏(3・4)、甕(5)を図示した。1の坏は底部へら起こし、4の高台付坏は高台内に「一」のへら記号が見られる。5の甕は胴部外面に平行文叩き目、内面が無文当具肌。

第32号竪穴住居跡 (第32・129・210図、図版6)

遺構 13・14Mグリッドに位置する。北西部が第13号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。南辺の中段が第9号土坑と重複し、これに切られていた(第4節参照)。規模・形状は南北3.5～3.8m、東西3.6mのほぼ方形。壁は現存高60～70cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平埤で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を切り込み、茶褐色・黄緑粘質土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。火床面の範囲に比べて袖部の範囲が狭く、竪穴の廃絶時に失われたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の高坏(1)、甕(2)、須恵器の甕(3)、石製品の砥石(4)を図示した。1の高坏は小片で外面と脚部内面へら削り、坏部内面は放射状のミガキを施す。3の甕は胴部外面に平行文叩き目、内面が同心円文当具肌。4の砥石は凝灰岩製。

第33号竪穴住居跡 (第35・130・131・210図、図版6・23)

遺構 15Nグリッドに位置する。第18号竪穴住居跡と重複し、これに切られていたと考えられる(第2節参照)。規模・形状は南北5.5m、東西5.8mのほぼ方形。壁は現存高45～85cm、直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平埤で固く締まっていた。ピットはP1～P5の5基確認し、P1～P4が主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部が確認され、火床面は赤化していた。また、8～10cm程の高さにロームを掘り残し袖芯としていた。カマド内及び貯蔵などから、完形もしくは完形に近い土師器の坏(2)、小形甕(7・8)、小形甕(9・10)、甕(11～13)、甕(14)などが出土している。また、床面上に炭化材と少量の焼土が遺存し、火災住居跡と考えられる。焼土の量が少ないものの、炭化材の遺存状態や遺物の出土状況から居住中の火災と推察される。覆土は、ローム粒を多量に含む黒褐色土で、人為的埋没と考えられる。また、床面下の調査を行った結果、西半部の壁下に壁溝、間仕切溝(D1～D3)の他、新たにP6～P13の計8基のピットが確認された。床面下で確認されたピットのうち、P7～P10が建て替え前の主柱穴、P12は出入口施設と考えられる。また、南壁部に確認されたP6は最終時の出入口施設、P11も同様と思われる。P1から西壁に向かって延びるD1とP3から西壁に向かって延びるD3は最終時の壁、P9から西壁に向かって延びるD2は建て替え前の竪穴に伴うものと考えられる。なお、柱穴の配置を見ると北側の拉張はなく、東・西・南側の拉張が明確であり、南側はそれが顕著である。

遺物 石製品の白玉(15)以外はすべて土師器で、坏(1～5)、鉢(6)、小形甕(7・8)、小形甕(9・10)、甕(11～13)、甕(14)を図示した。坏は模倣型の坏形(1・2)と半球形(3～5)がある。6の鉢、8の小形甕、10の小形甕、11・13の甕はカマド構築材であった。9の小形甕、14の甕は通常の形状であるが、10の小形甕は小形甕の底部を穿孔した形状である。甕11・12の長胴形と13の胴部形が見られるが、長胴形が主体と思われる。15の白玉はホルンフェルス製。

第34号竪穴住居跡 (第33・129・210図、図版6)

遺構 13M・13N・14M・14Nグリッドに位置する。北辺西寄り第7号竪穴住居跡(ハ5)に切られていた(第2節参照)。規模・形状は南北3.6m、東西3.6～3.8mのほぼ方形。壁は現存高45～60cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平埤で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央に僅かに壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。袖部は8～12cmの高さにロームを掘り残して袖芯としていた。なお、左袖部では袖芯のロームが被熱を受けて赤変硬化していた。北東隅の床面より土師器の坏(2)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべての土師器で、坏(1・2)、鉢(3)、甕(4)を図示した。1・2の坏は、模倣型で1は壺形、2は環形。

第35号竪穴住居跡 (第13・129・210図、図版4)

遺構 12L・12Mグリッドに位置する。北西部が第10号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。また、南東部は調査区外に延びる。前記の状況から、本来の規模・形状は明確にしないが、遺存部分から、南北3.2m、東西3.6m程の不整形と推定される。壁は現存高5～15cm、直立する。床面はローム層移層中にあり、平埤ではあるが締まりは強くない。壁溝、ピット、炉跡は確認されなかった。床面に径30～45cmの範囲で3か所に焼土が認められたが性格は不明である。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、炭化物・焼土粒を少量含む、人為的埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、手づね土器(1)、器台(2)、甕(3・4)、壺(5)を図示した。2の器台は脚部に透かし孔を穿つ。5の甕は口縁部にS字状口縁を意図したと思われる屈曲が認められる。

第36号壁穴住居跡 (第34・129・210図、図版6・23)

遺構 15N・15Oグリッドに位置する。規模・形状は一边2.6mの方形。壁は現存高18～46cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦ではあるが締まりは強くない。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは東辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。カマド内より土師器の坏 (1) 小片が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏 (1・2)、鉢 (3) と鉄製品の鎌 (4) を図示した。1の坏は模倣型の蓋形。2の坏は半球形。3の鉢は径13cm、器高12cmとやや大振りのものである。4の鎌は刃部の先端を欠損し、現存長約11cm。

第37号壁穴住居跡 (第36・131・210図、図版6・23)

遺構 12Mグリッドに位置する。東辺南寄り第10号土坑と重複し、これに切られていた (第4節参照)。規模・形状は南北3.0m、東西3.3mのほぼ方形。壁は現存高20～50cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央東寄りに壁を大きく切り込み、黄褐色粘質土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。袖部の壁穴内への張り出しは20～25cmと短く、両先端には土が遺存していた。高さは16cm程で、両者の間隔は40cmである。また、西壁側に長さ70cm、幅25～30cm、厚さ15cm程の凝灰岩の切石が遺存しており、カマド焚口の底部分の石材であったと推察される。壁穴の廃絶時に除去されたと考えられる。東壁寄りの床面より土師器の甕 (4) が出土した。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏 (1)、壺 (3)、土師器の坏 (2)、甕 (4)、鉄製品の刀子 (5) を図示した。1の坏は完形で、底部糸切り。4の甕は武蔵型である。5の刀子は柄部分の破片で、木質及び銅が遺存する。

第38号壁穴住居跡 (第37・131・210図、図版6・23)

遺構 16M・16N・17M・17Nグリッドに位置する。南西部が第19号壁穴住居跡、北西隅が第22号壁穴住居跡と重複し、これらを切っていた。規模・形状は南北3.5m、東西4.4mの長方形。壁は現存高15～45cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の粘床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。遺存状態が不良で、火床面は確認されたが、袖部は確認されなかった。中央部床面より須恵器の坏 (1) が出土した。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏 (1)、坏の底部を転用加工した紡錘車 (5)、土師器の坏 (2・3)、甕 (4) を図示した。1の坏は底部へら起こし、5の転用紡錘車は底部糸切りの坏を利用したもので、内面側は穿孔部分を中心とした放射状の線刻が認められる。2・3の坏は内面黒色処理が施され、3は底部糸切り、4の甕は常盤型である。

第39号壁穴住居跡 (第38・131・210図、図版6・23)

遺構 19N・19Oグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0m、東西3.2～3.5mの不整形方形。壁は現存高35～55cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、袖部の壁と接する付近にはロームの掘り残しが認められ、袖部の先端には凝灰岩の切石が補強材として両側に立てられていた。高さは15cm程で、両者の間隔は30cm程であった。北東隅の床面より土師器の坏 (1)、鉢 (2)、甕 (3) が出土した。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏 (1)、鉢 (2)、甕 (3) を図示した。1の坏は模倣型で蓋形、内厚である。2の鉢は粗雑な仕上げである。

第40号壁穴住居跡 (第39・132・210図、図版7・23)

遺構 20Nグリッドに位置する。規模・形状は南北3.6m、東西4.2～4.5mの長方形。壁は現存高70～80cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットは北東隅にP1が確認され、貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。P1内より土師器の坏 (4)、床面より同坏 (2・3)、甕 (5) が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、坏 (1～4)、甕 (5) を図示した。2・3の坏は模倣型で蓋形。1・4の坏は半球形である。5の甕は胴形である。

第41号壁穴住居跡 (第40・133・210図、図版7)

遺構 19O・20Oグリッドに位置する。規模・形状は南北3.4～3.9m、東西4.0～4.4mの不整形方形。壁は現存高50～80cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央に壁を切り込み、黄褐色粘質土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、左側袖部は遺存状態が不良で僅かに遺存した。壁穴の廃絶時に失われたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 覆土中より須恵器の甕 (1) が出土したが、第44号壁穴住居跡の7の甕 (第133図) と接合した為、同図参照。

第42号竪穴住居跡 (第41・132・210図、図版7)

遺構 190グリッドに位置する。規模・形状は南北3.0m、東西3.4mの方形。壁は現存高35～75cm、ほぼ直立する。床面は暗褐色土中であり、平坦ではあるが湧水の為、締まりは弱い。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化し、一部は強い被熱を受けて硬化していた。また、袖部の遺存状態が不良で、火床面より狭い範囲で確認され、竪穴の廃絶時に失われたと考えられる。覆土は、上位がローム粒・塊を含む暗褐色土、下位がローム粒混じりの褐色土で、自然埋没の後人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の小形甕 (1)、甕 (2・3)、須恵器の壺 (4) を図示した。1の小形甕は肉厚である。2の甕は長胴形。3の甕は底部外面に木炭痕が認められる。

第43号竪穴住居跡 (第42・132・210図、図版7・24)

遺構 200・20Pグリッドに位置する。規模・形状は南北3.6～4.0m、東西4.8mの不整形方形。壁は現存高30～50cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の粘土で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認し、2本柱の支柱穴と考えられる。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。左側袖部は遺存状態が不良で、遺存部分は狭い。また、両袖部が壁と接する付近は壁が幾分内側に迫り出す状態であり、カマドの袖部を意識して削り残したと推察される。右袖部及びその東端から、支脚と思われる被熱した土が複数出土した。左側袖部とともに竪穴の廃絶時に失われたと考えられる。床面から多数の遺物が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の壺 (1)、高台付杯 (2)、杯 (3・4)、甕 (7・8)、土師器の小形甕 (5)、甕 (6) の他、鉄製品の鎌 (9)、刀子 (10～12)、鉄鏃 (13・14) を図示した。3の杯は底部糸切り、4の杯はヘラ起こしである。5の小形甕、6の甕は武蔵型である。9の鎌は折れ曲がっているが、完存する。11は刀子の茎で、刃部の大部分が欠損するが刃部との境に鎌が遺存する。12は刀子の茎部分で木質が僅かに遺存する。13・14はともに無茎の鏃で、13は中央に小孔をもつ。

第44号竪穴住居跡 (第43・133・210図、図版7・24)

遺構 19Q・20Qグリッドに位置する。規模・形状は南北4.0m、東西4.7mの長方形。壁は現存高55～70cm、直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の粘土で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P4の4基確認され、いずれも支柱穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。床面の所々に径20cm程の焼土穴が認められた。床面及び床面に近い覆土中より土師器の杯 (1～5)、甕 (8)、須恵器の高台付杯 (6)、甕 (7) が出土した。覆土は、ローム粒・塊混じりの暗褐色土で、少量の焼土粒を含み、人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の杯 (1～5)、甕 (8)、須恵器の高台付杯 (6)、甕 (7) を図示した。土師器の杯は外面に僅かに稜を残すもの (1・3～5) と、半球形 (2) とが見られる。8の甕は胴部が、6の高台付杯は底部が高台より突出しない。7の甕は、第41号竪穴住居跡出土の甕 (1) の破片と接合し、本跡の遺物として図示した。焼成温度のやや低い燻し焼タイプである。

第45号竪穴住居跡 (第44・132・210図、図版7)

遺構 18P・18Q・19P・19Qグリッドに位置する。規模・形状は南北2.4～2.8m、東西2.5～2.8mの不整形方形。壁は現存高15～25cm、ほぼ直立する。床面は黒褐色土中であり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピット、炉跡は確認されなかった。竪穴の中央やや北寄りの床面上に径40cm程の範囲で、少量のローム粒と焼土を含む炭化物の遺存が確認された。床面に被熱による明確な赤変硬化は認められなかったが、炉跡であった可能性がある。覆土は、少量のローム粒混じりの黒色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、小形甕 (1)、高杯 (2)、壺 (3・4)、甕 (5) を図示した。1の小形甕は上下接合出来ないが、胴部の膨らみが弱い。2の高杯は胴部の横がHの字状に広がる。3の壺は折り返し口縁。

第46号竪穴住居跡 (第45・133・211図、図版7)

遺構 22L・22M・23L・23Mグリッドに位置する。東側が第48号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北3.0～3.4m、東西4.9mの不整形方形。壁は現存高22～40cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。床面の中央部から土師器の壺 (Ⅲ・2)、北東隅から同壺 (5)、南東隅から同壺 (6) が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の杯 (1)、壺 (Ⅲ・2)、鉢 (4)、甕 (5・6)、須恵器の壺 (3) を図示した。1の杯は半球形。2の壺 (Ⅲ) と4の鉢は口径20cm以上と大振りで、2の壺 (Ⅲ) は口縁部がやや外反する。甕は5の長胴形と6の胴部膨らみとが見られる。

第47号竪穴住居跡 (第46・132・211図)

遺構 21M・22Mグリッドに位置する。北西隅が第30号竪穴住居跡、南西部が第31号竪穴住居跡と重複し、第30号跡を切り、第31号跡に切られていた。規模・形状は南東部の壁が失われていて明確にし難いが、遺存部分から南北2.9m、東西2.6mのほぼ方形と推定される。壁は北で現存高10cm、ほぼ直立する。床面はローム層移層中にあり、平坦ではあるが締まりは強くない。壁溝、柱穴は確認されなかった。カマドは北辺の東端に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。遺存状態は不良で、詳細は明確にし難いが、火床面が確認された。火床面は赤化し、長さ15cm程の礫が支脚として立てられていた。竪穴の廃絶時に袖部等が失われたと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と思われる。

遺物 土師器の坏 (1)、甕 (2) を図示した。1の坏は口縁部で焼成が良好である。高台付坏の可能性もある。2の甕は長胴形で、底部外面に木葉痕が見られる。

第48号竪穴住居跡 (第47・133・211図、図版7)

遺構 22M・23Mグリッドに位置する。南西隅が第46号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。また、北側が調査区外に延びており、全体を調査出来なかった。前記の状況から、本来の規模・形状は明確にし難いが、遺存部分から東西6.4～6.6m、南北推定3.4m程の方形と推定される。壁は現存高10～17cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P3の3基確認し、P1・P2が主柱穴、P3は補助柱穴と考えられる。また、P3の北側に、幅30cm、長さ70cm、高さ5cm程の地ぶくれが東壁と平行するように確認された。床面には南東部を中心に焼土や炭化材の遺存が確認され、火災住居の可能性が考えられる。炉跡は、現存部分の北西部に確認され、径40×50cmの楕円に床面が赤変硬化していた。火床面は床面と同レベルの地床炉である。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、少量の炭化物粒及び焼土粒を含む。自然埋没と考えられる。なお、床面下の調査において、西壁及び南壁下に壁溝の痕跡が確認され、本来は囲繞していた可能性が高い。また、P3から東壁に向かって延びる間仕切溝 (D1) やP4～P6のピットが確認された。

遺物 すべて土師器で、埴 (1・2)、甕 (3)、壺 (4・5) を図示した。1の埴は口縁部の内外面ミガキを施す。2の埴は底部外面が上げ底状に凹む。3の甕は折り返しの口縁である。

第49号竪穴住居跡 (第48・133・211図、図版7)

遺構 21N・22Nグリッドに位置する。北側が第50号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北3.5～3.6m、東西4.0mのほぼ方形。また、北側に東西3.8m、南北0.9mの平坦面が設けられていた。壁は現存高が棚状施設まで平均50cm、確認面まで65cm程で、ほぼ直立する。なお、この部分は10cmの厚さで紫褐色の粘質土が敷き詰められており、固く締まっていた。この部分が第50号跡の覆土中にある為、補強の目的で行われたと考えられる。カマドの両側に空間を設けた形であり、棚状施設と考えられる。床面は、ローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。最終時の床面では、壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁及び前記の棚状施設を切り込み、白色粘土で構築されていた。煙道の先端が棚状施設の外まで延びることからも、両者の関係が示唆される。カマドは袖部の下部と火床面が確認された。火床面は広い範囲が赤化していたが、これに比べて袖部の遺存範囲が狭く、左側はそれが著しい。竪穴の廃絶時に失われたものと思われる。カマド内より須恵器の坏 (1)、大形甕 (4) の破片が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で自然埋没と考えられる。床面下の調査で、壁溝の痕跡、P1～P4のピット4基、竪穴の四隅の床面下の掘り込みなどが確認された。主柱穴は不明で、P4は出入口施設と考えられるが、P1～P3の性格は明確にし難い。P2の部分は、先行する第50号跡のP4に相当する部分である。

遺物 須恵器の坏 (1・2)、大形甕 (4)、土師器の坏 (3)、甕 (5) を図示した。1の坏は底部全切り。4は大形甕の口縁部で、クシ状工具で波状文を施す。3の坏は内面黒色処理を施す。5の甕は武蔵型である。

第50号竪穴住居跡 (第49・134・211図、図版7・8・24)

遺構 21N・21O・22N・22Oグリッドに位置する。南西部が第49号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北7.25m、東西7.2mの方形。壁は現存高30～50cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P6の6基確認し、P1～P4が主柱穴、P5が貯蔵穴と考えられ、P1・P5以外はいずれも平面形が方形である。また、P5は平面が円形であるが、位置的に貯蔵穴の可能性が高い。炉跡はP1とP3の中間よりやや内側に確認された。径60×90cmの楕円形で、火床面は床面とほぼ同レベルの地床炉であった。火床面は強い被熱を受けて赤変硬化し、北寄りには被熱を受けた白色粘土塊が確認され、枕木の代用と考えられる。床面には遺物が多数遺存しており、土師器の甕 (5・7)、S字状口縁甕 (6) などは破片が広範囲に散在していた。その他、同埴 (1)、鉢 (2)、小形甕 (3)、壺 (4) などがある。また、床面近くの覆土中より石製品の勾玉 (9)、管玉 (10)、臼玉 (11) なども出土している。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 前記の通り、石製品3点以外はいずれも土師器で、埴 (1)、鉢 (2)、小形甕 (3)、壺 (4)、甕 (5・7・8)、S字状口縁甕 (6)、石製品の勾玉 (9)、管玉 (10)、臼玉 (11) を図示した。1の埴、2の鉢は赤彩されている。4の壺は有段口縁である。5・7の甕及び6のS字状口縁甕は胴部外面にハケ目痕が明瞭である。9・10はネフライト (軟玉)、11は滑石製で、9の勾玉及び10の管玉は被熱を受けて変色している。

第51号壁穴住居跡 (第50・134・211図、図版8・24)

遺構 210グリッドに位置する。東側に第52号壁穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北3.8～4.2m、東西5.3mの不整形長方形。壁は現存高40～45cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認し、2本柱の主柱穴と考えられる。カマドは2基確認された。北(新)カマドは、北辺の中央やや東寄り壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、5～10cm程の高さでロームを掘り残して袖部としていた。カマド内より土師器の坏(2)、石製品の砥石(13)が出土した。東(旧)カマドは、東辺の南端に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていたが、移設に際して破壊されており、遺存状態は不良である。火床面が確認され、赤化していた。新カマドの右脇から須恵器の坏(3)、両脇から同坏(4)、P2の上面から土師器の台付甕(9)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1・2)、甕(7・8)、台付甕(9)、須恵器の坏(3・4)、甕(5)、甕(6)、鉄製品の刀子(10)、石製品の紡錘車(11・12)、砥石(13)を図示した。1・2の坏は内面黒色処理が施され、底部糸切り。7の甕は常総型。8の甕は胴部外面が平行文叩き目、内面は無文当具。3の坏は底部へら起こしで、4の坏は糸切り。5の甕は胴部外面が平行文叩き目、6の甕は胴部外面が無文、内面はともに無文当具。10の刀子は全長13.8cmで完存する。11・12の紡錘車は滑石製で、断面逆台形、重量11gと12gである。

第52号壁穴住居跡 (第51・135・211図、図版8・24)

遺構 210グリッドに位置する。西側に第51・53A号壁穴住居跡と重複し、第51号跡に切られ、第53A号跡を切っていた。規模・形状は南北4.8m、東西5.2mの方形。壁は現存高15～20cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P5の5基確認し、P1～P4が主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。これらのうち、P2・P3・P5は平面が方形もしくは長方形。炉跡はP1とP2の中間よりややP2寄り位置し、径40×60cmの楕円で、火床面は赤変硬化していた。火床面が床面とほぼ同レベルの地床であった。南端には長さ20cmの棒状の礎が2本並べられており、枕石と考えられる。本跡は、床面付近に灰土、炭化材などが多量に遺存し、火災住居と考えられる。灰土、炭化材の状況や遺物の出土状況から居住中の火災と推察される。遺物はP5より出土の土師器の甕(10)以外はいずれも床面もしくは床面近くの覆土中より出土した。覆土は、ローム粒・塊、炭化物・焼土粒混じりの黒褐色土で、人為的埋没と考えられる。床面下の調査では、P1・P3・P4で柱穴の重複が確認された。ピットの重複状況から建て替わりの存在が知られるものの、規模はほぼ同じであったと考えられる。なお、床面下で確認されたピットはいずれも平面が方形もしくは長方形であった。

遺物 石製品の砥石(11・12)以外はいずれも土師器で、鉢(1・2)、高坏(3)、小形甕(4・5)、台付甕(6)、小形台付甕(7)、甕(8)、甕(9・10)を図示した。1の鉢は口縁部が弱いS字状を呈する。3の高坏は胴部が中実の棒状である。10の甕は折返し口縁で、胴部に縦目の痕跡が認められる。火災の被熱によって縦目の痕跡が残されたと考えられる。砥石は小振り(11)と大振り(12)のものがあり、11は刃揃えの痕跡が目立つ。ともに砂岩製。

第53A号壁穴住居跡 (第53・136・211図、図版8・3)

遺構 210・220・222Pグリッドに位置する。大部分が第53B号壁穴住居跡との重複によって切られており、西・北壁跡の各1.0m程が遺存したに過ぎない。さらに、南西隅が第52号壁穴住居跡と重複し、これに切られていた。前記の状況から、本来の規模・形状は明確にしないが、遺存部分から、南北推定5.0m、東西5.4mのほぼ方形と推定される。壁は西で現存高20cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、ほぼ平坦で固く締まっていた。ピットはP1が本跡の床面で確認され、P3・P4は第53B号跡の床面下の調査で確認され、P2は第53B号跡のカマドの下に遺存していた。また、P4は規模・形状が他の3基と著しく異なり、疑問を残す。あるいは、貯蔵穴であった可能性も否めない。炉跡は確認されなかったが、位置的に第53B号跡との重複によって失われた可能性が高い。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、埴(1)、小形甕(2)、器台(3)、甕(4)、甕(5)を図示した。1の埴は平底である。3の器台は胴部に透かし孔を穿つ。5の甕は有段口縁である。

第53B号壁穴住居跡 (第53・136・211図、図版8・24)

遺構 210・21P・220・222Pグリッドに位置する。第53A号壁穴住居跡と大きく重複し、これを切っていた。規模・形状は南北4.1～4.3m、東西4.4mの隅丸方形。壁は現存高40～50cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認し、P1は貯蔵穴、P2は出入口の施設と考えられる。カマドは北辺の中央を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化しており、一部強い被熱で硬化していた。また、カマドの前に土師器の甕(7)、左脇からは同坏(2)、甕(6・8)などが出土した。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、坏(1～3)、高坏(4)、鉢(5)、甕(6～8)を図示した。坏は3点(1～3)出土し、いずれも半球形である。4の高坏はやや大振りのタイプである。甕は6のやや胴が張る胴張型と、7の長胴型があり、7は高さ45cmである。

第54号竪穴住居跡 (第52・136・211図、図版8・9)

遺構 21Pグリッドに位置する。規模・形状は南北4.8m、東西4.6～4.9mのほぼ方形。壁は現存高50～60cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ビットはP1～P4の4基確認し、主柱穴と考えられる。カマドは北辺の中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、一部強い被熱を受けて硬化していた。火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、遺存状態は不良である。東脇に支脚と思われる棒状の礎 (第2表・St.1) が遺存していた。また、繩物礎石を転用する可能性もある。竪穴の廃絶時に失われたものと考えられる。床面より土師器の坏 (1・2・4)、甕 (6) が出土した。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 鉄製品 (器種不明・7) 以外はすべて土師器で、坏 (1・4)、甕 (5)、甕 (6) を図示した。坏は1が平底風、2は半球形、3・4は模倣型の蓋形である。5は大振りの甕で口径26cmと推定され、内面は丁寧なミガキを施す。7の鉄製品は長さ5cm程の棒状で中程が湾曲している。

第55号竪穴住居跡 (第54・136・210図、図版9)

遺構 12M・12N・13M・13Nグリッドに位置する。規模・形状は南北3.8m、東西4.0mの方形。壁は現存高24～56cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ビットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、一部強い被熱を受けて硬化していた。また、火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、遺存状態は不良で竪穴の廃絶時に失われたものと思われる。床面より須恵器の坏 (1・2)、土師器の小形甕 (4)、甕 (6) などが出土した。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏 (1～3)、甕 (5)、土師器の小形甕 (4)、甕 (6) を図示した。1の坏は底部へら起こし、2・3の坏はへら起こしの後へら削り。5の甕は外面に自然釉を認める。4の小形甕は内厚で長石粒多く含む。6の甕は武蔵型。

第56号竪穴住居跡 (第55・137・211図、図版9)

遺構 20P・20Q・21P・21Qグリッドに位置する。規模・形状は一边2.6mの方形。壁は現存高30～40cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ビットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。カマドの大部分は竪穴内に設けられており、火床面は確認されたが、袖部は認められなかった。火床面は北範囲に赤化しており、支脚と考えられる礎が遺存していた。袖部は竪穴の廃絶時に失われたものと推察される。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の甕 (1) を図示した。1は長胴形の甕で、底部外面へら削り。

第57号竪穴住居跡 (第56・137・211図、図版9・25)

遺構 20Q・21Qグリッドに位置する。北西部が第58号竪穴住居跡、西辺中程が第14号土坑と重複し、これらを切っていた (第4節参照)。規模・形状は南北6.0m、東西6.2mの方形。壁は現存高30～60cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ビットはP1～P6・P14の7基確認し、P1～P4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺の中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。カマド内より土師器の鉢 (8)、甕 (12) が出土した。また、床面から同坏 (1～4)、鉢 (7) が出土していた。なお、床面に多数の炭材が散在し、北東の壁際と南西隅に焼土が遺存しており、火災住居と考えられる。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査を行った結果、P7～P13の7基のビットが確認された。P7～P10は主柱穴、P11・P13は出入口施設、P12・P14は貯蔵穴の可能性が高い。

遺物 土師器の坏 (1・4)、高坏 (5)、小形甕 (6)、鉢 (7・8)、甕 (9)、甕 (10～12)、銅製品の耳環 (13)、ガラス製品の丸玉 (14)、石製品の白玉 (15・16) を図示した。坏は模倣型で蓋形 (1)、半球形 (2)、鉢状 (3・4) が見られた。7の鉢は内厚で粗雑な造りであるが、8の鉢は丁寧なミガキが施されており、赤色に発色する胎土を使用か?。また、9の甕は鉢もしくは甕の底に細い棒状の工具で穿孔され、内外面が赤彩されていた。甕10の胴部形と11・12の長胴形とが見られる。15・16の白玉は建瓦泥岩製。

第58号竪穴住居跡 (第57・138・211図、図版9・25)

遺構 21P・21Qグリッドに位置する。南東隅で第57号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北5.4m、東西5.0mのほぼ方形。壁は現存高10～23cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ビットはP1～P5の5基確認し、P1～P4は主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。柱穴は平面円形であるが、貯蔵穴は方形である。炉跡はP1とP2の中間よりやや外側でP2寄りに位置し、径50×60cmの楕円形の地床炉であった。火床面は床面と同レベルで強い被熱を受けて赤化硬化し、南端に棒状の礎が枕石として据えられていた。壁際の床面に小振りの炭化材が多数点在しており、火災住居の可能性が考えられるものの、焼土の遺存が見られず、居住中の火災ではないと推察される。炉内より土師器の高坏3点 (2～4)、貯蔵穴より同小形甕 (6) が出土し、これは貯蔵火床面出土の破片と接合した。床面より同器台 (1)、甕 (7)、甕 (9)、石製品の管玉 (10) などが出土している。覆土は、ローム粒混じりの

褐色土で、炭化物粒を少量含み、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の器台(1)、高坏(2~4)、甑(5)、小形壺(6)、壺(7)、甕(8・9)、石製品(10)、砥石(11)を図示した。1の器台は受部の外縁部に稜をもたし脚部に透かし孔を穿つ。2の高坏はハの字状に開く脚部、3・4の高坏は中実の棒状脚である。6の小形壺は長頸と思われる。7の壺は頸部に粘土紐を懸らし、押捺を施す。10の管玉はネフライト(軟玉)製で2方向穿孔。11の砥石はやや大振り、砂岩製。

第59号竪穴住居跡(第61・138・211図、図版9)

遺構 21Q・21Rグリッドに位置する。南東部で第60号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北3.6m、東西4.8mの長方形。壁は現存高40~65cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1~P6の6基確認し、P1~P4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と右袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。左袖部等は竪穴の廃絶時に失われたものと考えられる。カマド前から竪穴中央部の床面より土師器の甕(6)が出土した。床面の所々に炭化材の小片が点在し、北西には焼土が遺存していた。いずれも少量であり、火災住居とは断定し難い。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1)、甕(皿・2)、鉢(4)、甕(5・6)、須恵器の坏(3)が出土した。2の甕(皿)は径16cmと推定され、器高がやや高い。甕は口縁部が長く外反する5と、短い6とがあり、ともに長胴形である。3の坏は底径が9cmと大振りで、体部の立ち上がり角度から皿状となる可能性もある。

第60号竪穴住居跡(第58・138・211図、図版9・25)

遺構 20R・21Rグリッドに位置する。北西部で第59号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北4.3m、東西4.2mの方形。壁は現存高10~25cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1~P6の6基確認し、P1~P4は主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられ、P6は性格不明。炉跡は、P2とP6の中間付近から南側にかけて確認され、北端部は第59号跡に切られていた。現存南北1.0m、東西50~60cmの楕円形で、火床面が床面と同レベルの地床であった。火床面は赤化し、一部は強い被熱を受けて硬化していた。南端に棒状の礎を据えて枕石としていた。P5内より土師器の埴(1)、床面から同埴(7・9)、大形甕(8)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、埴(1)、埴(2)、高坏(3)、S字状口縁壺(4)、壺(5)、甕(6・7・9)、大形甕(8)を図示した。1の埴は底部が平底で口縁部が直線的に開く。2の埴は口縁が短く直立し、体部外面にハゲ目度目立つ。3の高坏はやや大振りである。4はS字状口縁壺である。5の壺は口縁部の端部を短く折り返す。8の甕は器高が70cm以上になるとされる。

第61号竪穴住居跡(第59・139・211図、図版9・10・25)

遺構 22Qグリッドに位置する。規模・形状は一边3.2mの方形。壁は現存高25~30cm、やや外傾する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。炉跡は、竪穴の中央やや北東寄りに確認され径10cm程の地床であった。火床面は床面とほぼ同レベルで、強い被熱を受けて赤変硬化し、南端に棒状の礎を2個据えて枕石としていた。炉跡より出土の土師器の器台(4)は、床面出土の破片と接合した。その他、床面より同高坏(2・3)、甕(5・6)、S字状口縁付甕(7)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、埴(1)、高坏(2・3)、器台(4)、甕(5)、壺(6)、S字状口縁付甕(7)を図示した。1の埴は口縁がS字状を呈する。2の高坏は脚部がハの字状に開く。3の高坏は脚部上部が中実の棒状、下部はハの字状に開く。4の器台は受部の口縁部が直立し、外面に稜をもたし、脚部に透かし孔を穿つ。7のS字状口縁付甕は脚部外面ハゲ目度目明瞭、台脚部の欠損後も割れ口を察して使用。

第62号竪穴住居跡(第62・139・211図、図版10・25)

遺構 22Rグリッドに位置する。北東隅が掘削に切られていた。規模・形状は南北5.4m、東西5.2mの方形。壁は現存高30~50cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1~P6の6基確認され、P1~P4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。炉跡は、P1とP2の中間よりやや内側でP2寄り位置し、径56cm程の円形で北西側に幅15cm、長さ30cm程が突出していた。火床面が床面と同レベルの地床で、北西側に棒状の礎を据えて枕石としていた。炉跡内から土師器の高坏(3)、壺(6)、甕(7)が出土し、6の壺は床面出土の破片と接合した。床面からは同埴(2)、甕(10)が出土している。床面に炭化材の小片が散在し、炉跡の北東側には焼土が遺存していた。火災住居の可能性が推察されるものの、遺存量が少なく、居住中の火災とは異なると考えられる。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、炭化物粒を少量含み、自然埋没と考えられる。床面下の調査で、P7・P8のピット2基、北東隅に1.0×1.8mの不整形楕円形、深さ20cm程の掘り込みが確認された。

遺物 すべて土師器で、埴(1)、小形壺(2)、高坏(3・4)、壺(5・6)、甕(7~10)を図示した。1の埴は口縁部に比べて体部が著しく狭い。3は大振りな高坏の坏部で、4の高坏は脚部上部が中実の棒状、下部はハの字状に開く。5の壺は折り返し口縁、6は有段口縁の壺である。

第63号竪穴住居跡 (第60・139・210図、図版10)

遺構 19Rグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0m、東西3.3mの方形。壁は現存高10～15cm、やや外傾する。床面はローム粒を含む暗褐色土で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピット、炉跡は確認されなかった。床面からは土師器の甕(2)、壺(4)が出土している。覆土は、少量のローム粒を含む黒色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、甕(1～3)、壺(4)を図示した。1の甕の口縁部内外面、2・3の甕の腹部外面にハケ目痕目立つ。

第64A号竪穴住居跡 (第63・140・211図、図版10・25)

遺構 21R・21Sグリッドに位置する。北東隅が第64B号竪穴住居跡、南東部は第66号竪穴住居跡と重複し、これらに切られていた。前記の状況から、規模・形状は明確にし難いが、南北現存5.3m、東西4.3mの南辺が丸味を帯びた不整形方形と推定される。壁は現存高20～40cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の粘土で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピット、炉跡は確認されなかった。床面には炭化材の破片が点在し、火災住居の可能性が考えられるものの、焼土の遺存がなく、炭化材の量が少ないことから居住中の火災とは断定出来ない。床面より土師器の埴(2・3)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、炭化物粒を少量含み、自然埋没と考えられる。

遺物 鉄製品の鏃(11)を除くすべて土師器で、埴(1)、埴(2・3)、鉢(4)、高杯(5)、小形甕(6)、S字状口縁甕(7)、甕(8)、壺(9・10)を図示した。1は平底の埴、2の埴は口縁部が長く、3の埴は短い。4の鉢は底部外面の中央が上げ底状に凹む。5の高杯は脚部のみで器台の可能性も否めない。器部がハの字状に広がり、透かし孔を穿つ。7のS字状口縁甕は脚部外面ハケ目痕が明瞭。9は折り返し口縁壺。11は尖頭式の鏃で線紋が長い。

第64B号竪穴住居跡 (第64・140・211図、図版10)

遺構 21S・22Sグリッドに位置する。南東部は第64A号竪穴住居跡、北西隅が第67号竪穴住居跡と重複し、これらに切っていた。規模・形状は、南北2.8～3.4m、東西2.8～3.2mの不整形方形。壁は現存高15～25cm、やや外傾する。床面はローム主体の粘土で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは、東辺の南寄り壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。火床面と袖部の残存範囲に開きがあり、竪穴の廃絶時に袖部が失われたと推察される。また、北半部の床面には多数の炭化材が遺存し、火災住居の可能性が推定されるものの、焼土が遺存せず、遺物も少ない事から居住中の火災ではなく、残材処理ものと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、炭化物粒を少量含み、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、甕(皿・1)、甕(2・3)を図示したがいずれも小片である。1の甕(皿)は外面に僅かに稜を残し、やや丸底風である。2の甕は武蔵型である。

第65号竪穴住居跡 (第65・140・211図、図版10・25)

遺構 22R・22Sグリッドに位置する。規模・形状は、南北3.1～3.2m、東西4.5mの長方形。壁は現存高45～60cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは、北辺の東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と右袖部の下部が確認されたが、左袖部は確認されなかった。竪穴の廃絶時に壁が失われたと推察される。火床面は赤化していた。カマド内より土師器の甕(2)が出土し、床面から須恵器の杯(1)、土師器の甕(3・4)が出土している。また、床面の西半部を中心に、炭化材が散在し、北東隅では焼土が認められ、火災住居の可能性がある。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、炭化物粒を少量含み、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の杯(1)、土師器の甕(2～5)、鉄製品の鏃(6)を図示した。1の杯は完形で、底部へラ削り。2・3・5の甕は武蔵型である。6の鏃は先端部の1/3の一部を欠損している。

第66号竪穴住居跡 (第67・140・211図、図版10)

遺構 21R・21Sグリッドに位置する。北西部が第64A号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北4.3～4.6m、東西5.0～5.4mの長方形。壁は現存高55～70cm、ほぼ直立する。壁下には壁溝が設けられており、カマド部分とその東端を除き確認された。幅15～25cm、深さ5～10cm程度であった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P5の5基確認し、P1～P4が主柱穴、P5は出入口施設と考えられる。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、一部は強い熱を受けて硬化していた。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の杯(1～3)、小形甕(4)、甕(6～8)を図示した。1～3の杯は半球形、口縁がやや大振りである。6・7の甕は武蔵型である。8の甕は底部外面に木葉文が認められる。5の甕は脚部外面に格子文印目、内面は無文当具風。

第67号竪穴住居跡 (第68・140・211図、図版10・25)

遺構 21S・22Sグリッドに位置する。南西隅が第64B号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北3.3～3.6m、東西4.6mの長方形。壁は現存高40～65cm、やや外傾する。床面はローム主体の粘土で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。

カマドは北辺の東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面は確認されたが、袖部は遺存しなかった。火床面は赤化し、中央は強い被熱を受けて硬化していた。袖部などは壁穴の廃絶時に失われたと思われる。床面の西壁際より、石製の砥石(5)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査で、北東隅に径80×100cm、深さ20cm程の掘り込みを確認した。遺物 土師器の坏(1・2)、鉢(3)、須恵器の甕(4)、石製の砥石(5)を図示した。1の坏は外面に僅かに稜を残し、2の坏は半球形。4の甕は胴部外面に平行文目、内面は無文具貝肌。5の砥石は完存し、藁灰岩製。

第68号壁穴住居跡(第66・141・211図、図版10・25)

遺構 23Q・23R・24Rグリッドに位置する。北西側が調査区外の為、本来の規模・形状は明確にしないが、遺存部分から南北5.6m、東西5.25mのほぼ方形と推定される。壁は現存高25～30cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、東壁と北壁際は中央より10cm程低く、締まりも中央部に比べてやや弱かった。ピットはP1～P13の13基確認された。P1～P3は最終時の主柱穴、P4が貯蔵穴と考えられ、P5も遺物の出土状況からその可能性が高い。また、壁際のP9・P11は出入口施設と考えられる。これらはいずれも平方形であった。P6・P7が旧い柱穴、P10・P12がこれに伴う出入口施設と推定されるが、西側が明確でなく断定し難い。伊勢は遺存部分では確認されず、重複により失われたものと推察される。貯蔵穴と考えられるP4・P5の外内より土師器の埴(1)、小形壺(2)、高坏(3)、台付甕(4)、壺(5・6)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、埴(1)、小形壺(2)、高坏(3)、台付甕(4)、壺(5・6)を図示した。1の埴は口縁部が短い。2の小形壺は口縁部が長く直線的に延びる。3の高坏は内への字状に広がる脚部に透かし孔を穿つ。6の壺は胴部に穀目状の痕跡が認められた。甕内にある時に被熱によって甕が焼失した際の痕跡と考えられるが、本跡には火災の痕跡は認められず疑問を残す。

第69号壁穴住居跡(第69・141・211図、図版10)

遺構 23Rグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0m、東西3.8～4.3mの不整形方形。壁は現存高20～25cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、ほぼ平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。カマド内より被熱を受けた甕が出土しており、支脚の可能性が高い。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて覆土中の土師器で、本跡の帰属時期と合致しない。埴(1)、小形壺(2・3)、高坏(4)、台付甕(5)、壺(6)を図示した。1の埴は長く直線的に立ち上がる口縁部、2・3の小形壺は口縁部と胴部外面にミガキを施す。4の高坏は内への字状に開く脚部に透かし孔を穿つ。5は台付甕の台脚部で内外面にハケ目痕跡を残す。

第70号壁穴住居跡(第70・141・211図、図版10・25)

遺構 23Sグリッドに位置する。規模・形状は南北3.8～3.9m、東西4.4mの長方形。壁は現存高25～45cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北東隅に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面は確認されたが、袖部は確認出来なかった。壁穴の廃絶時に失われたものと推察される。火床面は広範囲に赤化していた。また、カマドの南側より土師器の坏(2)、西脇より同壺(皿・4)が出土した。覆土は、ローム粒を少量含む黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 すべて土師器で、坏(1・3)、壺(皿・4)を図示した。1・3の坏は外面に僅かに稜を残す。4の壺(皿)は口縁部が直立し、外面に僅かに稜を残す。

第71号壁穴住居跡(第71・141・211図、図版10)

遺構 24Sグリッドに位置する。壁穴の中央やや南西に第12号土坑が重複し、これに切られていた(第4節参照)。規模・形状は南北4.4m、東西4.6～5.5mの不整形方形。壁は現存高8～12cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P14の14基確認され、P1～P4は主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。また、P8・P12・P14に掘り直し(A・B)が認められ、P7がこれと対応する柱穴であった可能性が高い。床面などに建て替え痕などの痕跡は確認されなかったが、これらのピットからその存在が推察される。伊勢は確認されなかった。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、埴もしくは埴(1)、小形壺(2)、器台(3)を図示した。1の埴は小片の為、埴となる可能性も否めない。3の器台は、脚部に透かし孔を穿つ。

第72号壁穴住居跡(第73・141・142・211図、図版10・11・25)

遺構 25T・26Tグリッドに位置する。規模・形状は辺25.6mの隅丸方形。壁は現存高80～85cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P4の4基確認し、いずれも主柱穴と考えられる。カマドは北辺の中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。両袖部の先端には長さ22cmと25cmの竈がそれぞれ据えられており、両者の間隔は35cm程であった。また、右袖部の先端から土師器の甕(7)片が出土している。さらに床面

からは、同坪（1～5）、高坪（6）、甕（7・8）が出土した。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査において、東・南・西辺の壁下に壁溝の痕跡が確認された。幅15～20cm、深さ5～6cmであった。またP5～P9のビッドが新たに確認され、堅穴の四隅に深さ20cm程の掘り込みが設けられていた。なお、新たに確認されたビッドの中で、P5・P6は、それぞれP3・P4と隣接しており、建て替えに伴う古い柱穴と判断され、P7は出入口施設と考えられる。

遺物 土師器の坪（1～5）、高坪（6）、甕（7～9）、須恵器の甕（10）、鉄製品のつり針（11）、不明（刃器・12）、石製品の砥石（13）を図示した。1～4の坪は半球形で、5の坪は口縁部外面に僅かに稜を残す。6の高坪も坪部の口縁部外面に僅かな稜を認める。7～9の甕は長胴形で、7は口縁部が大きく外反する。10の甕は胴部外面にクシ目状の沈線が施し、内面は無文の当具痕。11はつり針状で、上部は糸を結ぶ為に環状に造られ、曲線に折り曲げられ先端に環状に作り付けられていない。12は穂状のようには見られるが、両端に穿孔が認められず、不明とした。13の砥石は小振りで凝灰岩製である。

第73号竪穴住居跡（第72・142・211図、図版11・25）

遺構 24T・25Tグリッドに位置する。南西隅が第4号独立柱建物跡（ホ1）と重複し、これに切られていた（第2節参照）。規模・形状は南北3.4～3.8m、東西3.4mの不等方形で、東辺南寄りに若干の張り出しが認められるが性格不明。壁は現存高20～24cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ビッド、伊勢は確認されなかった。東壁際の床面から土師器の鉢（1）、北東部の床面からは同甕（3）、甕（4）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、鉢（1）、手づくね土器（2）、甕（3）、甕（4）を図示した。1の鉢は内外面丁寧なミガキを施し、底部外面上げ底状。3の甕は内面に製作時の粘土総接合痕が目立つ。4の甕は内外面にハケ目痕明瞭。底部外面木葉痕。

第74号竪穴住居跡（第74・142・211図、図版11・25）

遺構 24Tグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0m、東西3.4mの隅丸方形。壁は現存高55～60cm、やや外傾する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ビッドは確認されなかった。カマドは東辺のほぼ中央に壁を僅かに切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。北東隅の床面に辺長50cmの範囲で厚さ15cm程、カマド構築材と同質の白色粘土が認められた。被熱を受けた底面が炭化物が混入しており、使用された木材と考えられる。床面のほぼ中央より土師器の坪（1）が出土している。覆土は、ローム粒・塊を多量に混じる暗褐色土で、人為的埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、坪（1・3・4）、鉢（2）を図示した。1の坪は肉厚で、仕上げが粗雑である。3の坪は塊状で内外面ミガキを施す。4の坪は外面に僅かな稜を残す。2の鉢は口縁部が外反し、丸底状。

第75号竪穴住居跡（第75・142・211図、図版11・25）

遺構 24Uグリッドに位置する。規模・形状は南北3.3mの隅丸方形。壁は現存高50～65cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ビッドはP1が確認され、位置的に出入口の施設と考えられる。カマドは北辺の中央に壁を僅かに切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、中央部は強い被熱によって硬化していた。東壁際の床面より土師器の坪（1）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査で、北東部に40×90cmの長方形で、深さ20cm程の掘り込みが確認されたが性格は不明。

遺物 土師器の坪（1～3）、須恵器の甕（4）を図示した。1・2の坪は半球形、3の坪は外面に稜が残る。4の甕は胴部（肩部）の外面にクシ目状の沈線が施す。

第76号竪穴住居跡（第76・142・211図）

遺構 26U・26Vグリッドに位置する。規模・形状は南北2.5m、東西3.1mの長方形。壁は現存高20～30cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ビッドは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに、壁をほとんど切り込まず、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、中央部は強い被熱を受けて硬化していた。床面の南寄りで、須恵器の甕もしくは横瓶（2）の破片が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坪（1）、甕（3）、須恵器の甕もしくは横瓶（2）の破片を図示した。1の坪は半球形、3の甕は武蔵型である。2は外面が平文叩き目、内面は無文の当具痕。

第77号竪穴住居跡（第77・142・143・211図、図版11・25）

遺構 25U・25Vグリッドに位置する。規模・形状は南北3.8m、東西5.6～6.0mの長方形。壁は現存高30～55cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ビッドはP1～P3の3基確認され、P1・P2は2本柱の主柱穴、P3は出入口施設と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、右袖部の先端には自然石、左袖部には凝灰岩の切石が芯材として使用されており、両者の間隔は70cm程である。

る。火床面の中央に長さ24cmの自然石が支脚として立てられ、上端に須恵器の坏（4）が置かれていた。さらに、焚口部分には土師器の甕（5・6）が口を右にして連なっていた。底部の構築材として使用していたと考えられ、3個体があったと思われる。この他、北壁際の床より土師器の坏（2）、南壁際の須恵器の坏（3）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏（1・2）、甕（5・6）、須恵器の坏（3・4）を図示した。1・2の坏は内面黒色処理が施され、1は底部系切り外周へラ削り、2は不明。5・6の甕は長胴形で、カマドの構築材に転用されていた。6は最大径が胴部の上部にある。3・4の坏は底部系切り、4は口縁及び外面に煤の付着が認められ、灯明皿に転用されたと考えられる。

第78号竪穴住居跡（第80・143・211図、図版11）

遺構 25V・26Vグリッドに位置する。規模・形状は南北4.1m、東西4.4mの隅丸方形。壁は現存高60～70cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層の貼床で、平坦で固く締まっていた。ビットはP1～P5の5基確認され、P1～P4が主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。なお、本跡のカマドは袖部のみならず、奥壁（煙道）まで白色粘土を使用していた。床面の東壁際及び南壁際に施土の遺存が確認されたが、炭化材などは極少量であった。また、P1の南東脇の床面より土師器の甕（8）の破片が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査で、P6～P8の3基のビットが確認され、P6はP1、P7はP3、P8はP4に接して掘り込まれていた。P2のみ単独であり、これは位置を変えず、他も若干の移動程度で建て替えが行われたと考えられる。

遺物 須恵器の蓋（1）、高台付坏（2）、土師器の坏（3・4）、高坏（転用支脚・5）、甕（6～8）を図示した。1の蓋はツマミを欠損する。3・4の坏は内面黒色処理を施し、4は底部系切り。5の高坏転用支脚は、先行する時代のものを転用したと考えられる。6・8の甕は武蔵型である。

第79号竪穴住居跡（第78・143・211図、第2表、図版11・26）

遺構 22Sグリッドに位置する。規模・形状は南北3.5～3.6m、東西3.7～3.8mの方形。壁は現存高24～30cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ビットはP1～P4、P6の5基確認された。P1～P4が主柱穴、P6は貯蔵穴と考えられる。煙道はP1とP2の中間よりP1側に寄って設けられている。径30cm程の地床炉で、床面と同レベルの火床面は強い被熱を受け赤変硬化していた。また、東端に棒状の礎（第2表・St 1）を2本並べて枕石としていた。床面に炭化材が散在し、極少量の焼土が認められた。火災住居と考えられるが、焼土の量が少ないことから、居住中の火災ではないと推察される。P6内から土師器の甕（2・3）、P1の上面と脇から同器台（1）と甕（4）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査で、P2の南側にP5、P3Aの東脇にP3Bが確認され、同規模の建て替えもしくは部分的な改修の可能性が考えられる。

遺物 いずれも土師器で、器台（1）、甕（2～4）を図示した。1の器台は受部外面に稜をもち、脚部の上部が棒状で中心に小孔を穿ち、下部がへらの字状に開き透かし孔を穿つ。2～4の甕は脚部外面にハゲ目痕跡。編物縫石と思われる棒状の礎が出土している（第2表・St 1）。

第80号竪穴住居跡（第79・143・144・211図、図版11・26）

遺構 26V・26Wグリッドに位置する。規模・形状は南北2.6～3.0m、東西3.6～3.8mの不整長方形。壁は現存高55～65cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ビットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面及び袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、火床面の中央よりやや西寄りに礎が支脚として据えられており、その上端に須恵器の坏（2）が乗せられていた。本跡のカマドは袖部のみならず、側壁部分まで粘土が使用されていた。また、左袖部には高さ25cm程の凝灰岩の切石が袖柱として立てられていた。右袖部側は遺存しなかったが、火床面や袖部の状況から50cm程の間隔で立てられていた可能性が高い。床面に炭化材が散在し、所々に施土の遺存が確認され、火災住居の可能性があるが、焼土の遺存が極少量であり、居住中の火災とは断定し難い。北東隅の床面から土師器の甕（4）が出土している。覆土は、ローム粒・塊混じりの褐色土で、少量の炭化物・焼土粒を含み、人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏（1）、甕（4）、須恵器の坏（2）、高台付坏（3）、石製品の砥石（5）を図示した。1の坏は内面黒色処理を施す。4の甕は常盤型で、底部外面に木炭痕。2の坏は底部系切り。3の高台付坏は体部外面に稜をもつ。5の砥石は砂岩製で、第105号竪穴住居跡出土の破片と接合した。

第81号竪穴住居跡（第81・144・211図、図版11）

遺構 23S・23T・24S・24Tグリッドに位置する。南東隅で第82号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北3.4m、東西4.5mの長方形。壁は現存高70～80cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ビットはP1・P2の2基確認され、P2は貯蔵穴の可能性をもち、P1は性格不明。カマドは北辺の中央東寄りに、壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化し、中央部は強い被熱を受けて硬化していた。右袖部に比べ左袖部の遺存部分は僅かであり、竪穴の廃絶時に失われたものと考えられる。南東の床面から土師器の甕（2）が出土している。覆土は、上位がローム粒

混じりの黒褐色土で、自然埋没。下位はローム粒を多量に含む暗褐色土で人為的埋没と考えられる。床面下の調査で、カマドの左袖部付近でP3を確認したが、性格は不明。

遺物 すべての土師器で、甕(1~3)を図示した。1・2の甕は長胴形で、3の甕は底部の形状から焼成時期が異なる可能性をもつ。

第82号竪穴住居跡(第82・144・211図、図版11)

遺構 23Tグリッドに位置する。北西隅が第81号竪穴住居跡、南西隅は第83号竪穴住居跡と重複し、これらに切られていた。規模・形状は南北3.3m、東西3.5mの方形。壁は現存高45~65cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1の1基確認し、位置的に貯蔵穴と考えられる。カマドは竪穴の中央やや北西寄りに位置し、径30cm程の地床炉である。火床面は床面と同レベルで、強い加熱を受けて赤変硬化していた。また、南端に棒状の礎が2点認められ、枕石としていた。P1の周辺より土師器の小形甕(1)、器台(2)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、小形甕(1)、器台(2)、甕(3・5)、壺(4)を図示した。1の小形甕は直線的に開く口縁部。2の器台は受部の外面に稜をもち、脚部の上部が棒状で中心に小孔を穿つ。

第83号竪穴住居跡(第84・145・211図、図版11・12・26)

遺構 22T・23Tグリッドに位置する。北西部で第82号竪穴住居跡と重複し、これを切る。規模・形状は南北5.0~6.3m、東西5.9mの方形。壁は現存高30~80cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝が設けられており、幅15~20cm、深さ5~10cmで、カマド部分を除きほぼ圍繞する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1~P8の8基確認し、P1~P4が主柱穴、P5・P6は出入口施設、P7・P8は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が遺存し、火床面は広範囲に赤化していた。カマドの内外より土師器の甕(8)、甕(13)、須恵器の鉢(11)などが出土している。また、床面から土師器の坏(1・3・4)、鉢(5)、小形甕(7)、甕(8・10)、甕(13・14)、壺(15)、須恵器の鉢(11)、提瓶(12)などが出土している。なお、床面に少量の炭化材が散在し、所々に焼土の遺存が認められた。火災住居と考えられるが、焼土の量が少なく、居住中の火災とは断定し難いものの、遺物の出土状況からはその可能性が高いと思われる。覆土は、ローム粒・塊が多く混入し、炭化物・焼土粒を少量含む、人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1~4)、鉢(5・6)、小形甕(7)、甕(8~10)、甕(13・14)、壺(15)、須恵器の鉢(11)、提瓶(12)、鉄製品の手鎌(穂簾具・16)、鎌(17)を図示した。1・2の坏は半球形、3の坏は外面に稜を残す。4の坏は口縁が内湾し塊状。8の甕は口縁部が外反し、9の甕は脚部と口縁部が直線的に外傾する。13の甕は胴部、14の甕は胴部、15の甕は胴部、底部外面に木葉痕。11の鉢は底部を欠損するが握持と思われる。12の提瓶は外面に自然釉が広く見られる。16の手鎌(穂簾具)は長さ7.5cmで、両端に固定用の小孔が穿たれており、一部に有機質の付着が認められる。17の鎌は長さ13.5cmで完存する。

第84号竪穴住居跡(第83・144・211図、図版12・26)

遺構 26N・26O・27N・27Oグリッドに位置する。第106号竪穴住居跡が竪穴内のほぼ中央に重複し、これに切られていた。規模・形状は南北2.6~6.5m、東西5.2~5.4mの長方形。壁は現存高15~20cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1~P6の6基確認し、P1~P4が主柱穴、P5は貯蔵穴と考えられる。伊勢は確認されなかった。床面には炭化材や焼土が認められたがその量は少ない。火災住居の可能性が考えられるものの、全体的に炭化材、焼土などの遺存が少ないことから居住中の火災ではないと思われる。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 8の鉄製品を除けばすべて土師器で、埴(1)、小形甕(2)、器台(3)、甕(4・6)、付台甕(5)、壺(7)、鉄製品の磁(8)を図示した。2の小形甕は口縁部を欠損するが胴部は遺存する。3の器台は脚部の上部が棒状で中心に小孔を穿ち、下部はハの字状に広がる。7の壺は折り返し口縁である。8の鉄鉤は尖頭式で茎と胴縁部分を欠損する。

第85号竪穴住居跡(第85・144・211図、図版12・26)

遺構 27O・27P・28O・28Pグリッドに位置する。規模・形状は一辺7.4mの方形。壁は現存高70~80cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認され、幅12~20cm、深さ5~16cmで、カマド部分を除き圍繞する。床面はローム主体の粘床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1~P7・P11・P12・P14の計10基確認された。P1~P4が最終時の主柱穴、P5が出入口施設、P6は貯蔵穴と考えられる。P2とP6の間に確認されたP12は深さ60cmで、柱穴に比べ著しく深く、P6の貯蔵穴に匹敵する深さである。P1に接するP7は旧い柱穴、P5の北側に確認されたP11は旧い出入口施設の可能性もある。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と左袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、右袖部が遺存せず、火床面の範囲に比べて両袖部の遺存範囲が狭いことから、竪穴の廃絶時に失われたものと推察される。南壁際の床面より土師器の坏(1・2)、P3とP11の間付近から同鉢(4)、北東隅の床面から同鉢(3)、小形甕(5)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査において、P8~P10・P13・P15~P34の計42基のピットとD1~D6の間仕切溝と考えられる溝跡6条が確認された。P7~P10が旧い主柱穴、P11が旧い柱穴、P12が旧い出入口施設、P2とP6の間にあるP12が旧い貯蔵穴であったものと考えられる。また、D2・D4~D6は最終時の壁より内側に1.4~1.8mの長さである

のに対し、D1・D3は2.4mの位置まで延びており、旧い段階の間仕切溝の可能性が高い。床面下で確認された多数のピットは、新・旧の間仕切溝などに関連する補助柱と考えられる。

遺物 土師器の坏（1・2）、鉢（3・4）、小形瓶（5）、甕（6）、甕（8）、須恵器の甕（7）を図示した。1・2の坏は半球形、6の甕は口径26cmと大振りである。8の甕は長胴形。7の甕は胴部外面に格子文叩き目、内面に円心円文当具痕。

第86号竪穴住居跡（第86・146・211図、図版12・26）

遺構 26Q・26P・27Q・27Pグリッドに位置する。南側が調査区外に所在し、本来の規模・形状は明確にしないが、遺存部分から南北現存5.4m、東西8.0～8.5mで、一边8.0～8.5mの方形と推定される。壁は現存高30～40cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P4の4基確認し、P1・P2は主柱穴、P3が貯蔵穴と考えられ、P4も位置的に貯蔵穴的なものと思われる。また、P1・P2とも重複（A・B）が認められ、同位置での建て替えと考えられる。炉跡は、P1とP2の中間よりやや内側で、P2寄りに確認された。径30cm程の地床炉で、火床面は床面より5cm程高い位置にあり、強い被熱を受けて赤変硬化していた。床面上5～25cmの位置に炭化材が散在し、火災住居の可能性もあるものの、焼土の遺存は確認されなかった。居住中の火災ではないと思われるが、遺物の出土状況や7の土師器蓋の存在から全くは否めない。床面の北壁より土師器の小形壺（3）、P3の脇より同壺（5）、南東部で同壺（7）が出土している。覆土は、ローム粒・塊混じりの暗褐色土で、炭化物粒を少量含み、人為的埋設と考えられる。

遺物 すべて土師器で、壺（1・2）、小形壺（3）、高坏（4）、甕（5・6）、壺（7～9）を図示した。1・2の壺は浅い体部から口縁部が強く外反する。4の高坏は胴部の上部が中央の棒状で、下部はハの字状に開く。7の壺は胴部外面に籠目状の痕跡を残す。籠内に入っていた時に被熱を受けたものと推察される。8の壺は折し直し口縁。

第87号竪穴住居跡（第87・146・211図、図版12）

遺構 27P・27Qグリッドに位置する。規模・形状は南北4.6m、東西5.2mの長方形。壁は現存高平均80cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝が確認され、幅6～25cm、深さ5～10cmで、カマド部分を除き圍繞する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、中央部は強い被熱を受けて硬化していた。火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、竪穴の廃絶時に失われたものと考えられる。床面の南西隅から土師器の坏（3）、北側で同坏（4）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋設と考えられる。

遺物 土師器の坏（1～4）、甕（6）、須恵器の甕（5）を図示した。1の坏は壺に近い器形で、2・3の坏は外面に僅かに稜を残す。5の甕は長頸瓶の可能性が高い。

第88号竪穴住居跡（第88・146・211図、図版12）

遺構 26Q・27Qグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0～3.2m、東西3.1～3.2mのほぼ方形。壁は現存高55～60cm、概ね直立する。壁下に壁溝が設けられ、幅15～25cm、深さ3～10cmで、カマド部分を除き圍繞する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P4の4基確認され、いずれも主柱穴と考えられる。カマドは北辺の中央やや西寄り壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化し、中央部は強い被熱を受けて硬化していた。火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、竪穴の廃絶時に除去された可能性が高い。床面の西側から、土師器の甕（3・4）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋設と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、鉢（1・2）、甕（3・4）を図示した。1の鉢は胴が張る形状。2の鉢は口縁部が広がる形状である。3・4の甕も胴部が張る形状で、3はやや小振りなものである。

第89号竪穴住居跡（第89・147・211図、図版12）

遺構 27Q・27Rグリッドに位置する。規模・形状は南北3.4～3.5m、東西3.4～3.6mのほぼ方形。壁は現存高60～65cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認され、P1は出入口施設、P2は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、袖部のみならず、側壁部まで白色粘土が使用されていた。火床面の範囲と袖部の遺存範囲が合致せず、竪穴の廃絶時に失われてしまったと思われる。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋設と考えられる。

遺物 土師器の坏（1・2）、須恵器の坏（3）を図示した。1・2の坏は内面黒色処理を施し、2の底部は糸切りで、底径が10cmとやや大振りである。3の坏は口縁部が外反みに立ち上がる。

第90号竪穴住居跡（第90・147・211図、図版12・26）

遺構 26R・27Rグリッドに位置する。規模・形状は南北5.8m、東西5.5mの方形。壁は現存高40～45cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P6の6基確認され、P1～P4が主柱穴、P6は貯蔵穴、

P5はP1の補助的なものと考えられる。炉跡はP1とP3の間よりややP3寄りに確認され、径約60cmで、火床面は中央に向かって若干凹む地床炉であった。火床面は強い被熱を受けて赤変硬化し、南西寄りに棒状の礫を据えて枕石としていた。P4の南側より土師器の埴(2)、P6の脇より同版(3)、P6の北側より同台付甕(4)が床面もしくは床面付近から出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査において、北半部の壁下に壁溝の痕跡を確認した。幅15～20cm、深さ5～10cm程で、本来は囲繞していたと推察される。また、南西隅にP7、P6の北にP8の計2基のビットが確認された。P7は旧い貯蔵穴、炉跡に對面する東壁隅のP8は出入口施設の可能性が考えられる。

遺物 石製品の砥石(6)以外はすべて土師器で、埴(1)、埴(2)、版(3)、台付甕(4)、甕(5)を図示した。1の埴は口縁部が直線的に広がる。2の埴は球形に近い腰部に短い口縁部が付く。3の版は底部が突出し、小振りなものである。5の甕は外面と口縁部内面のハケ目痕跡。6の砥石はやや大振りで硬灰岩製。

第91号竪穴住居跡 (第91・147・211図、図版12)

遺構 28Q・28R・29Q・29Rグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0～3.3m、東西4.2mの長方形。壁は現存高60～70cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ビットは確認されなかった。カマドは北辺の中央偏か西寄りに壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。カマドの西脇より土師器の埴(2)が出土している。また、床面近くの覆土中に礫が点在していた。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、埴(1・2)、埴(3)を図示した。1の埴は外面に稜をもち、口縁部が外傾する。2の埴は外面の稜が不明瞭となり、底部は平底風。3の埴は口縁部が長く直立する。

第92号竪穴住居跡 (第92・147・211図、図版13)

遺構 28R・28Sグリッドに位置する。規模・形状は南北6.3～6.4m、東西6.3～6.5mの方形。壁は現存高55～60cm、やや外傾する。壁下に壁溝が設けられ、幅12～22cm、深さ5～10cmで、北東以外の隅は不明瞭となるが、カマド部分を除き明瞭する。床面はローム主体の粘床で、平坦で固く締まっていた。ビットはP1～P7の7基確認し、P1～P4が最終時の主柱穴、P5が貯蔵穴と考えられる。また、P1の西に接するP6、P3の北西に接するP7は旧い主柱穴と考えられ、建て替えの存在が推定される。P6の北側にもビットの痕跡らしきものが見られた。しかし、東側のP2・P4の周辺では同様の状況が確認されず、部分的な補修の可能性も全くは否めない。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化し、中央部は強い被熱を受けて硬化していた。また、火床面の範囲に比べて両袖部の範囲が狭く、竪穴の廃絶時に失われたものと考えられる。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の埴(1～3)、鉢(5)、須恵器の高台付杯(4)を図示した。1・3の埴は横型で1は円形、3は三角形である。2の埴は半球形。5の鉢は底部が丸く、小振りな鉢。4の高台付杯は高台が低く、底部外面は高台より突出しない形と思われる。

第94号竪穴住居跡 (第93・147・211図、図版13・26)

遺構 27S・27T・28S・28Tグリッドに位置する。規模・形状は北西・南東3.9m、北東・南西4.5～4.6mの長方形。壁は現存高平均6cm、やや外傾する。床面は暗褐色土中にあり、平坦であるが埴まりはやや弱い。壁溝、ビット、炉跡は確認されなかった。覆土は、ローム粒を少量含む褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、器台(1)、小形甕(2)、版(3)を図示した。1の器台は高さ5cmと小振り、外面と受部内面を赤彩し、脚部に透かし孔を穿つ。2の小形甕は胴部外面に削りを施し、内面は粗いヘラナデ。3の版は折り返し口縁、内外面にハケ目痕。

第95号竪穴住居跡 (第94・148・211図、図版13・26)

遺構 26T・27Tグリッドに位置する。北東部で第2号円形周溝遺構と重複し、これを切っていた(第7節)。規模・形状は南北4.0～4.2m、東西4.1～4.4mのほぼ方形。壁は現存高45～50cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ビットは北東隅にP1を確認し、位置的に貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。左袖部は著しく遺存状態が不良で、付近より土師器の埴(7)の破片が出土している。竪穴の廃絶時に失われたものと思われる。また、南西隅には2×1.0m程の範囲に20cm程の厚さでカマド用材と思われる白色粘土が遺存していた。夾雑物が含まれており使用済みの用材と判断される。その他、床面から土師器の埴(2)、甕(6)、土製品の支脚(3)などが出土している。また、本跡では埋没途中の比較的に早い段階に、土師器版がまともな状態で投棄されており、その一部を上層遺物として掲載した。覆土は、下層が少量のローム粒を含む暗褐色土、上層はローム粒・塊を含む褐色土で、自然埋没の後人為的埋没と考えられる。

遺物 下層は土師器の埴(1・2)、版(4)、甕(5～8)、土製品の支脚(3)、鉄製品の刀子(9)を図示した。1の埴は横型の蓋形。2の埴は半球形。4の版は内面に丁寧なミガキ。5～7は胴張り形の甕で、7は下部が狭分する。8の甕は底部に向かって胴部がすぼまり、口縁部先端が僅かに立ち上っており、常総型の特徴を僅かに示す。3の支脚は粘土に巻き上げ、外面は蓋形するが内面は巻き上げ痕が明瞭。9

の刀子は刃部の使い減りが進行し、茎の方が幅広く残る。

上層の遺物はすべて土師器で、埴（1）、坏（2）、小形甕（3・4）、甕（5）を図示した。1の埴は平底で底部外面に木葉痕。2の坏は浅く口径の大きい半球形。3の小形甕に比べ4の小形甕は肉厚で、内面の整形は粗い。5の甕は最大径を肩部にもち、胴部下部に棒状工具によるミガキを施し、常規型の一端を見せる。

第96号竪穴住居跡（第95・149・211図、図版13・27）

遺構 33S・33T・34S・34Tグリッドに位置する。規模・形状は南北2.3～2.4m、東西3.0mの長方形。壁は現存高60～65cm、やや外傾する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。遺存状態が不良で、火床面は遺存し赤化していたが、袖部は確認されなかった。竈穴の廃絶時に失われたものと推察される。南壁際の床面より土師器の坏（1）、鉢（2）、カマドの南脇から同甕（3）、東脇から同甕（4）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、坏（1）、鉢（2）、甕（3）、甕（4）を図示した。1の坏は模紋型の坏形で、体部が半球形で深く、口縁部は直立する。3の甕は内面に丁寧なミガキ、胴部にやや膨らみを残す。2は丸底の鉢。4の甕は底部外面に木葉痕。

第97号竪穴住居跡（第97・149・211図、図版13・27）

遺構 34Tグリッドに位置する。規模・形状は南北3.5～3.7m、東西4.5mの長方形。壁は現存高55～70cm、西辺は直立し、他はやや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1が確認され、位置・形状から貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、竈穴の廃絶時に失われたものと考えられる。カマド内より土師器の坏（3）、甕（4）、南側より同坏（1）、竈穴の中央やや南西寄りの床から同坏（2）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、坏（1～3）、甕（4）を図示した。1・2は模紋型で、1は蓋形、2は坏形である。3の坏は浅い半球形。4の甕は長胴形で胴部の中程が僅かに膨らむ。

第98号竪穴住居跡（第98・148・211図、図版13）

遺構 28V・29Vグリッドに位置する。規模・形状は南北3.7～3.9m、東西5.0～5.3mの長方形。壁は現存高15～50cm、ほぼ直立する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認され、P2は位置・形状などから貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。火床面の範囲に比べて右袖部の遺存範囲が著しく狭く、竈穴の廃絶時に失われたものと推察される。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、坏（1・2）、甕（3）を図示した。1の坏は半球形、2の坏は外面に僅かに稜を残す。3の甕は長胴形で、底部外面はヘラ削り。

第99号竪穴住居跡（第100・149・211図、図版13・27）

遺構 29Vグリッドに位置する。規模・形状は南北4.1～4.4m、東西4.1～4.3mの方形。壁は現存高45～60cm、やや外傾する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは新・旧2基確認され、北辺の中央が新カマド、東寄りが旧カマドである。新カマドは壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。火床面の範囲に比べて右袖部の遺存範囲が狭く、竈穴の廃絶時に失われたものと推察される。また、旧カマドも壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていたが、移設の際に構築材で埋められ、竈穴内部分は切り取られていた。新カマドの左袖部より土製品の支脚（3）、竈穴の中央南東寄りの床面から土師器の坏（1）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。また、西壁の南寄りに、壁に接して幅5～20cm、長さ1mの範囲に6cm程の厚さの焼土が床面上15cm程の位置に確認されたが、他には認められず疑問を残す。

遺物 土師器の坏（1）、高坏（2）、土製品の支脚（3）を図示した。1の坏は丸底で、内面の整形がやや粗く、鉢製の可能性もある。2の高坏は脚部への字状に広がり、器高が高い。3の支脚は粘土紐の巻き上げによるもので、外面は粗い整形が行われているものの、内面は粘土紐の巻き上げ痕が明瞭である。

第100号竪穴住居跡（第96・149・211図、図版13・14・27）

遺構 27V・27W・28V・28Wグリッドに位置する。規模・形状は南北3.6～3.8m、東西4.3～4.5mの長方形。壁は現存高35～60cm、やや外傾する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央偏東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。床面及び床面近から、須恵器の坏（1）、甕（6）、土師器の坏（2・3）、甕（5）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏（1）、甕（6・7）、土師器の坏（2・3）、甕（4・5）を図示した。6・7の甕は胴部外面に平行文印き目、内面に無文当具痕。2の坏は半球形で、内面は丁寧なミガキ。3の坏は外面に僅かに稜を残す。4の甕は武蔵型である。5の甕は胴部に膨らみを残す。

第101号竪穴住居跡（第101・150・211図、図版14）

遺構 28W・29Wグリッドに位置する。北でカマドが第102号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北4.0m、東西4.2mの方形。壁は現存高40～60cm、やや外傾する。西壁及び北壁と南壁の西寄りの壁下に壁溝の痕跡が認められ、幅15～20cm、深さ5～10cm程であった。床面はローム主体の貼床で、ほぼ平坦で固く締まっていた。ピットはP1が確認され、位置的に出入口施設と考えられる。また、西壁より内側に向かって延びるD1・D2の間仕切溝と思われるものが確認された。両者の間隔が約45cmと近接していることから、同時併存ではないと思われるが、新・旧関係は明確にできなかった。カマドは北辺の中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。左袖部付近より土師器の鉢（1）と腰2点、焚口付近より同甕（2）の破片が出土している。礎はカマドの構築材であった可能性が高い。覆土は、ローム粒混じりの黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 とともに土師器で、鉢（1）、甕（2）を図示した。1の鉢は口縁部が短く、外反する。2の甕は長胴形で、底部外面へラ削りを施す。

第102号竪穴住居跡（第99・150・211図、図版14・27）

遺構 29Wグリッドに位置する。南西隅が第101号竪穴住居跡と重複し、これに切られていた。規模・形状は南北3.0～3.1m、東西3.7～4.0mの長方形。壁は現存高35～60cm、やや外傾する。南・北壁の西寄りの壁下に壁溝の痕跡が認められた。幅10～15cm、深さ5～8cm程で、本跡はカマド部分を除き掘削していたものと推定される。床面はローム主体の貼床で、ほぼ平坦で固く締まっていた。ピットは確認されなかった。カマドは北辺の東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、一部強い被熱を受けて硬化していた。また、火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が著しく狭いことから、竪穴の廃絶時に失われたものと推察される。南東隅の床面より須恵器の坏（1）が出土している。また、西壁側の床面近くに15×25cm、20×40cmの範囲で厚さ10cmの焼土が遺存していたが性格は不明。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏（1）を図示した。1の坏は底部へラ起こしの後、へラ削り。

第103号竪穴住居跡（第102・150・211図、図版14・27）

遺構 23T・23U・24T・24Uグリッドに位置する。規模・形状は南北3.2～3.4m、東西3.9～4.1mの長方形。壁は現存高60～90cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。カマド内より土師器の甕（3）、その煙道部から同甕（4）が出土している。また、本跡は床面もしくは床面近くの覆土中に多量の焼土と炭化材が遺存し、火災住居と考えられる。これらと共に須恵器の坏（1・2）、土師器の甕（3・4）が出土している。焼土、炭化材の出土状況から居住中の火災と推定されるが、生活具の出土量が少ないように思われる。覆土は、ローム粒・塊を多く含む黒褐色土で、人為的埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏（1・2）、土師器の甕（3～5）、女瓦（6）を図示した。1・2の坏は底部へラ起こしで、1はへラ記号「

第105号竪穴住居跡（第103・150・211図、図版14）

遺構 25W・25Xグリッドに位置する。規模・形状は南北3.8m、東西4.0～4.4mの不整形長方形。壁は現存高25～50cm、やや外傾する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化し、中心部よりやや西寄りに支脚と思われる、長さ20cm程の礎が認められた。右袖部が左袖部に比べて短く、竪穴の廃絶時に失われたものと推察される。また、カマドの南壁から土師器の坏（1）が出土し、南約30cmの床面に長さ45cm、幅30cm、厚さ8cm程の板状の角礫が遺存していた。この石材は被熱を受けていることから、カマドの焚口部の底などの部材と推定される。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 石製品の砥石（5）以外はいずれも土師器で、坏（1・2）、甕（3・4）を図示した。1・2の坏はロクロ整形で、2は内面黒色処理を施す。3・4の甕は武蔵型。4は底部外面に木炭痕。5の砥石は第80号竪穴住居跡より出土の破片と接合した。砂岩製。

第106号竪穴住居跡（第93・150・211図、図版14・27）

遺構 27N・27Oグリッドに位置する。第84号竪穴住居跡と重複し、これを切っていた。規模・形状は南北2.1～2.3m、東西3.1mの長方形。壁の現存高は第84号跡内にある為20～30cmで、本来は55～60cm程と推定される。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム層中にあり、南半部は北半部より10cm程低くなっていたが、全体に固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認され、P2は貯蔵穴と考えられるが、P1の性格は不明。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部が確認され、火床面

は赤化していた。床面から土師器の坏（1・3）、小形甕（4）が出土している。覆土は、ローム粒を少量含む黒褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、坏（1・3）、小形甕（4）を図示した。1の坏は外面に使をもち、2の坏は僅かに縁を残す。3の坏は浅い半球形。4の小形甕は高さ20cm程度である。

第107号竪穴住居跡（第105・151・211図、第2表、図版14・27）

遺構 31H・32Hグリッドに位置する。規模・形状は南北4.6～5.0m、東西5.1mのほぼ方形。壁は現存高55～60cm、やや外傾する。壁下には壁溝が確認されなかった。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P7の7基確認され、P1～P4が主柱穴、P5が出入口施設、P6・P7は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、灰白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。また、側壁から袖部にかけて灰白色粘土を用いて構築していた。床面から土師器の坏（1）、高坏（3）、須恵器の坏（2）、自然石利用の編物鉢石（第2表・St1）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏（1）、高坏（3）、鉢（5）、甕（6）、須恵器の坏（2）、高坏（4）を図示した。1の坏は浅い半球形。3の高坏は坏部内面にミガキ、脚部外面へラ削りを施し、長脚の高坏。5の鉢は底部が深く半球形となる鉢で、内面に丁寧なミガキを施す。6の甕は胴部の中程に膨らみを残す長胴形。2の坏は内厚で在地面と思われる。4の高坏は長方形の透かし孔を設けた脚部である。

第108号竪穴住居跡（第106・151・211図、第2表、図版14）

遺構 34Kグリッドに位置する。規模・形状は南北3.9～4.2m、東西4.7mの長方形。壁は現存高55～60cm、やや外傾する。カマド部分を除く壁下には壁溝が設けられており、幅15～20cm、深さ10cm程度であった。床面はローム主体の粘床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認され、P1は出入口施設、P2は貯蔵穴と考えられる。また、西壁から内側に延びるD1・D3、東壁から内側に延びるD2・D4の間仕切溝と考えられるものが確認された。それぞれ壁溝から内側に80～90cmの長さで、幅20～30cm、深さ10cm程度であった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面と奥壁部が赤化していた。また、側壁から奥壁にかけても白色粘土が使用されていた。床面の中央やや南西寄りで編物鉢石と思われる礎（第2表・St1）が1点出土した。覆土は、ローム粒混じりの褐色土、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で、坏（1・3）、甕（4）を図示した。1・2の坏は模倣型で、1は蓋形、2は坏形である。3の坏は浅い半球形。4の甕は口縁部が大きく外反する。

第109号竪穴住居跡（第107・152・211図、第2表、図版14・15・27）

遺構 33K・33Lグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0～3.6m、東西3.6～3.9mの不整形長方形。壁は現存高55～65cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは東辺の中央に大きく壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。また、カマドの焚口付近より土師器の甕（8・9）などが出土した。8の甕はカマドで使用されていたと思われるが、他は構築（補強）材と考えられる。また、南東部の床面から須恵器の蓋（1）、土師器の坏（3・4）、甕（6・7）、甕（11）、床面の中央やや西寄りで同坏（2）などが出土している。また、西壁際の中央から北寄り、編物鉢石と考えられる細長い礎（第2表・St1～St17）が2群計17点出土した。その内訳は、北側がSt1～St6の6点、中央寄りでSt7～St17の11点である。覆土は、ローム粒・塊を多く含む褐色土で、人為的埋没と考えられる。

遺物 須恵器の蓋（1）以外はすべて土師器で、坏（2～5）、甕（6・7）、甕（8・9・11）、小形甕（10）を図示した。前記の編物鉢石（St1）は第2表に計測値を示した。1の蓋は第107号竪穴住居跡の坏身に組み合うように思われたが、こちらがやや小振りであった。2～4の坏は浅い半球形。5の坏は模倣型の坏形である。6の甕は底部を欠損しているが、内面の整形から細めの甕と判断した。7の甕は口径が28cmと大振りで、内面に丁寧なミガキを施す。8・9の甕は長胴形で体部外面へラ削り、11の甕は胴部中程でやや膨らむ長胴形である。

第110号竪穴住居跡（第104・151・211図、図版15・27）

遺構 29N・29Oグリッドに位置する。規模・形状は南北3.3～3.4m、東西3.4～3.6mのほぼ方形。壁は現存高36～40cm、やや外傾する。壁下には壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の粘床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1が1基確認され、出入口施設と考えられる。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認された。火床面は広範囲に赤化していた。カマド内及びその周辺から須恵器の蓋（1）、土師器の坏（2・3）、甕（4・5）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の蓋（1）、土師器の坏（2・3）、甕（4・5）を図示した。1の蓋は焼成時の焼き歪みが見られ、扁平な凝灰珠ツマミを持つ。2・3の坏は半球形。4の甕はやや小振り。5の甕は胴部の中程でやや膨らむ長胴形。

第111号竪穴住居跡 (第108・151・211図、図版15)

遺構 31N・31O・32N・32Qグリッドに位置する。規模・形状は南北2.4～2.7m、東西3.0～3.2mの不整長方形。壁は現存高50～55cm、やや外傾する。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1・P2の2基確認され、P1は出入り施設、P2は貯蔵穴と考えられる。カマドは北辺の中央に大きく壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。右袖部に比べて左袖部の遺存状態が不良であり、竪穴の廃絶時に失われたものと推察される。カマド内より土師器の甕(5・6)が出土し、床面の中央やや南東寄りから同坪(3)、南東の焼土中から同壺(Ⅲ・4)が出土している。なお、本跡は床面もしくは床面近くの覆土中より多数炭化材が確認され、南東隅が幅70cm、長さ1.0m、西北北寄りが幅40～80cm、長さ1.0mの範囲に厚さ10～15cmの焼土が遺存していた。これから、火災住居の可能性が考えられるものの、居住中の火災が否かは断定し難い。覆土は、上位がローム粒・塊を多く含む暗褐色土で人為的埋没、下位は少量の炭化物・焼土粒が含まれ、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の甕(1)以外はすべて土師器で、坪(2・3)、壺(Ⅲ・4)、甕(5・6)を図示した。1の甕は扁平なボタン状ツマミを持つ。2の坪は丸底皿で、3の坪は平底である。4の壺(Ⅲ)は丸底皿。5・6の甕は長胴形で、6は内厚の造りで底部外面に木葉文。

第112号竪穴住居跡 (第111・153・211図、図版15・27)

遺構 31O・31Pグリッドに位置する。規模・形状は南北5.0m、東西4.2～4.4mの長方形。壁は現存高50～60cm、やや外傾する。壁下に壁溝が掘けられており、幅10～18cm、深さ5～8cm程で、カマド部分を除き囲繞していた。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P7の7基確認され、P5は最終時の出入り施設、P7は貯蔵穴と考えられる。P4は位置的に同一出入り施設の可能性があるが、その場合は一辺4.2～4.4m程の方形であったと考えられ、西壁側のP1・P2は主柱穴と見ることが出来る。しかし、東壁側の主柱穴が確認されず、断定はし難いものの、方形の竪穴を南側に拡張したとの判断は問題ないと考えられる。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、火床面の中央の焼土下に径15cm、深さ10cmのピットが確認され、支脚を据えた痕跡と考えられる。左袖部の脇から、長さ20cm程の棒状の礎が確認されており、抜き取られた支脚と推察される。竪穴の廃絶時に抜き取られたものと考えられる。北壁の西寄り、北西隅、西壁中程の壁面より焼土の遺存が確認され、南西部の床面より炭化材が出土した。火災住居と考えられるが、焼土、炭化材の量から見て、居住中の火災ではなく焼土処理的なものと推察される。南側の床面から土師器の坪(1・2)、鉢(3)が出土している。覆土は、ローム粒・塊混じりの暗褐色土で、少量の炭化物・焼土粒を含み、人為的埋没と考えられる。

遺物 土師器の坪(1・2)、鉢(3)を図示した。1の坪は浅い半球形。2の坪は模倣型の坪形。3の鉢は平底タイプと考えられる。

第114号竪穴住居跡 (第109・153・211図、図版15・27)

遺構 31Q・32Qグリッドに位置する。規模・形状は南北3.4～3.6m、東西4.2～4.4mの長方形。壁は現存高70～80cm、やや外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝・ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認された。左袖部は右袖部に比べて遺存範囲が狭く、竪穴の廃絶時に失われたものと考えられる。床面及び床面近くより土師器の坪(1・2)、甕(3)、甕(5)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で坪(1・2)、甕(3)、甕(4・5)を図示した。1の坪は模倣型の坪形。2の坪は半球形。3の甕は単孔式。4の甕は武蔵型。5の甕は長胴形の底部で外面へテラ削り。

第115号竪穴住居跡 (第112・153・211図、図版15・27)

遺構 30Pグリッドに位置する。規模・形状は南北2.2～2.3m、東西3.2～3.4mの不整長方形。壁は現存高30～35cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝・ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、カマド内より補強材(袖芯)であったと思われる礎2点、支脚であったと思われる礎状の礎、土師器の鉢(3)の破片などが遺存した。火床面の範囲に比べて両袖部の範囲が狭く、補強材(袖芯)と考えられる礎がカマド内にあったことから、竪穴の廃絶時に除去されたものと推察される。北東部の床面及び床面付近より土師器の坪(1)、鉢(2)、甕(4)、甕(5・6)が出土している。また、南東部と南西部の床面付近に焼土が遺存し、南東部の焼土には炭化材が少量含まれていた。火災住居の可能性が考えられるが、焼土の量に比べて炭化材の遺存が極少なく、居住中の火災とは断定し難いが、遺物の遺存状況からはその可能性も否めない。覆土は、ローム粒・塊が多く混じる褐色土で、少量の炭化物・焼土粒が含まれ、人為的埋没と考えられる。

遺物 いずれも土師器で坪(1)、鉢(2・3)、甕(4)、甕(5・6)を図示した。1の坪は半球形。2の鉢は球形に近い体。3の鉢は平底で寛形。4の甕はやや小振りで、内面は丁寧なミガキを施す。5の甕は長胴形、6の甕は長胴形で、胴部下部がやや膨らむ。

第116号竪穴住居跡 (第110・154・211図)

遺構 29Q・30Qグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0m、東西2.9～3.3mの不整長方形。壁は現存高65～80cm、やや外傾する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝・ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を僅かに切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。北壁寄りの床面から、土師器の坪(2)、甕(3)が

出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の蓋(1)、土師器の坏(2)、甕(3)を図示した。1の蓋はツマミを欠損し、口縁部の折曲が丸味を持つ。2の坏は外面に稜を残す。3の甕は長胴形で、底部外面に木葉痕。

第117号竪穴住居跡(第113・154・211図、図版15)

遺構 29Qグリッドに位置する。規模・形状は南北3.0～3.1m、東西3.5mの長方形。壁は現存高50～55cm、僅かに外傾する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝・ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。カマド内より土師器の甕(5)の破片、カマドの南西脇の床面から須恵器の坏(2)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の蓋(1)、坏(2)、鉢(4)、土師器の坏(3)、甕(5・6)を図示した。1の蓋は扁平な擬宝珠ツマミ部分である。2の坏は丸底で肉厚、腰部の立ち上がり部分の状態から、瓶頸の可能性も否めない。4の鉢は平底で、腰部は外傾して直線的に立ち上がり、底部外面へラ削り。3の坏は半球形。5・6の甕は長胴形で、6は口縁部が強く外反する。

第118号竪穴住居跡(第114・154・211図、図版15・28)

遺構 31Qグリッドに位置する。規模・形状は南北3.4～3.6m、東西4.0～4.1mの長方形。壁は現存高60～70cm、ほぼ直立する。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。壁溝・ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、火床面の範囲に比べて、両袖部の遺存範囲が狭く、竪穴の廃絶時に失われたものと推察される。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 土師器の坏(1・2)、甕(4・5)、須恵器の高台付坏(3)を図示した。1・2の坏は外面に稜を僅かに残す。3の高台付坏は底部が高台より突出する形状で、高台内にヘラ記号「㊦」。4の甕は長胴形、5の甕は底部外面へラ削り、胴部はやや膨らむと思われる。

第119号竪穴住居跡(第115・154・211図、図版15・28)

遺構 35Uグリッドに位置する。西端部が第30号溝跡と重複し、これに切られていた(第8節参照)。また、南側は調査区外に所在し、本来の規模・形状は明確にしないが、遺存部分から南北現存3.2m、東西5.0mで、一辺5.0mの方形もしくはこれを長辺とする長方形と推定される。壁は現存高35～40cm、やや外傾する。壁下に壁溝が設けられており、幅20cm、深さ10～15cmで、カマド部分を除き連続していたと推察される。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P5の5基確認され、P1・P2は主柱穴、壁溝内のP3～P5は補助柱穴と考えられ、このうちP3・P4はカマドの両側に存在することから、カマドに関連するものと思われる。カマドは北辺の中央やや東寄り、壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。また、中軸線より僅かに西寄りに支脚と考えられる。長さ30cm程の礎が据えられた。本跡のカマドは大部分が竪穴内に構築されており、袖部は確認されなかった。カマド内より須恵器の坏(3)が出土し、カマドの東脇から同坏(1)、西脇から土師器の甕(4)、東側の壁溝の北寄りから須恵器の坏(2)が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。床面下の調査において、P6～P8の3基のピット、東壁際に長さ1.8m、幅40cm、深さ18cm程の床面下の掘り込み、北壁の西側と西壁下に古い壁溝の痕跡が確認された。なお、P1・P2は4本柱の北側の主柱穴と判断されるが、P6・P7は2本柱の主柱穴の可能性が高い。2本柱で東西に長い長方形であったものを南側に拡張して方形とした際に、4本柱に変更したと推察される。

遺物 須恵器の坏(1～3)、土師器の甕(4・5)、台付甕(6・7)、石製品の碁石(8)を図示した。1の坏は底部へラ削り、2の坏は糸切り後外周へラ削り、3の坏はへら起こしである。4の甕は常盤型。5は長胴形。6・7の台付甕は武蔵型である。8は縄文製の碁石で、被熱を受けてひび割れを生じている。

第120号竪穴住居跡(第116・155・212図、図版16・28)

遺構 36Tグリッドに位置する。規模・形状は一辺3.0mの方形。壁は現存高50～60cm。壁下に壁溝は確認されなかった。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1が確認され、位置的に出入口施設と考えられる。炉跡は、北壁より30cm程内側で、中央やや西寄りに確認され、径40cmの円形の地床であった。火床面は床面と同レベルで、被熱を受けて赤炭化し、南端には棒状の礎が礎石として据えられていた。炉跡内より土師器の甕(10)が出土した他、北壁西寄りから同小型甕(6)、南東部の床面から同埴(1～3)、埴(4)、高坏(5)、小形甕(7)、台付甕(8・9)、甕(11・12)などがまとまって出土している。また、床面及び床面近くより多数の炭化材が確認されており、火災住居の可能性が推察される。焼土が遺存していないものの、完形品の土器類が多数出土していることから、その可能性が高いと考えられる。覆土は、ローム粒・塊混じりの暗褐色土で、炭化物粒と少量の焼土粒を含み、人為的埋没と考えられる。床面下の調査で、P1の北脇にP2が確認された。位置的に、旧い出入口施設と考えられるが、小規模な竪穴であり、他に建て替え痕跡の痕跡が認められず、疑問を残す。

遺物 すべての土師器で、被熱を受けてひび割れているものも見られるが、そのほとんどが完形であった。埴(1～3)、埴(4)、高坏(5)、小形甕(6・7)、台付甕(8・9)、甕(10～12)を図示した。1～3の埴はいずれも平底で類似の器形を示し、入れ子状とそれぞれ口径が異

なる。4の増は平底である。5の高坪は脚部がへらの字状に広がり、透かし孔を穿つ。6・7の小型彫は、6は脚部の張りが弱く、7は強く脚部が張り、口縁部外面は粘土粒の接合痕が明瞭。8・9の台付彫は台脚部が分離したもので、ともに剥離面を擦ってあり、分離後も器として利用していたと考えられる。10の彫は脚部の張りが弱く、11・12の彫は張りが強い。いずれも口縁部外面に粘土粒の接合痕が明瞭であった。吉ヶ谷式系の一群と見られ、本道跡では客体的存在である。

第121号竪穴住居跡 (第117・154・212図、図版16)

遺構 37Uグリッドに位置する。西端から南西隅が第30号溝跡と重複し、これに切られていた (第8節参照)。この状況から本来の規模・形状は明確にし難いが、遺存部分から南北3.9～4.0m、東西4.2mの方形と推定される。壁は現存高25～35cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。中軸線より極かに西寄りに棒状の竈が支脚として据えられていた。なお、本跡のカマドは大部分が堅穴外に設けられており、袖部の範囲はそれぞれ20cm程であった。カマドの東端には50×60cmの範囲に15cm程の厚さで焼土が遺存していたが、性格は不明である。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏 (1・2)、土師器の甕 (3・4) を図示した。2の坏は底部糸切りの後外周へラ削り。3の甕は武蔵型。4の甕は底部外面に木葉痕。

第122号竪穴住居跡 (第118・212図、図版16)

遺構 38N・38Oグリッドに位置する。カマドから北西端が第398号溝跡と重複し、これに切られていた (第8節参照)。規模・形状は南北4.2m、東西4.5mの方形。壁は現存高55～65cm、ほぼ直立する。床面はローム層中にあり、平坦で固く締まっていた。壁溝、ピットは確認されなかった。カマドは北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、堅穴の廃絶時に失われたものと推察される。覆土は、ローム粒混じりの褐色土で、自然埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

第123号竪穴住居跡 (第120・156・212図、図版16)

遺構 37P・37Qグリッドに位置する。堅穴の中央やや北寄りを東西に延びる。第41号溝跡と重複し、これに切られていた (第8節参照)。また、堅穴の外周に設けられていた櫓状施設の南西部は調査区外に所在する。堅穴部分の規模・形状は南北3.2～3.4m、東西4.3～4.4m、西側が丸味を帯びた不整形方形。壁は櫓状施設までの現存高平均55cm、確認面までは70cm、僅かに外傾する。壁下には壁溝が設けられ、幅15～23cm、深さ5～8cmで、カマド部分を除き圍繞する。床面はローム主体の粘床で、平坦で固く締まっていた。ピットは確認されなかった。カマドは北辺の中央やや東寄りに壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面の一部が赤化していた。また、赤化部分のやや北寄りに径20cm、深さ10cm程のピットが確認され、支脚を据えた竈跡と考えられる。カマドは大部分が堅穴外に設けられているが、袖部はそれぞれ10cm程であるが、側壁部分から袖部にかけた白色粘土で構築されていた。東壁際の中程から土師器の甕 (3) が出土している。なお、本跡の特徴として、堅穴の周囲に設けられた櫓状の施設が上げられる。堅穴の周囲全体に、幅40～50cmの範囲で確認面より10～15cm低く平坦面が設けられていた。平坦であったが締まりは床面程は強くない。カマドの東側の平坦面から土師器の甕 (4・5) が出土しており、カマド座部の先端がこの櫓状施設の外まで延びていることから、堅穴と同併存の施設と考えられる。第49号竪穴住居跡の場合は、カマドがある北辺に限定されるが、同様の性格と推定される。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器の坏 (1・2)、甕 (6)、土師器の甕 (3～5) を図示した。2の坏は底部糸切りの後外周へラ削り。6の甕は外面平文文目、同内面が無文当具痕で、割れ口の一部が潰れており、破損後も何らかの用途で利用されていた事がわかる。3～5の甕は武蔵型である。

第124号竪穴住居跡 (第121・156・212図、図版16・28)

遺構 39S・39T・40S・40Tグリッドに位置する。規模・形状は南北5.7～6.8m、東西6.6mの方形。壁は現存高75～80cm、ほぼ直立する。壁下には壁溝が設けられており、幅20～40cm、深さ6～18cmで、カマド部分と北西隅を除きほぼ全体に確認された。床面はローム主体の粘床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P7・P13の8基確認され、P1～P4は主柱穴、P5は出入口施設、P6は貯蔵穴、P7・P13は補助柱と考えられる。カマドは、北辺のほぼ中央に壁を大きく切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は広範囲に赤化していた。また、火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、堅穴の廃絶時に失われたものと推察される。カマド内から土師器の甕 (8)、北西隅の床面から同坏 (1・3)、鉄製品の刀子 (13)、P6内から土師器の坏 (5)、P17直上の床面から同坏 (6) が出土している。また、堅穴の中央及びその南西から径10～20cmの範囲で厚さ10cm程の焼土が2か所確認された。覆土は、ローム粒を多く含む暗褐色土で、自然埋没と考えられる。なお、床面下の調査において、P8～P12・P14～P17の9基のピットと南西隅と南東隅に床面下の掘り込みが確認された。P8～P11は旧い主柱穴と推定され、南側のP10・P11にはP10A・P10B・P11A・P11Bと各2基の重複が認められる。建て替え拉張の存在は確認されたものの、詳細は明確にし難い。

遺物 土師器の坏 (1～6)、埴 (7)、甕 (8～12)、鉄製品の刀子 (13)、鎌 (14)、石製品の紡錘車 (15) を図示した。1・4の坏は外面に

僅かに稜を残す。2・3・5・8の坏は浅い半球形である。7の坏は胴が張る、平底タイプ。8の坏は長胴形。9・10の坏は口縁部が強く外反し、底部に向かってすぼまる。11の坏は底部外面へう割り、12の坏は底部外面に木葉痕。13の刀子は万部の先端を欠損し、現存長13cm、万部との境に幅1cm程の縦が認められる。14の鐙は万部・茎を欠損し、詳細は不明。15の紡錘車は扁平な逆台形で、滑石製。

第125号竪穴住居跡（第119・157・212図、図版16・28）

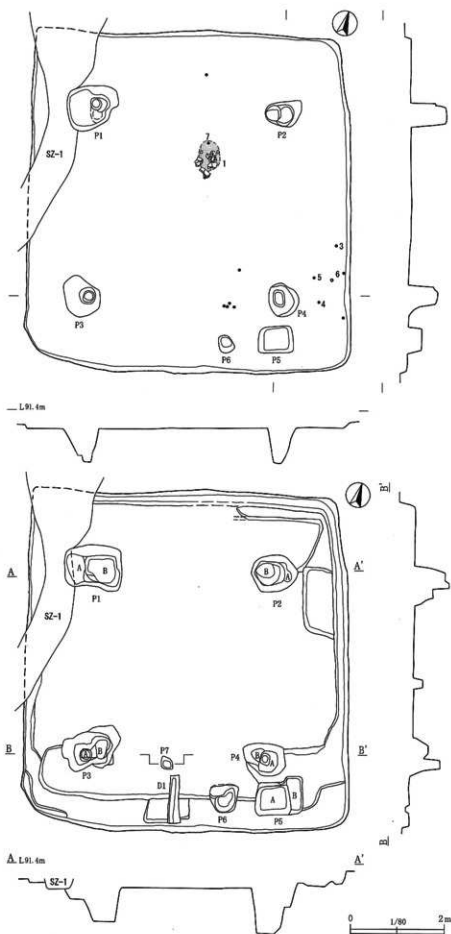
遺構 40Qグリッドに位置する。南東端が農耕関係の掘り込みに切られていた。規模・形状は南北5.8～6.2m、東西6.2～6.3mの方形。壁は現存高35～40cm、ほぼ直立する。壁下には壁溝が設けられており、カマド部分を除き閉鎖していた。床面はローム主体の貼床で、平坦で固く締まっていた。ピットはP1～P5・P13の6基確認され、P1～P4が主柱穴、P5は出入口施設、P13は補助柱穴と考えられる。また、東壁から内側に延びるD1、西壁から内側に延びるD2の2条の間仕切溝が確認された。カマドは北辺のほぼ中央に壁を切り込み、白色粘土で構築されていた。火床面と袖部の下部が確認され、火床面は赤化していた。また、火床面の範囲に比べて袖部の遺存範囲が狭く、壁穴の焼結時に失われたものと推察される。東側の床面から土師器の鉢（4）、須恵器の瓶（5）、鉄製品の手鎌（穂摘具・6）が出土している。覆土は、ローム粒混じりの暗褐色土で、自然埋没と考えられる。なお、床面下の調査において、P6～P12・P14の8基のピット及び旧い壁溝、P2に連なるD3の間仕切溝などが確認された。また、壁穴の四隅にはそれぞれ規模・形状の異なる掘り込みが認められた。床面下のピットの内、P6・P2・P7・P8は初期段階の主柱穴と考えられ、P2は新・旧で共有したと思われる。したがって、古い壁溝の痕跡よりP2に延びるD3は古い段階の間仕切溝と推定され、P11はこれらに伴う出入口施設と思われる。また、P5に近接して確認されたP9・P10も位置的に出入口施設と考えられ、拡張後に小規模な改修があったことを示すものであろう。

遺物 土師器の坏（1～3）、鉢（4）、須恵器の瓶（5）、鉄製品の手鎌（穂摘具・6）を図示した。1・2の坏は半球形。3の坏は模倣型の蓋形。4の鉢は丸底の半球形。5は瓶頸の口縁部。6の手鎌（穂摘具）は両端に小孔を持ち、一部に葉状の付着物が認められる。

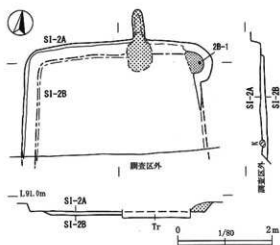
第2表 竪穴住居跡計測表

[] 推定値、単位 cm, g

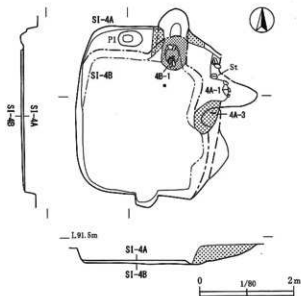
番 号	長さ	平均 径	重量	備 考
SI54-St1	[11.5]	3.1×5.2	4.15	[295] 1部欠損
SI79-St1	13.8	3.1×5.1	4.10	353 枕石
SI107-St1	14.4	3.3×3.6	3.45	281
SI108-St1	11.9	3.2×5.4	4.30	[251] 1部欠損
SI109-St1	18.2	4.0×5.5	4.75	734
SI109-St2	14.4	3.1×6.3	4.70	453
SI109-St3	[11.8]	4.6×6.6	5.60	[455] 1部欠損
SI109-St4	12.3	3.0×5.5	4.25	351
SI109-St5	10.8	2.3×4.5	3.40	196
SI109-St6	13.5	3.2×5.1	4.15	404
SI109-St7	13.7	4.1×4.7	4.40	342
SI109-St8	13.5	4.2×4.4	4.30	452
SI109-St9	15.9	3.4×3.5	3.45	280
SI109-St10	12.1	3.3×6.1	4.70	357
SI109-St11	12.3	2.5×4.1	3.30	282
SI109-St12	17.6	5.1×6.1	5.60	1,028
SI109-St13	11.6	3.1×5.1	4.10	296
SI109-St14	14.0	4.1×5.5	4.80	[515] 1部欠損
SI109-St15	11.2	4.1×5.2	4.65	425
SI109-St16	14.7	4.3×7.1	5.70	584
SI109-St17	15.0	3.0×6.1	4.55	337
平均値	13.7	4.40	421	



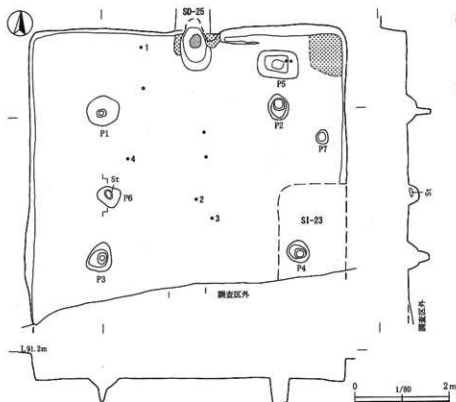
第3図 第1号竖穴住居跡・掘方



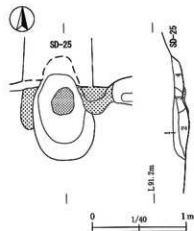
第4図 第2A・2B号竪穴住居跡



第6図 第4A・4B号竪穴住居跡

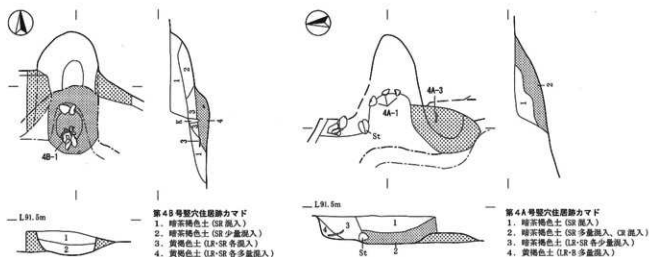


第5図 第3号竪穴住居跡・カマド、第25号溝跡

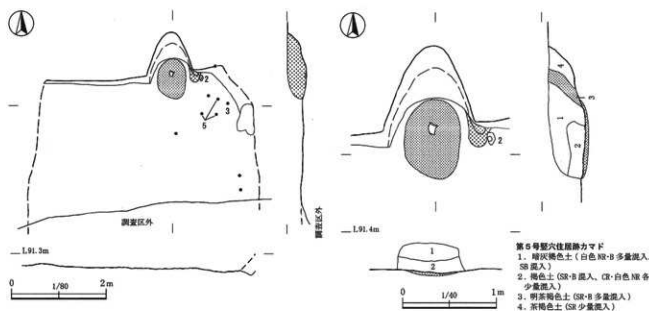


第3号竪穴住居跡カマド

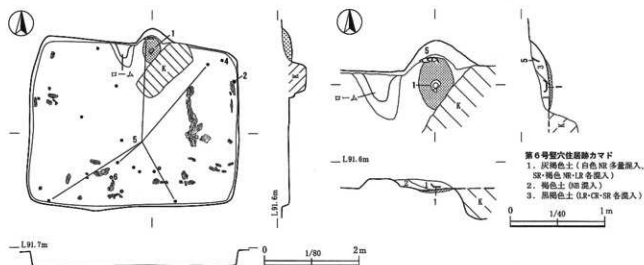
1. 赤褐色土 (白色 NR 混入、SR 少量混入)
2. 褐色土 (白色 NR-LX 各混入、SR-CR 各少量混入)
3. 褐色土 (SR-CR 各少量混入、白色 NR-S 各混入)
4. 暗赤褐色土



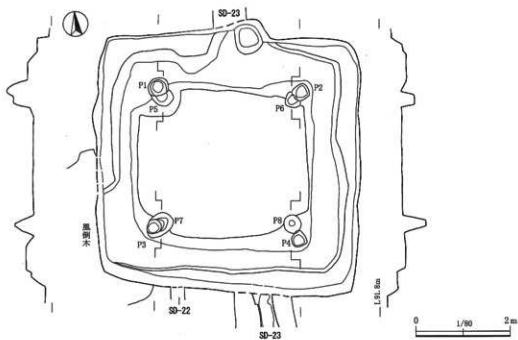
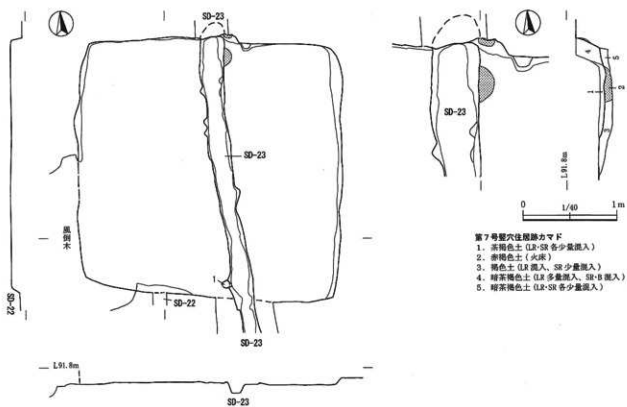
第7図 第4A・4B号竪穴住居跡カマド

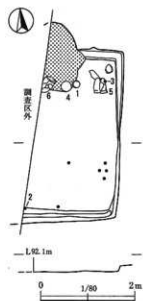
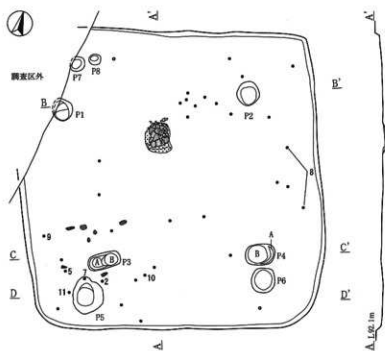


第8図 第5号竪穴住居跡・カマド

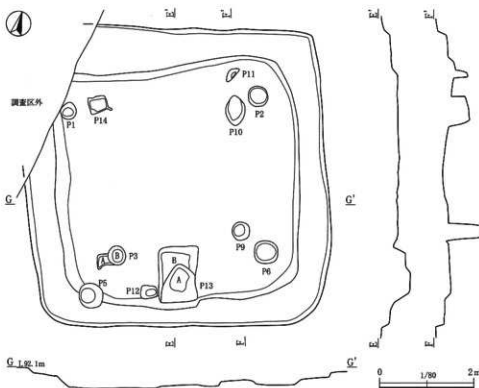
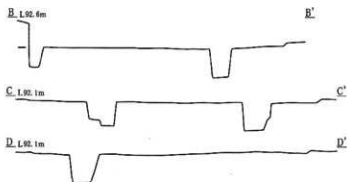


第9図 第6号竪穴住居跡・カマド

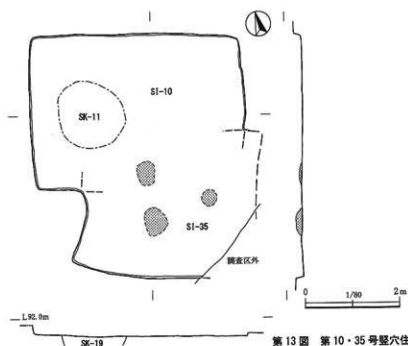




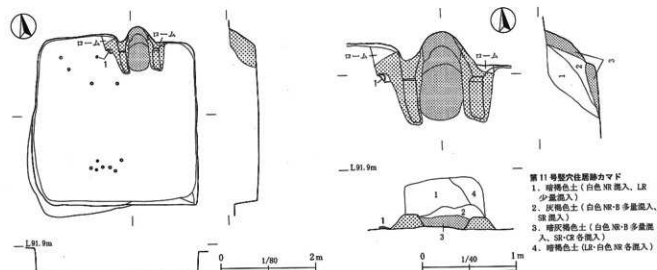
第12図 第9号竖穴住居跡



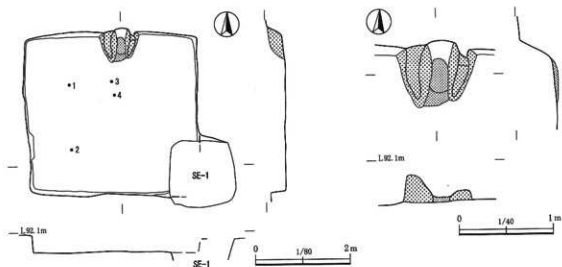
第11図 第8号竖穴住居跡・掘方



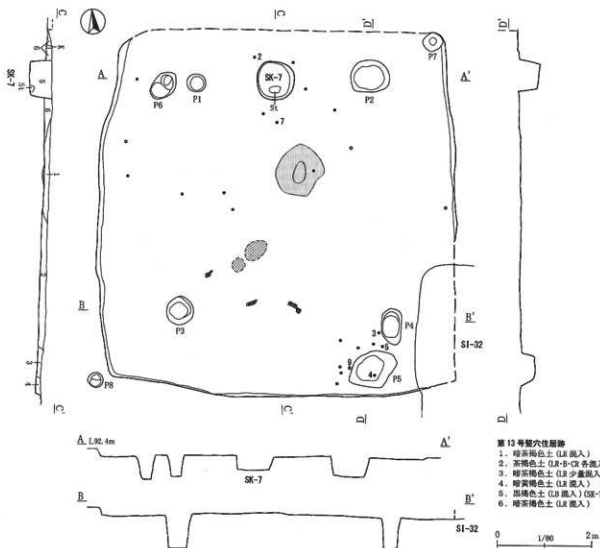
第13図 第10・35号竪穴住居跡



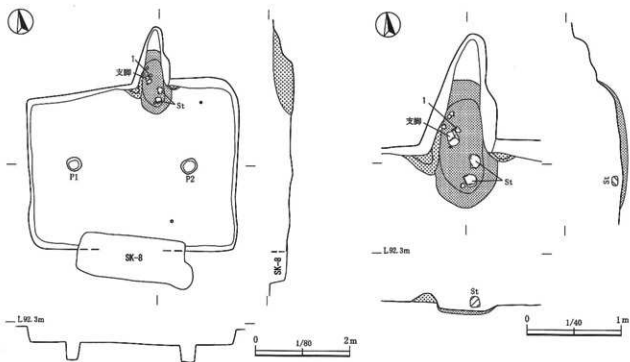
第14図 第11号竪穴住居跡・カマド



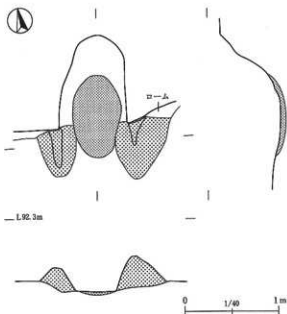
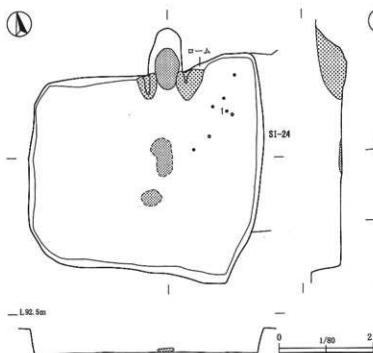
第15図 第12号竪穴住居跡・カマド



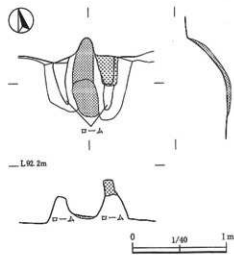
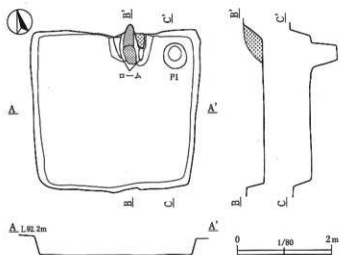
第16図 第13号竪穴住居跡、第7号土坑



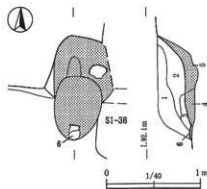
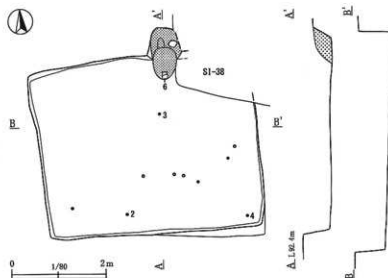
第17図 第14号竪穴住居跡・カマド



第18図 第17号竪穴住居跡・カマド



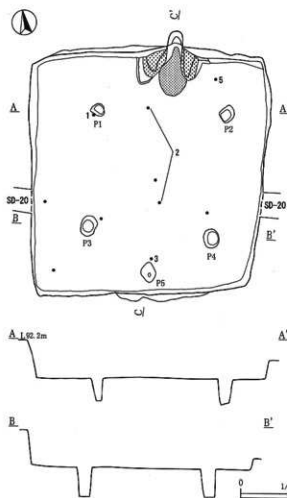
第19図 第18号竪穴住居跡・カマド



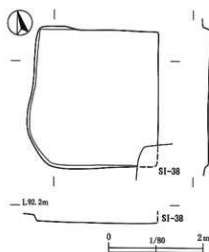
第20図 第19号竪穴住居跡・カマド

1. 褐色土 (SR-LR 各少量混入)
2. 暗茶褐色土 (SR-LR 各混入、CR 少量混入)
3. 黄褐色土 (黄色 XH-B 多量混入、SR 混入)
4. 赤褐色土 (SR 多量混入)
5. 暗茶褐色土 (SR-B 多量混入)

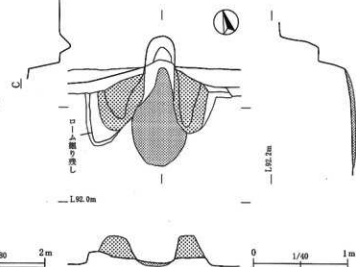
第21図 第20号竪穴住居跡・カマド



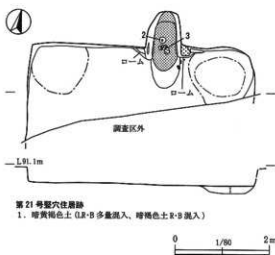
第21図 第20号竪穴住居跡・カマド



第23図 第22号竪穴住居跡

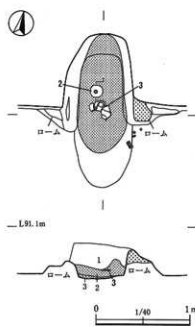


第22図 第21号竪穴住居跡・カマド



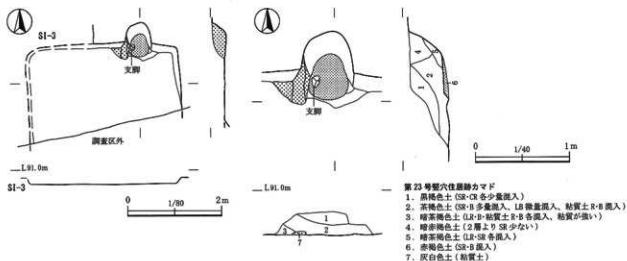
第21号竪穴住居跡

1. 暗黄褐色土 (LB-B 多量混入、暗褐色土-B 混入)

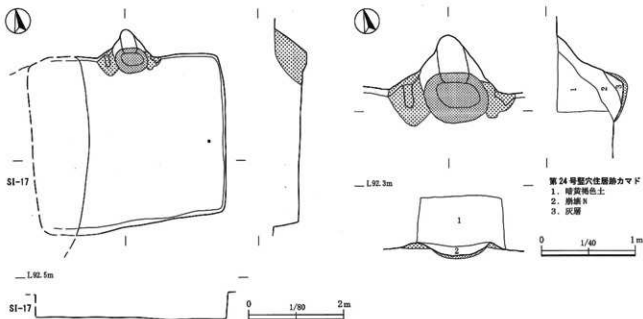


第21号竪穴住居跡カマド

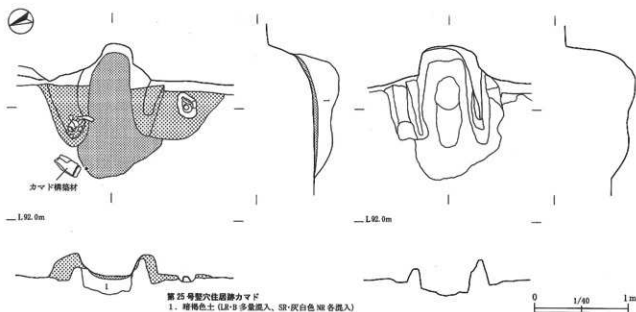
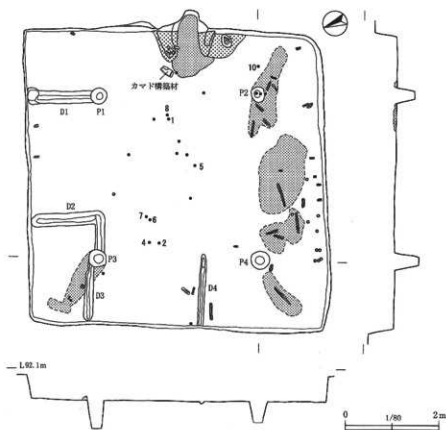
1. 暗黄褐色土 (SR-LR-CR 各少量混入)
2. 黒褐色土 (SR-B 混入、CR 多量混入)
3. 黒褐色土 (LB-B 硬化、SR-CR 各混入)
4. 赤褐色土 (SR-B 多量混入、LR 少量混入)
5. 暗茶褐色土 (CR-B 多量混入、SR 少量混入)
6. 黒褐色土 (4層より CR-B 多い、SR-B 混入、バサつく)
7. 赤褐色土 (5層より SR-B が若干少ない)



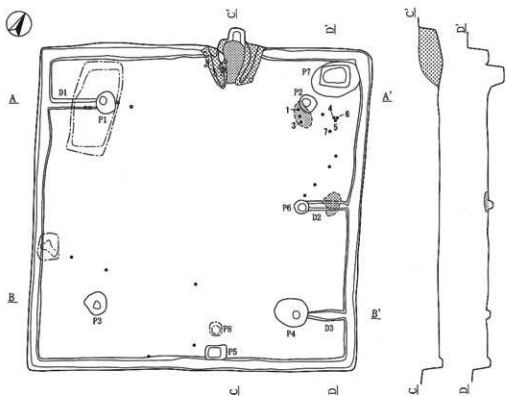
第24図 第23号竪穴住居跡・カマド



第25図 第24号竪穴住居跡・カマド

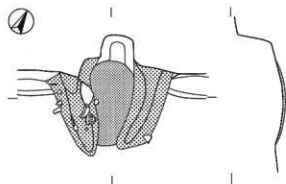
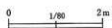


第26図 第25号壁穴住居跡・カマド・カマド掘方



第 26 号壁穴住居跡

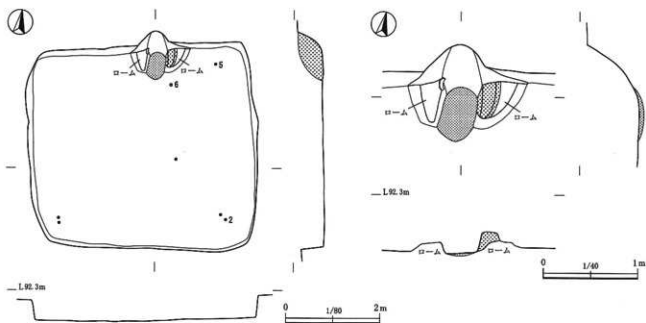
1. 橙黄褐色土 (A-B 多量混入、暗褐色土・黒褐色土 B-B 各混入)



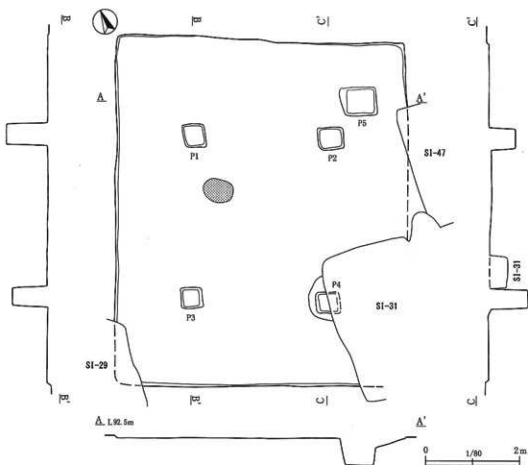
1.92.2m



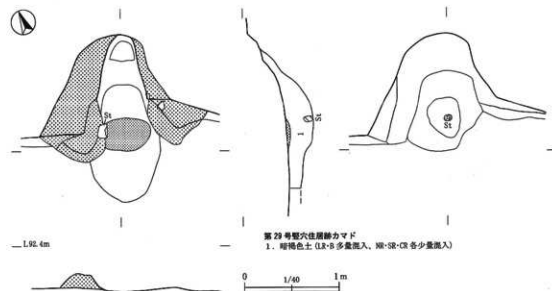
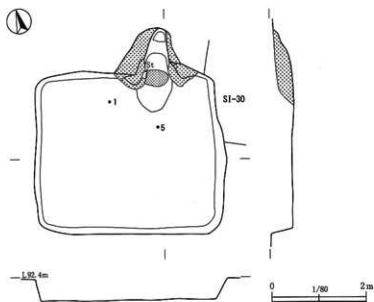
第 27 図 第 26 号壁穴住居跡・カマド



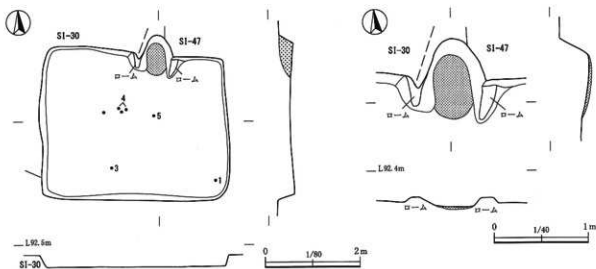
第28図 第27号竪穴住居跡・カマド



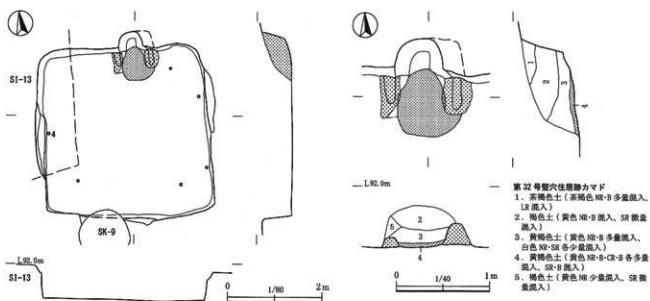
第29図 第30号竪穴住居跡



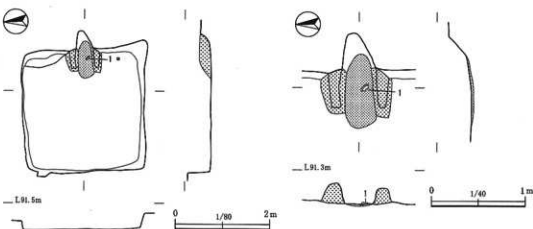
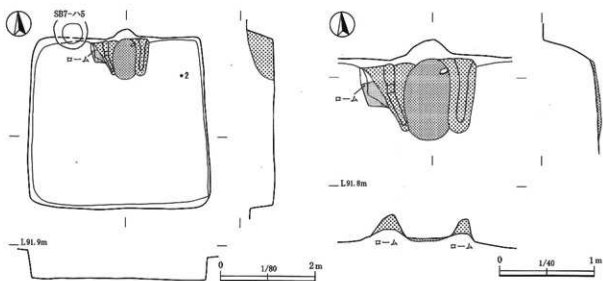
第30図 第29号竪穴住居跡・カマド・カマド掘方



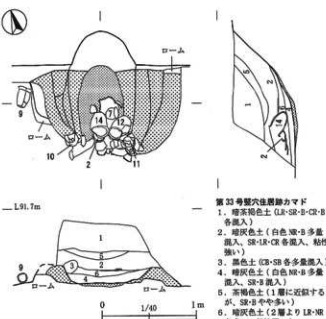
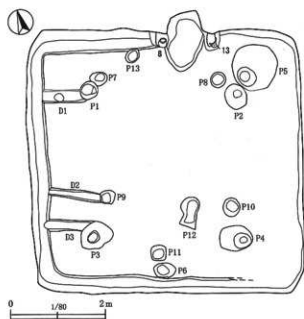
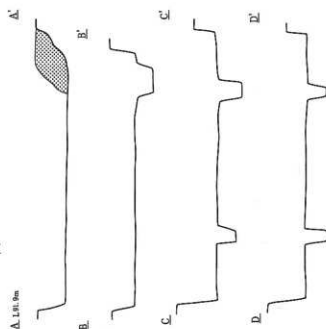
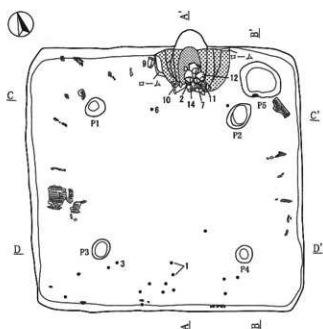
第31図 第31号竪穴住居跡・カマド



第 32 図 第 32 号竪穴住居跡・カマド

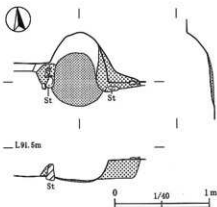
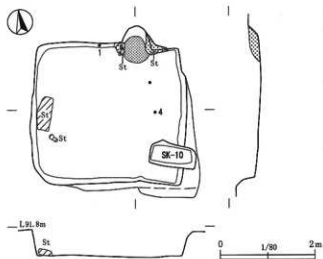


第 34 図 第 36 号竪穴住居跡・カマド

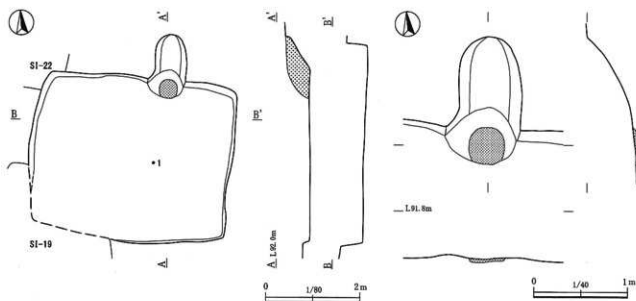


- 第33号竪穴住居跡カマド
1. 増赤褐色土 (LJ-SR-B-CR-B 各混入)
 2. 暗灰色土 (白色・黒・B 多量混入, SR-LR-CR 各混入、粘性強い)
 3. 黒色土 (CR-SR 各多量混入)
 4. 増灰色土 (白色・黒・B 多量混入, SR-B 混入)
 5. 高褐色土 (1層に近接するが、SR-B やや多い)
 6. 暗灰色土 (2層より LR・BR 各多い、粘性弱い)

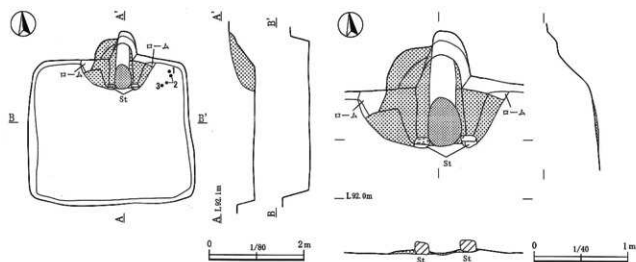
第35図 第33号竪穴住居跡・掘方・カマド



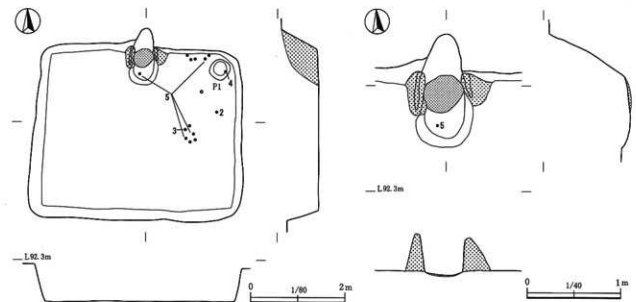
第36図 第37号竪穴住居跡・カマド、第10号土坑



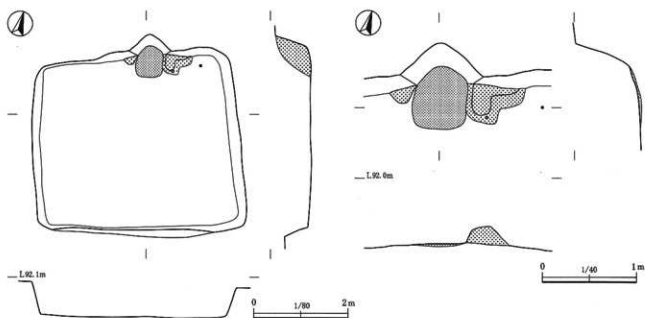
第37図 第38号壁穴住居跡・カマド



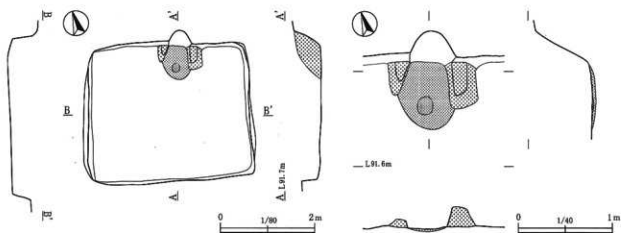
第38図 第39号壁穴住居跡・カマド



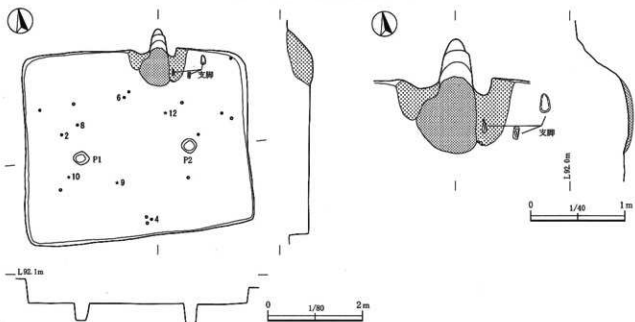
第39図 第40号壁穴住居跡・カマド



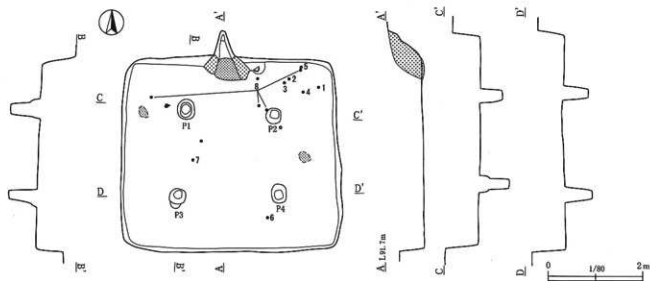
第40図 第41号竪穴住居跡・カマド



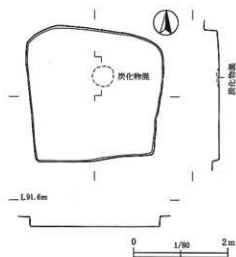
第41図 第42号竪穴住居跡・カマド



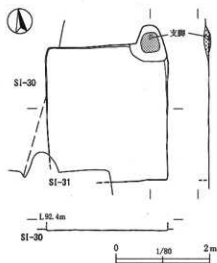
第42図 第43号竪穴住居跡・カマド



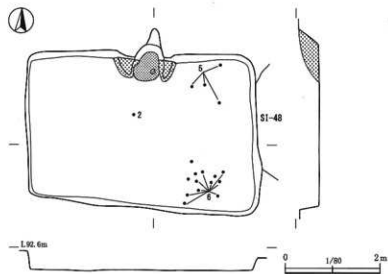
第43図 第44号竪穴住居跡



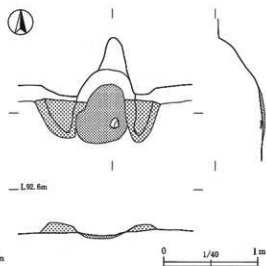
第44図 第45号竪穴住居跡

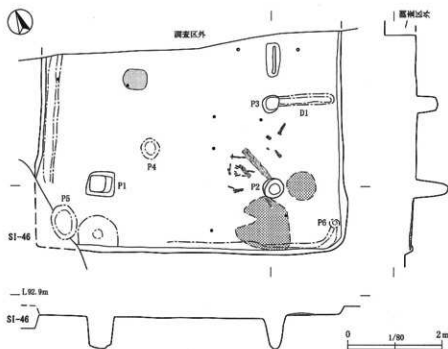


第46図 第47号竪穴住居跡

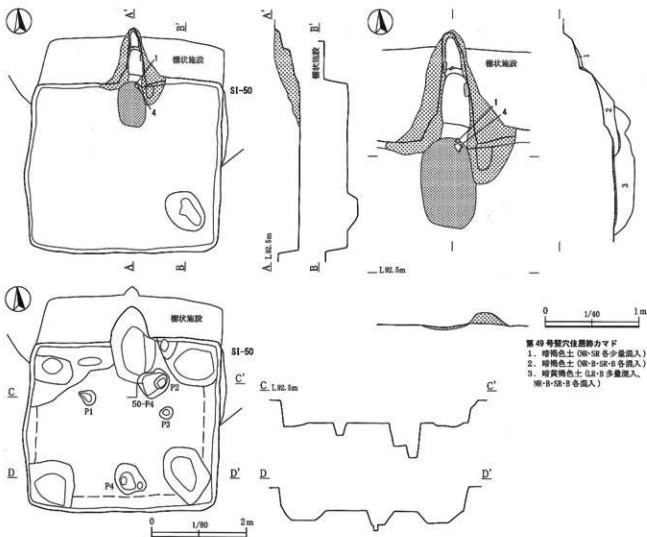


第45図 第46号竪穴住居跡・カマド



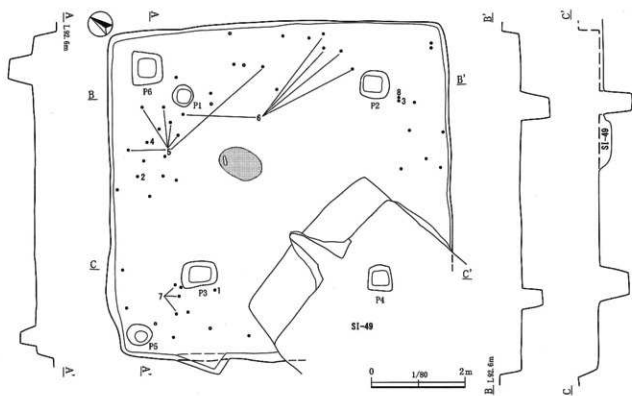


第 47 図 第 48 号竪穴住居跡

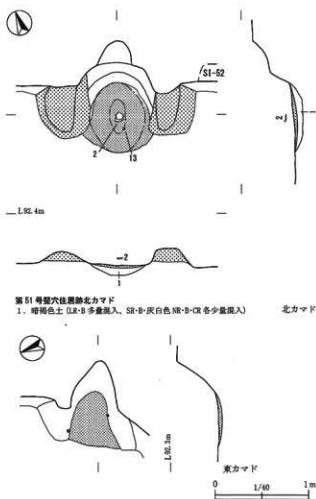
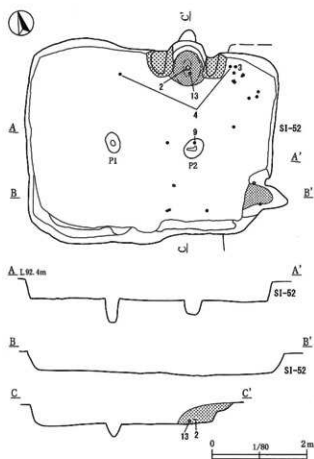


第 48 図 第 49 号竪穴住居跡・掘方・カマド

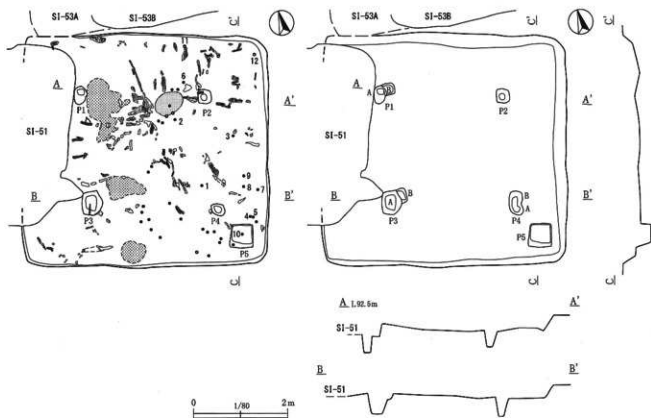
第 49 号竪穴住居跡カマド
 1. 増褐色土 (NR-SH 少量混入)
 2. 増褐色土 (NR-S-SH-B 各混入)
 3. 増黄褐色土 (LS-B 少量混入、NR-B-SH-B 各混入)



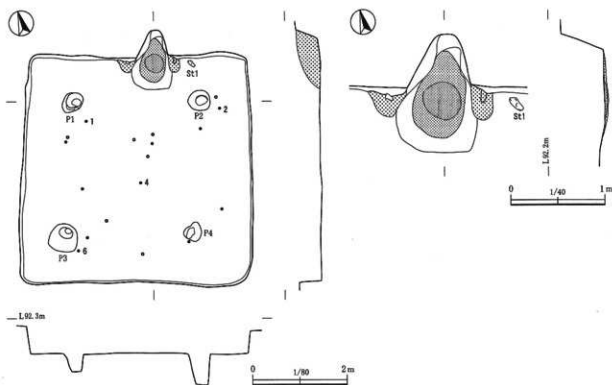
第49図 第50号壁穴住居跡



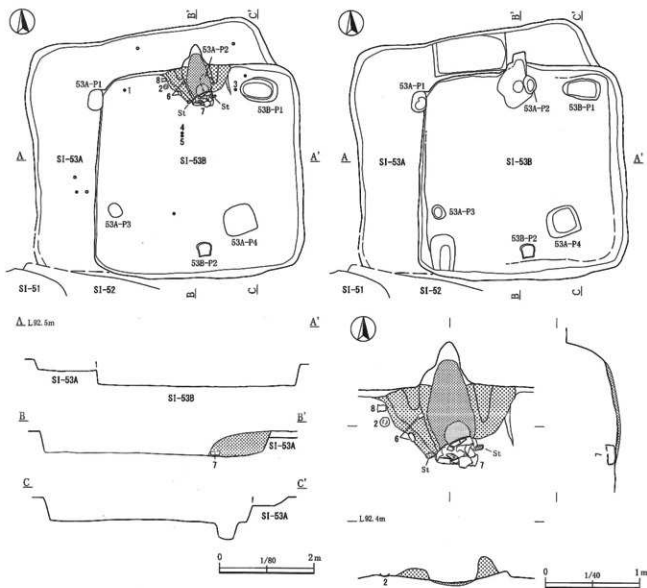
第50図 第51号壁穴住居跡・カマド（北・東）



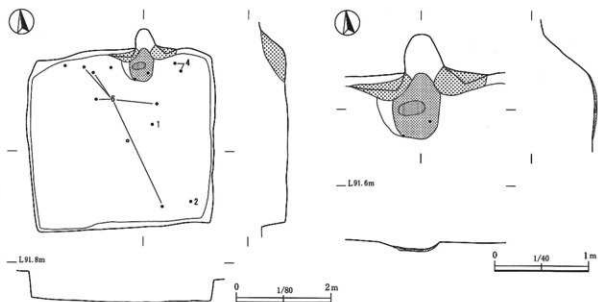
第51図 第52号竪穴住居跡・掘方



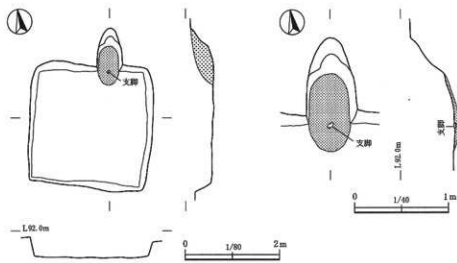
第52図 第54号竪穴住居跡・カマド



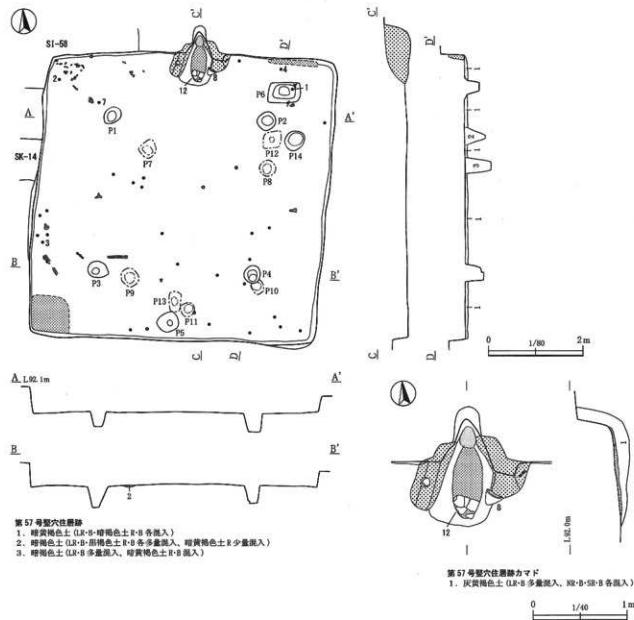
第53図 第53A・53B号竪穴住居跡・掘方・カマド



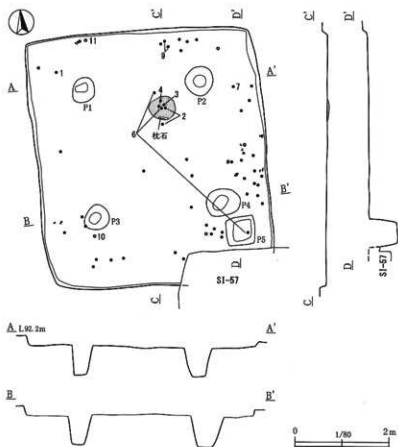
第54図 第55号竪穴住居跡・カマド



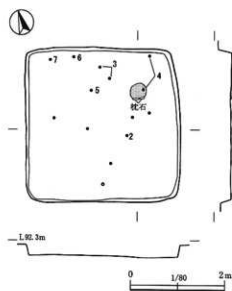
第55図 第56号壁穴住居跡・カマド



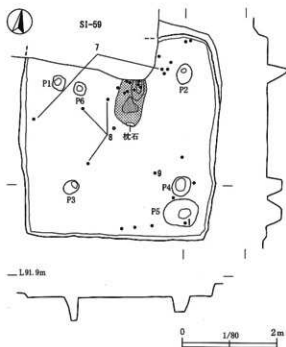
第56図 第57号壁穴住居跡・カマド



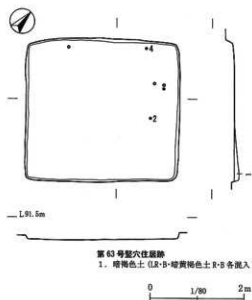
第57圖 第58号壁穴住居跡



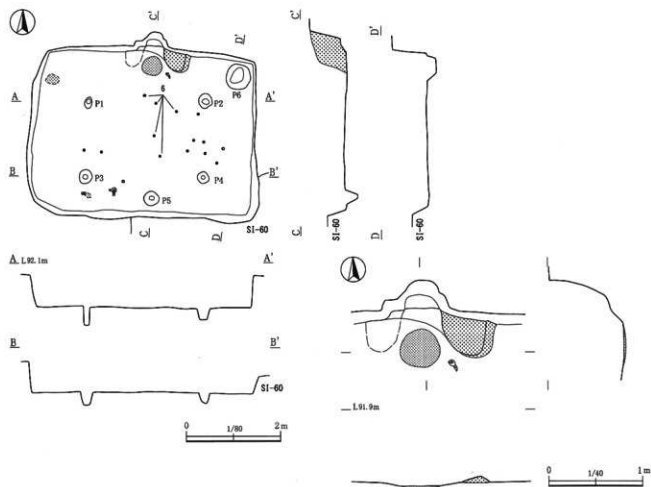
第59圖 第61号壁穴住居跡



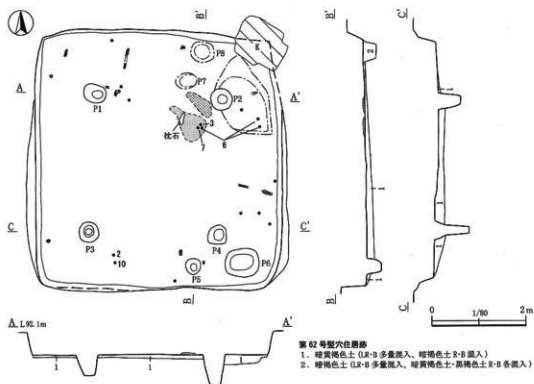
第58圖 第60号壁穴住居跡



第60圖 第63号壁穴住居跡
1. 増褐色土 (LR-B・増黄褐色土 R-S 各混入)

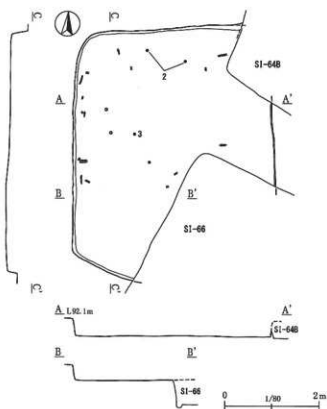


第 61 図 第 59 号整穴住居跡・カマド

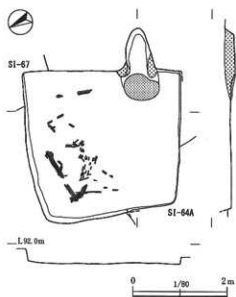


第 62 号整穴住居跡
1. 暗黄褐色土 (L-R-B 多量混入、暗褐色土 R-B 混入)
2. 暗褐色土 (L-R-B 多量混入、暗黄褐色土・黒褐色土 R-B 各混入)

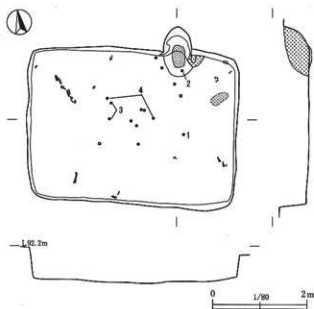
第 62 図 第 62 号整穴住居跡



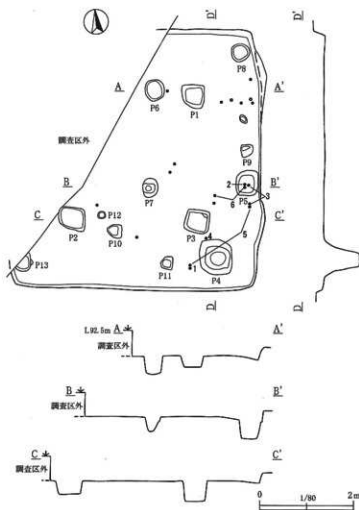
第63图 第64A号竖穴住居跡



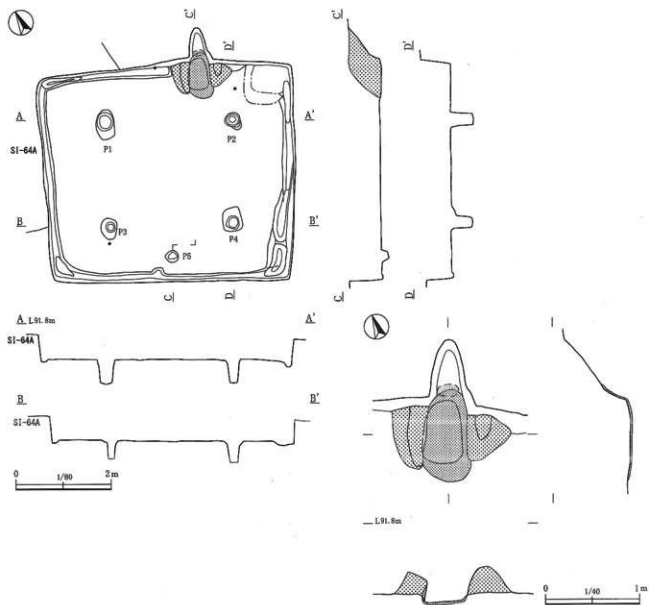
第64图 第64B号竖穴住居跡



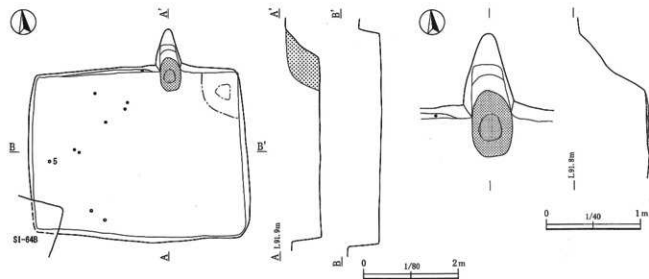
第65图 第65号竖穴住居跡



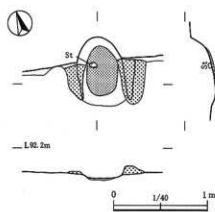
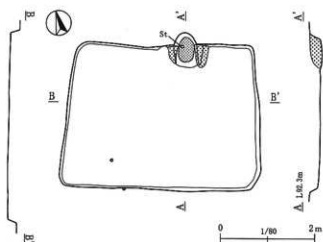
第66图 第68号竖穴住居跡



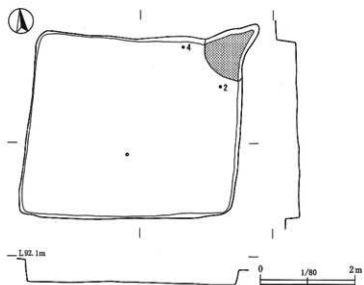
第 67 図 第 66 号竪穴住居跡・カマド



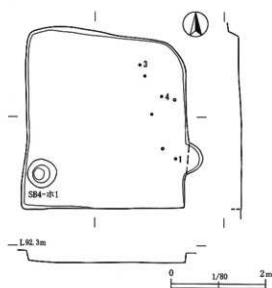
第 68 図 第 67 号竪穴住居跡・カマド



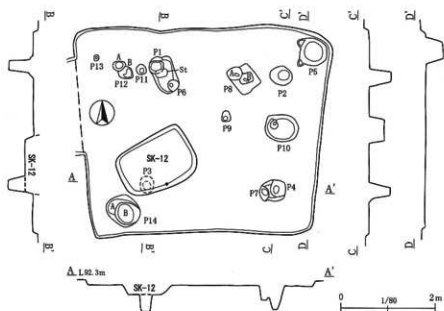
第69図 第69号竪穴住居跡・カマド



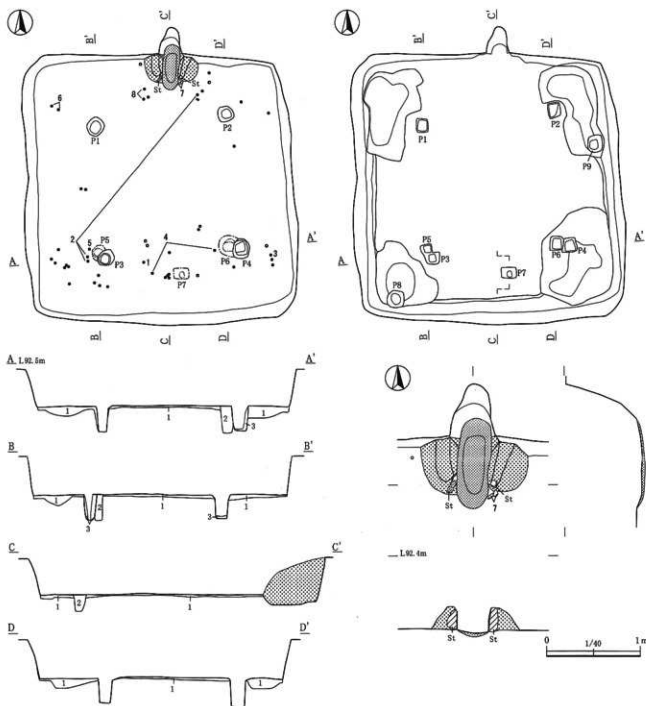
第70図 第70号竪穴住居跡



第72図 第73号竪穴住居跡



第71図 第71号竪穴住居跡、第12号土坑

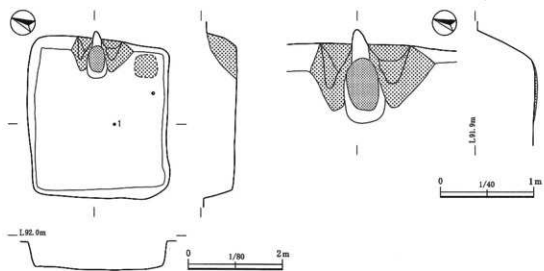


第72号竪穴住居跡

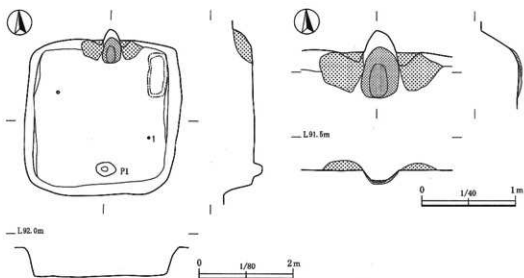
1. 暗褐色土 (L-R-B 多量混入、黒褐色土 R-B 混入)
2. 暗褐色土 (L-R-B・黒褐色土 R-B 各混入)
3. 褐色土 (L-R-B・暗褐色土 R-B・黒褐色土 R 各混入)

0 1/80 2m

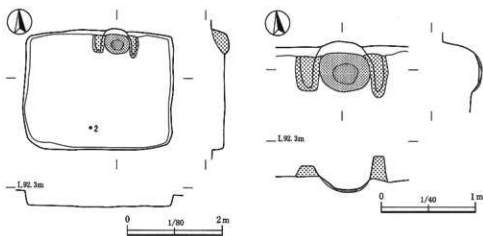
第73図 第72号竪穴住居跡・掘方・カマド



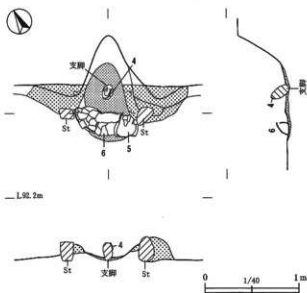
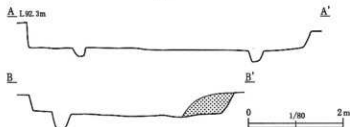
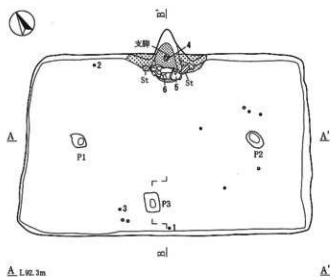
第74図 第74号竪穴住居跡・カマド



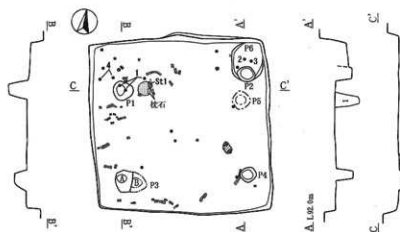
第75図 第75号竪穴住居跡・カマド



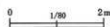
第76図 第76号竪穴住居跡・カマド



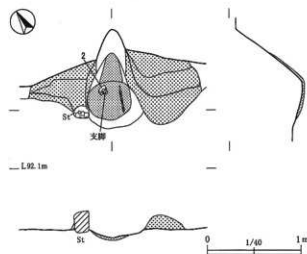
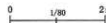
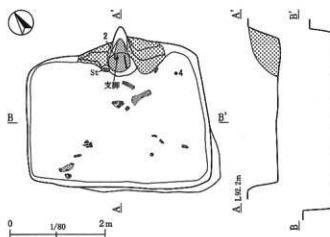
第77図 第77号竪穴住居跡・カマド



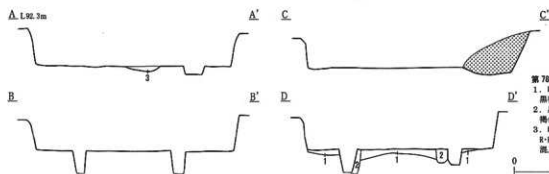
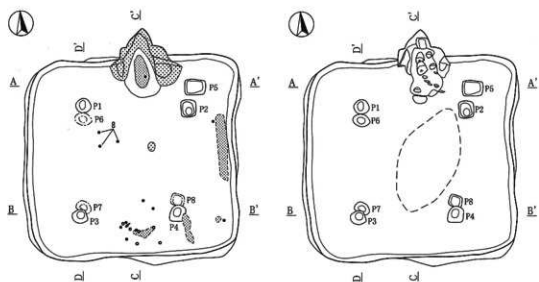
第79号竪穴住居跡
1. 暗黄褐色土 (A-B 多量混入、暗褐色土・褐色土 R-S 各少量混入)



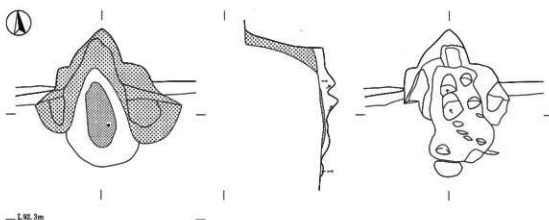
第78図 第79号竪穴住居跡



第79図 第80号竪穴住居跡・カマド



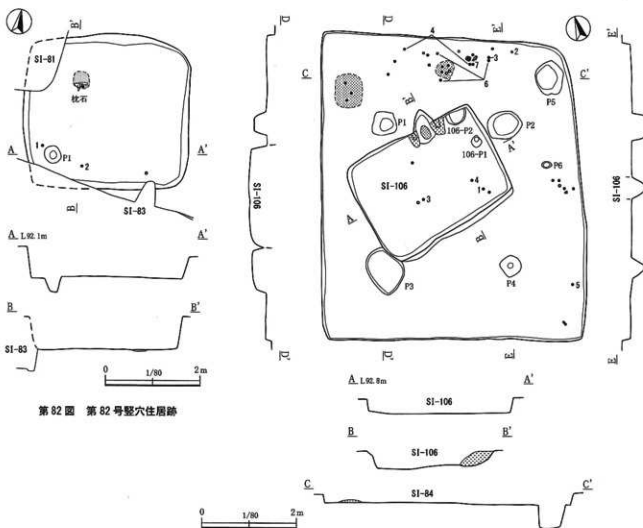
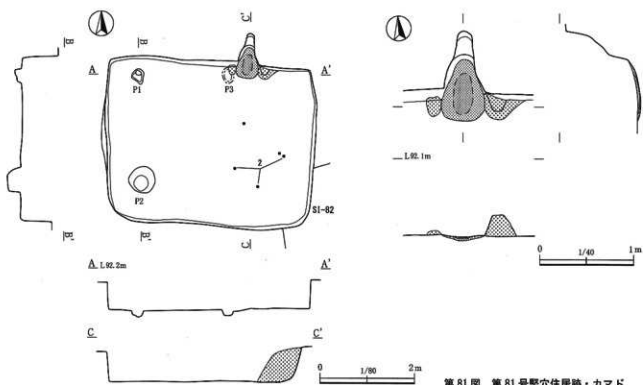
第78号壁穴住居跡
 1. 暗褐色土 (LR-B 多量混入、
 黒褐色土・褐色土 R-B 少量混入)
 2. 黒褐色土 (LR-B 暗褐色土・
 褐色土 R 少量混入)
 3. 暗褐色土 (LR-B・黒褐色土
 R-B 各少量混入、SR・HR 各少量
 混入)

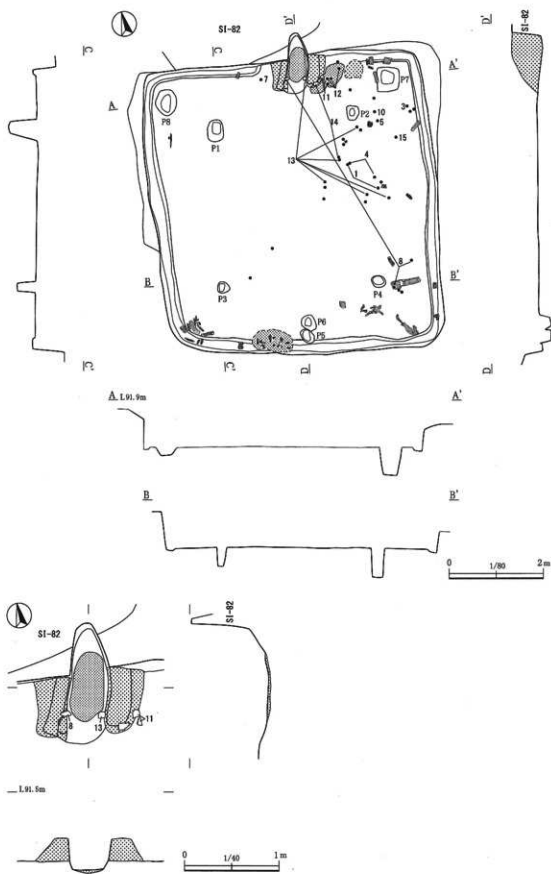


第78号壁穴住居跡カマド
 1. 暗褐色土 (LR-B・黒褐色土 R-B 各少量混入、SR・HR 各少量混入)

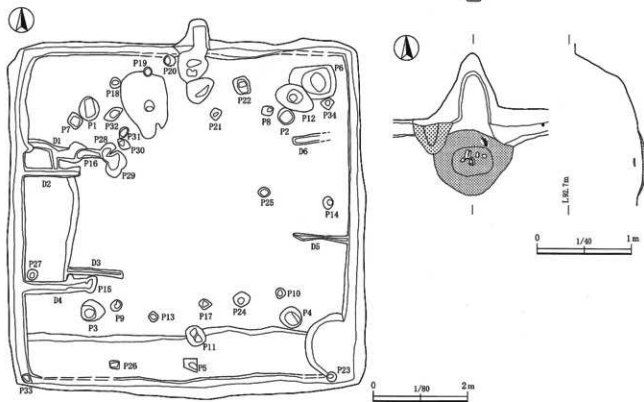
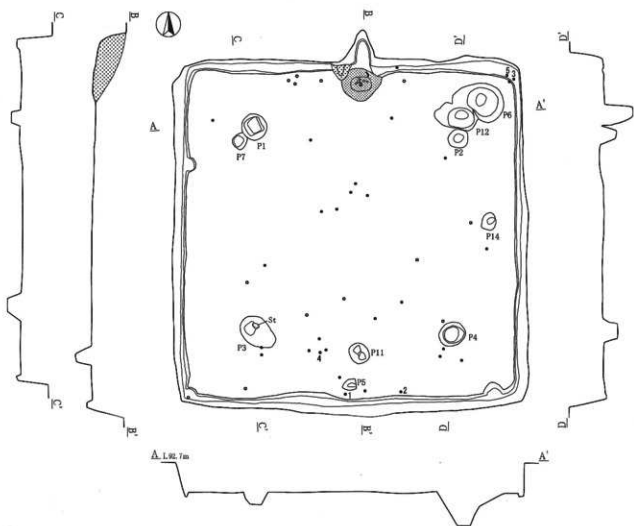


第80図 第78号壁穴住居跡・カマド

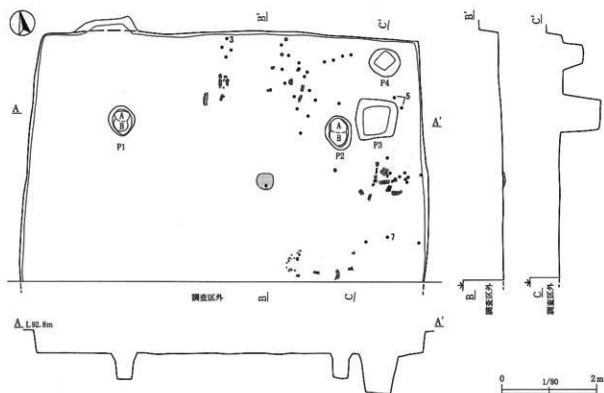




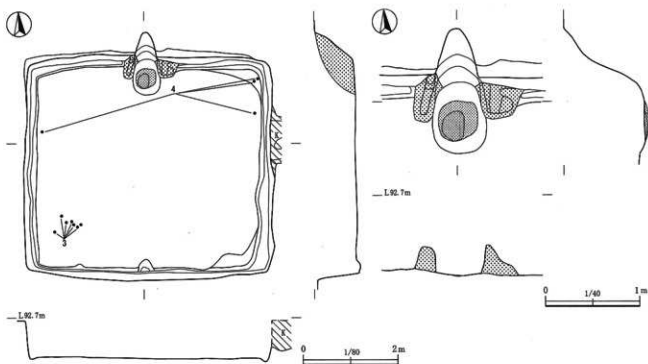
第84図 第63号壁穴住居跡・カマド



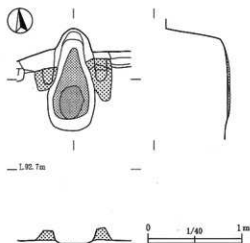
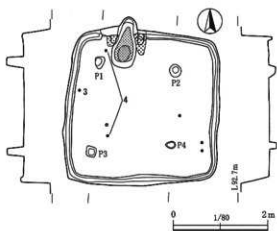
第85図 第85号竪穴住居跡・掘方・カマド



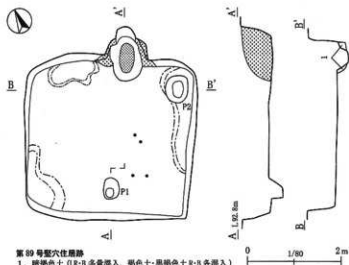
第86図 第86号壁穴住居跡



第87図 第87号壁穴住居跡・カマド

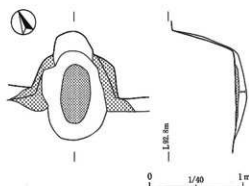


第 88 図 第 88 号竪穴住居跡・カマド



第 89 号竪穴住居跡

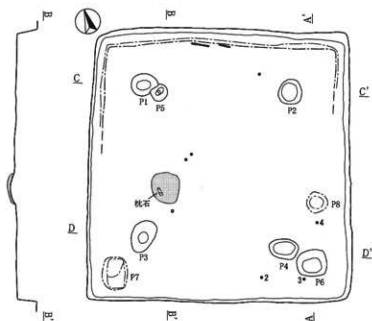
1. 暗褐色土 (R-B 多量混入、褐色土・黒褐色土 R-B 各混入)



第 89 号竪穴住居跡カマド

1. 暗黄褐色土 (R-B 多量混入、暗褐色土 R-B-SR-B-CR 各混入)

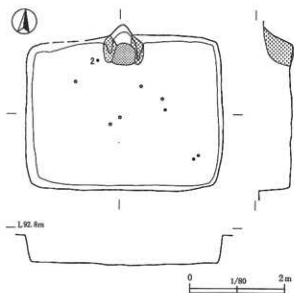
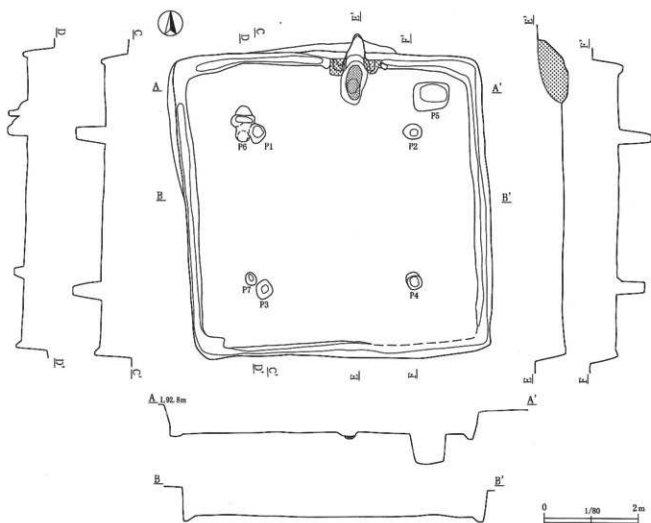
第 89 図 第 89 号竪穴住居跡・カマド



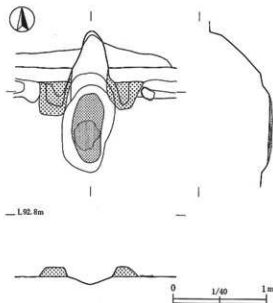
第 90 号竪穴住居跡

1. 暗褐色土 (R-B 多量混入、褐色土・黒褐色土 R-B 各混入)

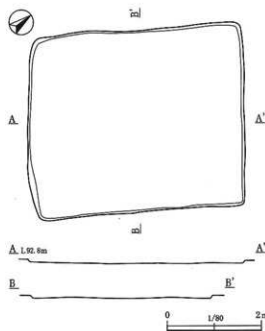
第 90 図 第 90 号竪穴住居跡



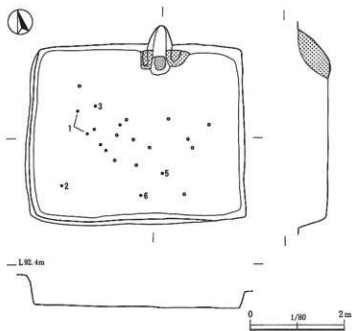
第91図 第91号竪穴住居跡



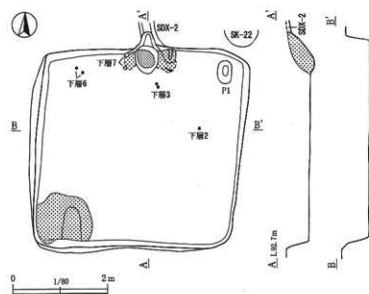
第92図 第92号竪穴住居跡・カマド



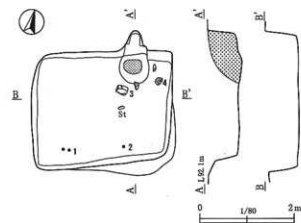
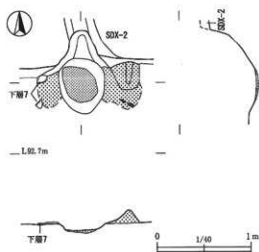
第93図 第94号竪穴住居跡



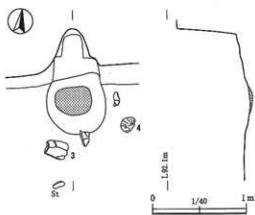
第96図 第100号竪穴住居跡

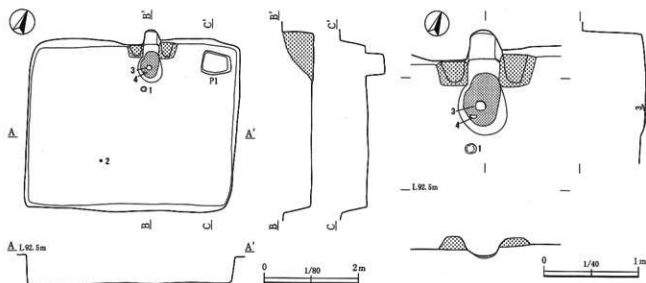


第94図 第95号竪穴住居跡・カマド

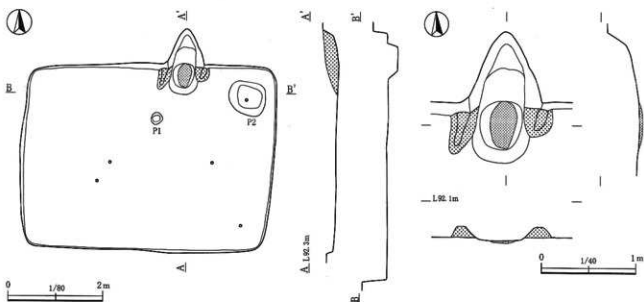


第95図 第96号竪穴住居跡・カマド

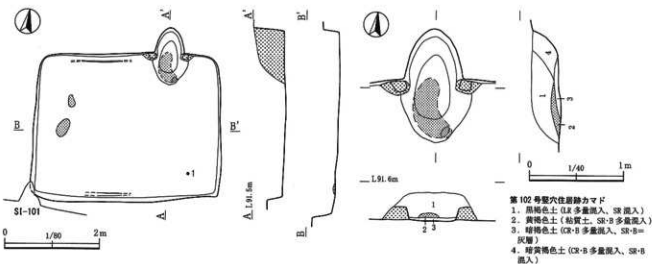




第97図 第97号竪穴住居跡・カマド

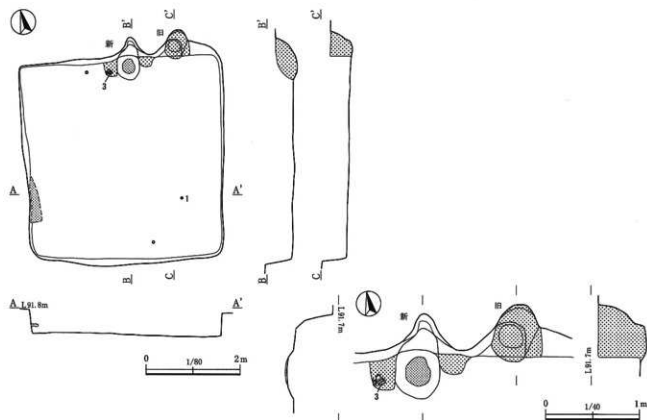


第98図 第98号竪穴住居跡・カマド

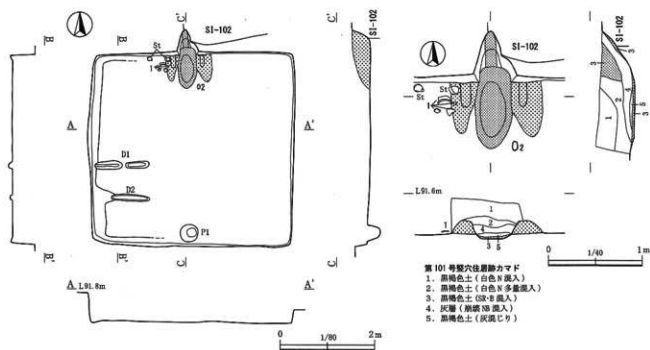


第99図 第102号竪穴住居跡・カマド

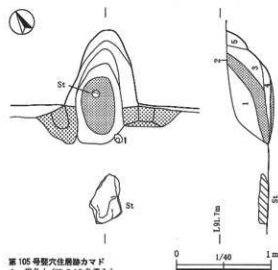
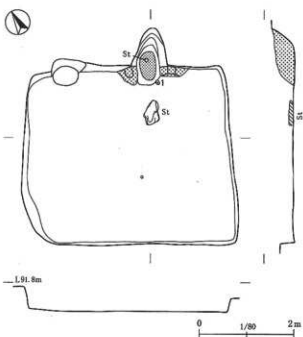
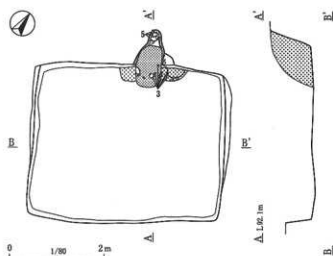
- 第102号竪穴住居跡カマド
1. 黒褐色土 (SR-B 多量混入、SR 混入)
 2. 黄褐色土 (粘質土、SR-B 多量混入)
 3. 暗褐色土 (CR-B 多量混入、SR-B 灰層)
 4. 暗黄褐色土 (CR-B 多量混入、SR-B 混入)



第100図 第99号竪穴住居跡・新・旧カマド

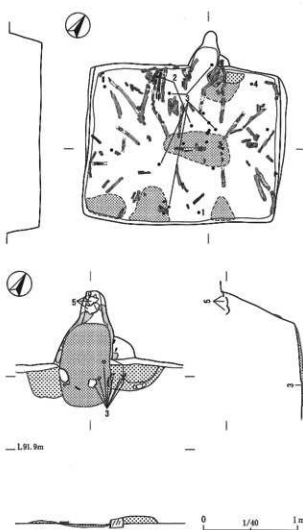


第101図 第101号竪穴住居跡・カマド

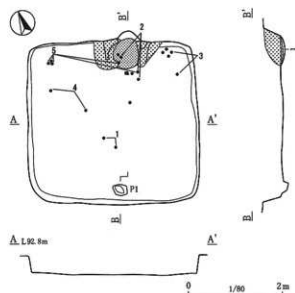


第105号竪穴住居跡カマド
 1. 褐色土 (SR-B-1R 各混入)
 2. 黄褐色土 (SR-B 多量混入)
 3. 暗褐色土 (SR-B-1R 各混入)
 4. 灰層
 5. 暗褐色土 (SR 微量混入)

第103図 第105号竪穴住居跡・カマド

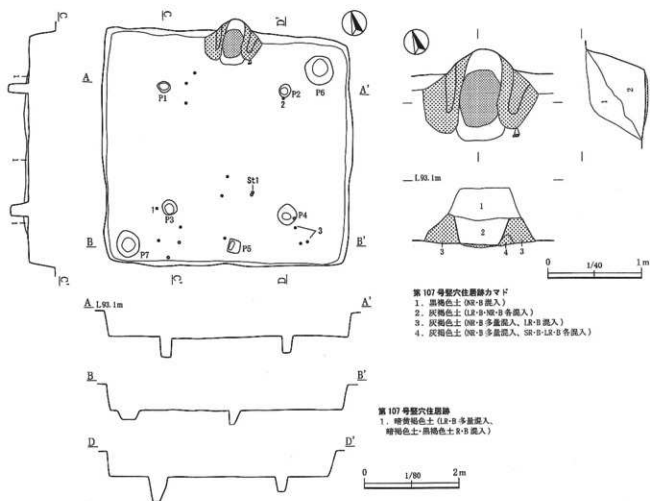


第102図 第103号竪穴住居跡・上面・カマド

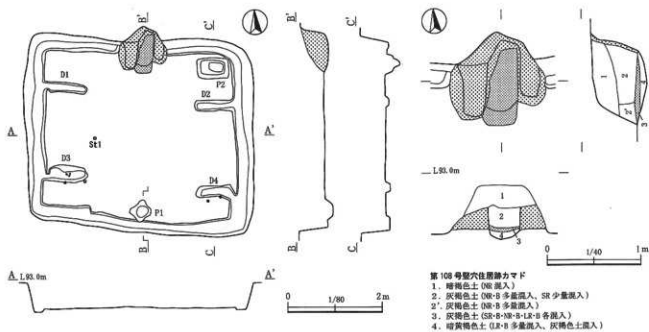


第110号竪穴住居跡
 1. 暗黄褐色土 (L-R-B 多量混入、暗褐色土 R-B-NR-SR 各混入)

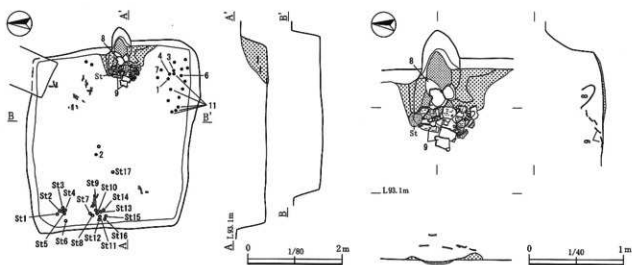
第104図 第110号竪穴住居跡



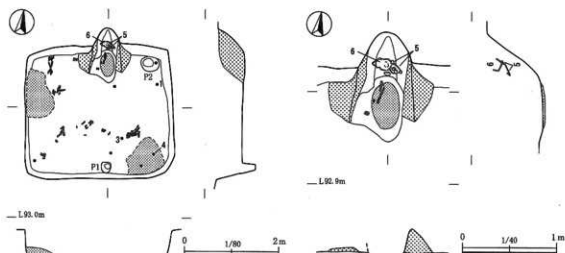
第 105 図 第 107 号竪穴住居跡・カマド



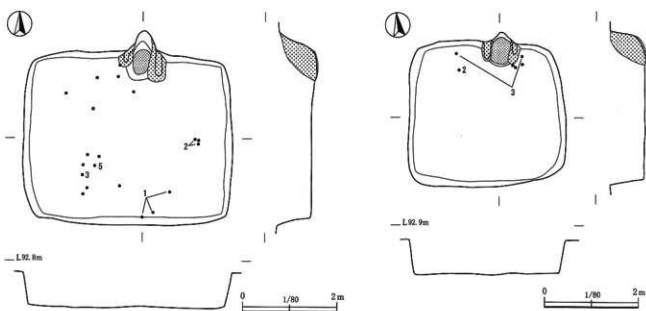
第 106 図 第 108 号竪穴住居跡・カマド



第 107 図 第 109 号竪穴住居跡・カマド

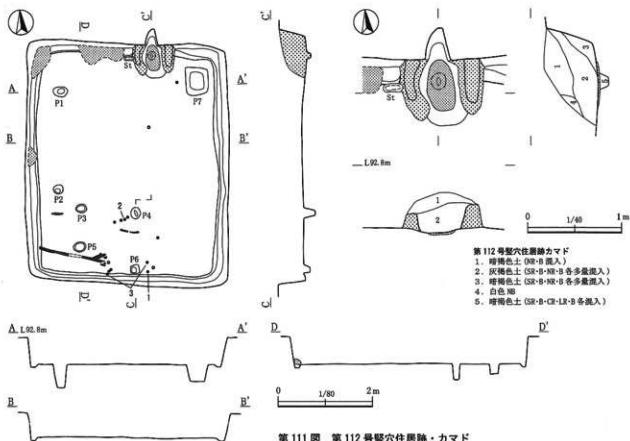


第 108 図 第 111 号竪穴住居跡・カマド

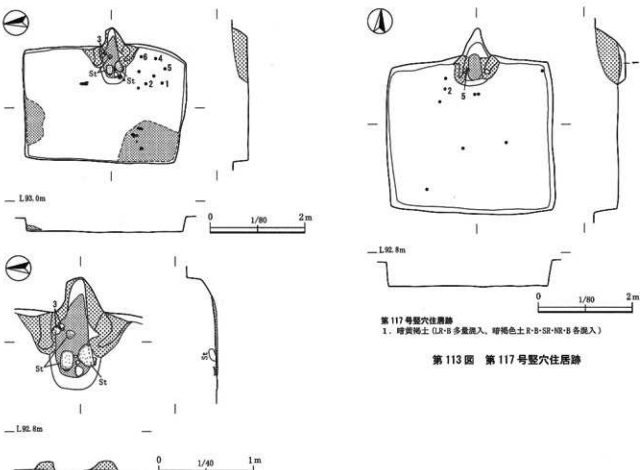


第 109 図 第 114 号竪穴住居跡

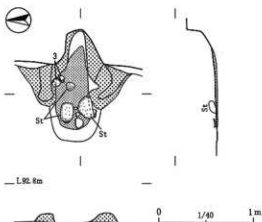
第 110 図 第 116 号竪穴住居跡



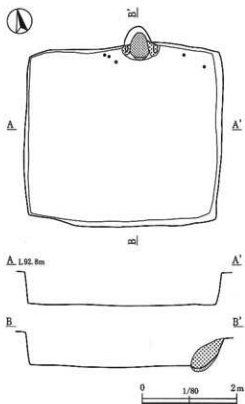
第111図 第112号竪穴住居跡・カマド



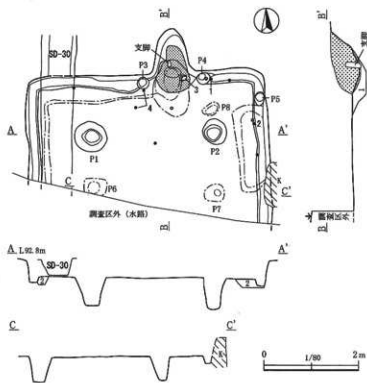
第113図 第117号竪穴住居跡



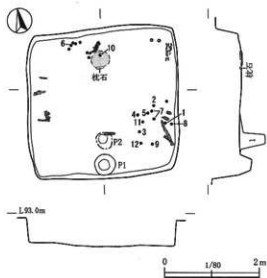
第112図 第115号竪穴住居跡・カマド



第 114 图 第 118 号竖穴住居跡

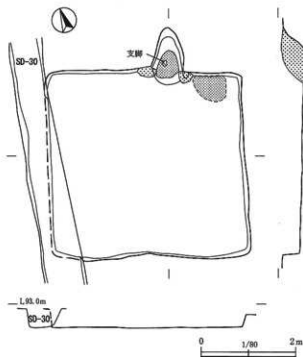


第 115 图 第 119 号竖穴住居跡
1. 増褐色土 (LR-B 少量混入、増黄褐色土・増褐色土 R-B 各混入)
2. 増黄褐色土 (LR-B 少量混入、増褐色土 R-B 少量混入)

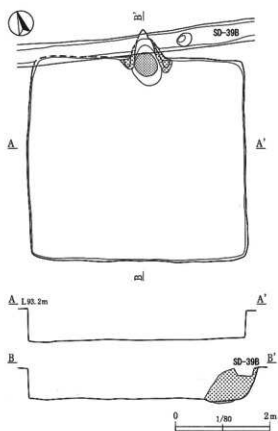


第 116 图 第 120 号竖穴住居跡
1. 増褐色土 (LR-B 少量混入、増黄褐色土 R-B 混入)

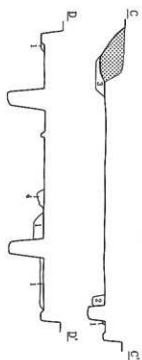
第 117 图 第 121 号竖穴住居跡



第 117 图 第 121 号竖穴住居跡

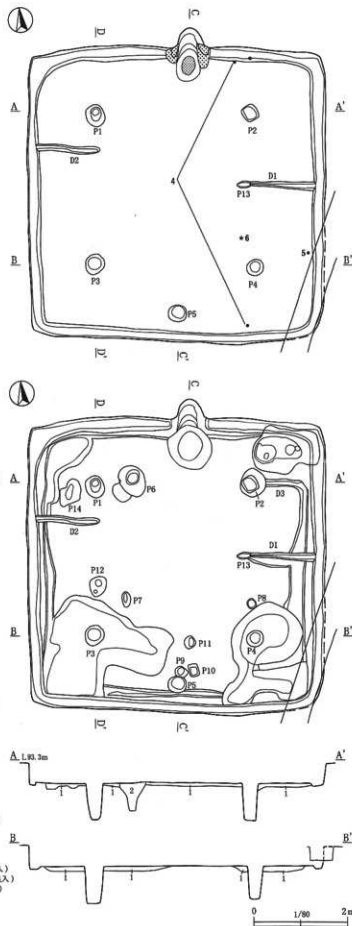


第118圖 第122号壁穴住居跡

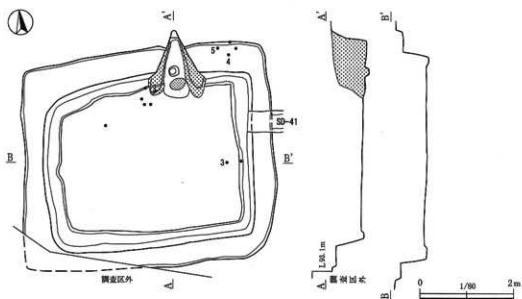


第125号壁穴住居跡

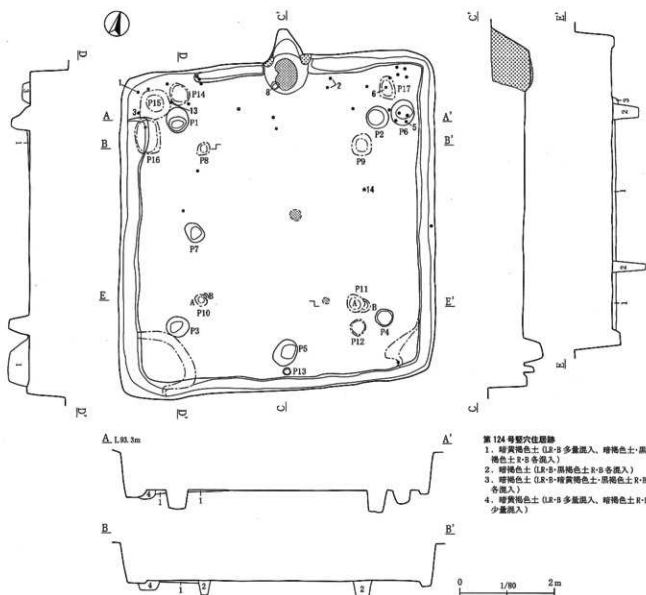
1. 暗黄褐色土 (L-R-B 多量混入, 暗褐色土 R-B 混入)
2. 暗褐色土 (L-R-B-暗黄褐色土・黑褐色土 R-B 各混入)
3. 暗褐色土 (L-R-B-暗・B-SR-黑褐色土 R-B 各混入)
4. 暗黄褐色土 (L-R-B-暗褐色土 R-B 各混入)



第119圖 第125号壁穴住居跡・掘方



第120图 第123号壁穴住居跡



第124号壁穴住居跡

1. 暗黄褐色土 (L.R-S 多量混入、暗褐色土・黒褐色土 R-S 各混入)
2. 暗褐色土 (L.R-S・暗褐色土 R-S 各混入)
3. 暗褐色土 (L.R-S・暗黄褐色土・暗褐色土 R-S 各混入)
4. 暗黄褐色土 (L.R-S 多量混入、暗褐色土 R-S 少量混入)

第121图 第124号壁穴住居跡